
モビルスーツ

ガンダムMS列伝Ⅱ

株式会社レッカ社 編著



PHP文庫

本表紙図柄Ⅱロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
本表紙デザイン＋紋章Ⅱ上田見郷



はじめに

独特な魅力を放つ 「モビルスーツ」たち

三十年の歴史をもつガンダムシリーズ。そのあいだには多数の作品が生まれ、加えて数多くの「モビルスーツ」が誕生しています。

前書の「ガンダムMS列伝」では、『機動戦士ガンダム』からつづく舞台背景である「宇宙世紀シリーズ」のガンダム4作品をとりあげました。

そこで今回は趣向を変え、各作品で独自の舞台背景を

MOBILE SUIT

もつ作品、『機動武闘伝Gガンダム』『新機動戦記ガンダムW』^{フレイグ}『新機動戦記ガンダムW Endless Waltz』(OVA)『機動新世紀ガンダムX』^{ゼロ}『Vガンダム』の5作品をとりあげ、代表的なモビルスーツを紹介しています。

モビルスーツ自体の名称が違ったり、鳥のような羽があったり、太古の発掘物だったりと、各作品でコンセプトはさまざまです。

個性豊かなモビルスーツの独特な魅力を知っていただけたら幸いです。

株式会社レツカ社 齊藤秀夫

はじめに

■第1章 機動武闘伝Gガンダム

多数の必殺技を駆使するネオジャパンの最新鋭機

ゴッドガンダム

14

ドモン・カッシュの技を正確に再現するモビルファイター

シャイニングガンダム

20

ボクサー魂で戦い続けたネオアメリカの英雄

ガンダムマックスター

24

少林寺の未来を託された暴れ竜

ドラゴンガンダム

28

華麗にしてクールに戦う気高き薔薇の騎士

ガンダムローズ

32

ネオロシアで生まれた大会屈指のパワーファイター

ボルトガンダム

36

ゲルマン忍法を使うネオドイツの強豪

ガンダムシュピーゲル

40

狂戦士へと変貌するデンジャラスビューティー

ノーベルガンダム

42

シャイニングガンダムに敗れ悪魔となった機体

ネロスガンダム

44

水中に隠されていたネオメキシコのモビルファイター

テキーラガンダム

46

復讐の鬼と化した重装級ファイター

ランバーガンダム

48

勝利にこだわるネオイングランドのスナイパー

ジョンブルガンダム

50

蘇ったネオエジプトの英雄が駆る恐怖の亡霊

ファラオガンダムⅣ世

52

巨大な壱月刀が印象的な剣士系ガンダム

ミナレットガンダム

54

前回大会でネオホンコンに優勝をもたらした強力な機体

クローンガンダム

56

射撃戦が得意なネオフランス代表の座を狙う軍用機

ミラーージュガンダム

58

ギリシャ神話の最高神を模した優勝候補の筆頭

ゼウスガンダム

60

コブラの動きを再現した異色のモビルファイター

コブラガンダム

62

盲目の暗殺者が心眼で操る驚愕の機体

マンダラガンダム

64

CONTENTS

水中では無敵の北海の雄	66
マーメイドガンダム	66
モノマネ攻撃で相手を描きさる進化師	68
ジエスターガンダム	68
対デビルガンダム用に開発された高性能機	70
ライジングガンダム	70
自己進化により変貌を遂げる悪魔のガンダム	72
デビルガンダム	72
ドモン・カッシュの前に立ち塞がるスーパーマシン	78
マスターガンダム	78
空中から猛禽のように鋭い掛かる天界の剣	82
ガンダムヘブンズソード	82
巨大なボディと大火力を誇る移動要塞	86
グランドガンダム	86
水中戦を得意とする球状の悪魔	90
ウォルターガンダム	90
デビルガンダム四天王が合体した無敵の動力炉	92
グランドマスターガンダム	92
デビルガンダムを支える忠実な下僕	94
デスアーミー	94

■第2章 新機動戦記ガンダムW^{フライング}

パイロットに必勝の策を授ける脅威のシステム	100
ウイングガンダムゼロ	100
天より降り立った猛き流星	106
ウイングガンダム	106
音もなく忍びより死をもたらす暗殺者	110
ガンダムデスサイズ	110
地獄から舞い戻った死神の幽	114
ガンダムデスサイズヘル	114
全身に銃砲とミサイルを宿した火薬庫	118
ガンダムヘビーアームズ	118
武装を強化され宇宙を駆ける弾薬庫	122
ガンダムヘビーアームズ改	122
猛烈な開発力を活かして戦場を駆けぬける二刀流使い	124
ガンダムサンドロック	124
宇宙用に改修された重戦歩兵	128
ガンダムサンドロック改	128
伝説の龍を右腕に宿し、業火を操る白兵戦機	130
シエンロンガンダム	130
双頭を得てさらなる力を宿した神の龍	134
アルトロンガンダム	134

ガンダムサンドロックにつき従う頼もしい友軍機

マグアナック

138

高性能すぎるが故に常人には扱えない伝説の機体

トールギス

140

地球圏における主力兵器となった優秀な量産機

リーオー

144

リーオーの空戦用として開発された高速ファイター

エアリーズ

146

砂漠戦でも活躍する遠距離支援砲台

トラゴス

148

深海での作業も可能な水中用モビルスーツ

パイシーズ

150

水中での格闘を得意とするカニ型モビルスーツ

キヤンサー

152

リーオーを上回る性能を有する量産型可変機

トーラス

154

最強の攻撃力を求めてつくられた青い射手

ヴァイエイト

156

究極の防御を目指してつくられた赤い守護神

メクリリウス

158

全局面に適応する無人の人形兵士

ビルゴ

160

地球の命運を背負う男が駆る脅威の機体

トールギスⅡ

162

騎士道精神をまとった決闘専用ガンダム

ガンダムエピオン

164

集中制御によって戦術的行動がとれるようになった人形兵士

ビルゴⅡ

168

■第3章 新機動戦記ガンダムW

Endless Waltz

混沌の大地に降り立ち、戦いの終わりを告げる大天使

ウイングガンダムゼロ

174

死神の鎌を振るう冥府よりの使者

ガンダムデスサイズヘル

178

すべてを撃ち尽くすダフルガトリンクガンダムの猛威

ガンダムヘビーアームズ改

180

より精悍に、よりスバルタンになった双剣の機体

ガンダムサンドロック改

182

強化され英雄神の名を得た龍のガンダム

ガンダムナタク

184

CONTENTS

新たな力を得た最古のモビルスーツ

トールギスⅢ

186

13番目の星座を名乗る叛逆の機体

サーペント

188

■第4章 機動新世紀ガンダムX

圧倒的な攻撃力を有して蘇った決戦用モビルスーツ

ガンダムX

194

凄まじいポテンシャルをもつガンダムXの後継機

ガンダムDX

200

「Gファルコン」

空を華麗に飛び回る凄腕ガンマン

ガンダムエアマスター

206

殲滅戦を得意とする陸の王者

ガンダムレオパルド

210

火力を増強した疾風のエアマスター

ガンダムエアマスターバースト

214

武装強化し宇宙戦にも対応した重爆撃機

ガンダムレオパルドデストロイ

216

ビット攻撃を駆使する純白のニュータイプ専用機

ベルティゴ

218

地獄の業火をまき散らす恐怖の暴れ馬

ガンダムヴァサゴ

220

バワフルな攻撃がもち味の重爆撃機

ガンダムアシユタロン

224

旧地球連邦軍が開発した三ツ目の量産機

ドートレス

228

巨大な光を放つ悪魔の断末魔

ガンダムヴァサゴチェストブレイク

232

宇宙でも猛威を奮う巨大ヤドカリ

ガンダムアシユタロンハーミットクラブ

234

海のハゲタカが駆る稀少な水陸両用モビルスーツ

ドーシート

236

海水中で活躍した水陸両用機

ドーシートⅢ

238

大気圏飛行もできる新地球連邦軍主力機の集大成

ドートレス・ネオ

240

大空を蹂躞する新地球連邦軍初の量産型モビルスーツ

バリエント

242

ガンダムエアマスターを仕留めた音速ファイター

ガデール

244

曲芸師のような敏捷性を誇る白い悪魔

コルレル

246

目に見えぬ刃物で敵を蹂躞する悪魔の狩人

ブリトヴァ

248

究極の防御力をもつ不死身の巨大モビルスーツ

ガブル

250

ビットモビルスーツ5機を操る驚愕のニュータイプ専用機

ラスヴェート

252

豊富な武装と高い汎用性がもち味の名機

ジエニス

254

ホバリングによる軽快な攻撃が得意な高機動量産機

セプテム

258

高いポテンシャルを誇る宇宙革命軍の傑作機

オクト・エイブ

260

長距離から爆撃する悪魔の移動砲台

グランディーネ

262

雪山を滑走する鋼鉄のスノーボーダー

ジュラック(ポラバアー)

264

全長800mを超える超巨大モビルアーマー

パトウーリア

266

第7次宇宙戦争後、宇宙革命軍が開発した最新鋭モデル

クラウダ

268

■第5章 Vガンダム

タインズ

最終戦争で旧文明に終焉をもたらしたホワイトドール

Vガンダム

274

宇宙にも進出した水陸両用の人気者

カプル

280

黒歴史に記された「ザク」に酷似した万能機

ボルジャーノン

284

作戦の図として大往生した隊長機

ギヤバン専用ボルジャーノン

286

ミリシヤが独自に改修した初のモビルスーツ

ゴドウイン

288

月の女王を守護する頼もしき親衛隊機

スモ

290

地球帰還作戦の先触れとなった偵察機

フラット

294

大火力により都市制圧で活躍した巨大な怪物

ウオドム

296

高速移動で敵を翻弄するバワフルな暴れん坊

イーゲル

298

宇宙用に開発された長距離支援用モビルスーツ

ゴッゾー

300

CONTENTS

ウィル・ゲイムの夢とともに散った哀機	302
キャノン・イルフート	302
一撃離脱戦法を得意とする高性能可変機	304
ムットウー	304
ヴァガンダムと深い因縁をもつ最強の黒歴史	306
ターンX	306
スモーを凌駕する遠距離戦闘用モビルスーツ	310
マビロー	310
元は犯罪に対処するための公安警察用モビルスーツ	312
バンデット	312
格上のスモーを2機も撃破した実力機	314
ズサン	314

COLUMN

「機動武闘伝Gガンダム」登場モビルスーツ総括 所屬国の特徴を反映して戦う	96
モビルファイター	96
「新機動戦記ガンダムW」登場モビルスーツ総括 「トールギス」からはじまった	170
モビルスーツの歴史	170
「新機動戦記ガンダムW Endless Waltz」登場モビルスーツ総括 サーベントに終わる	190
モビルスーツ開発の系譜	190
「機動新世紀ガンダムX」登場モビルスーツ総括 ドライなまでに強力で	270
兵器感を漂わせるガンダム	270
「ヴァガンダム」登場モビルスーツ総括 黒歴史の遺産が主力となった	316
正暦の戦争	316

第1章

機動武闘伝

Gガンダム

MS

MOBILE SUIT

未来世紀六十年。各国の主導權をかけて四年に一度開催されているガンダムファイト第13回大会が、今まさにはじまろうとしていた。未来世紀に入って誕生したモビルスーツは、開発競争の結果、チタン系の特殊合金「ガンダリウム合金」を使用した「ガンダム」と呼ばれる高性能機が主流となる。

各国は、ガンダムファイトに向けて接近戦に長けたガンダム「モビルファイター」を開発し、大会に投入していった。

機体の外見には世界が注目していることもあり、所属国の特徴が色濃く反映されている。モビルファイターは、まさしく国の威信を背負った代表であった。

■ モビルスーツ

巨大人型汎用兵器。もともとは、大規模建造物の作業などに使用する作業用機械だったが、軍事転用が進んだ結果、戦闘用人型兵器全般を表すようになった。

■ ガンダムファイト

地球圏における向こう4年間の主導権を賭け、地球を舞台に1年間各国のモビルファイターを戦わせる代理戦争的な大会。各国のガンダムで争われるため、ガンダムファイトと名づけられた。

■ モビルファイター

ガンダムファイト用のモビルスーツ。大会での戦闘は1対1で行われるため、白兵戦や格闘戦の機能が重視され、「ファイター」と呼ばれるようになった。

■ ガンダムファイター

モビルファイターの搭乗者。環境を破壊する輩として、嫌う人も多い。

■ DG細胞

「デビルガンダム」の構成素材。ナノマシンで構成され、無機物、有機物を問わず融合して自己増殖する。人間が感染すると肉体が強化されるが、脳まで侵食されるとゾンビ兵になってしまう。精神にも影響を与えるが、強力な精神力をもつ人物ならば制御できる。

■ シャッフル同盟

はるか古代から人類の歴史を監視し、人類の滅亡を防ぐため活動する少人数の集団。メンバーは右手に特殊な紋章をもち、資質をもつ者に継承していく。

多数の必殺技を駆使するネオジャパンの最新鋭機

GF13-017NJII

ゴッドガンダム

シャッフル
同型

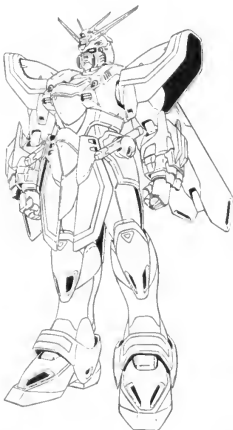
ネオジャパンが決勝大会用に向けて開発していたモビルファイター。全高16・6m。重量7・5t。搭乗者はドモン・カッシュ。

ドモン・カッシュの

新たな搭乗機

ガンダムファイト決勝大会の開始が目前に迫るなか、ギアナ高地に残っていたドモン・カッシュは、師匠マスター・アジアの駆る「マスターガンダム」と「デビルガンダム」を前にしていた。

世界の平和を乱す両機をとめるべく、明鏡止水の境地に到達したドモンは、「シャイニングガンダム」の真のスーパーモードを発動し、マスターガンダムを叩きのめす。





登場早々とんでもない使われ方をするゴッドガンダム。だが、まったく無事なあたりがすごい。

さらにデビルガンダムを破壊したそのとき、ミカムラ博士が軌道上から発射した輸送ポッドで、新たな機体「ゴッドガンダム」が到着した。

デビルガンダムを倒したドモンだったが、マスター・アジアはボロボロになったマスターガンダムで立ち上がる。ドモンは再びシャイニングガンダムで戦うが、途中でエネルギーが切れてしまい、届いたばかりのゴッドガンダムに乗りこむのだった。マスターガンダムは、残ったエネルギーで急激に再生し、最後の勝負を挑んでく

る。しかし、ゴッドガンダムはわずか一撃でマスターガンダムを撃破すると、ギアナ高地をあとにした。決勝大会への会場入りにはタイムリミットがあり、残された時間は極わずか。ゴッドガンダムは、地球の周囲に張り巡らされているビームローブに突進すると、ローブが戻る反動で急加速をかけネオホンコンを目指す。

途中、謎の機体に妨害を受けるハプニングもあったが、ゴッドガンダムは制限時間いっぱいまで、ネオホンコンに到着した。

ビームローブを使うという、なんとも無茶苦茶な

方法は、思いついたドモンにとっても一か八かの賭けであった。しかし、ネオジヤパンの最新鋭機ゴッドガンダムは、その優れた性能で見事ドモンの期待にこたえてみせたのである。

■シャイニングガンダムを遥かに超えた性能

決勝大会の前哨戦ともいえるサバイバルイレブンとは、その名の通り十一ヶ月という長期間に渡る。戦いの激しさや機体の耐久性を考慮すれば、決勝大会用に新たな機体を用意するというのは一種の賭けだったのかもしれない。

しかし、より確実に優勝を狙うべく開発されたのが、ゴッドガンダムなのである。ゴッドガンダムは、シャイニングガンダムと同様ミカムラ博士が開発した機体で、いわばシャイニングガンダムの後継機。しかし、機体性能は格段に上昇しており、ノーマル時の性能ですら、シャイニングガンダムのスーパーモードを凌ぐという。

また、シャイニングガンダムのスーパーモードに相当するものとして、ハイパーモードを搭載しており、搭乗者の「気」を機体にフィードバックすることで、従来の機体をはるかに凌ぐ出力を発揮する。ドモンが明鏡止水の境地に達すると機体が金色に輝くのは、このためなのだ。ただし、放熱量も格段に増えており、背面に大型の冷却フィン6枚を装備することになった。

武装としては、両腰に1本ずつビームソードを装備しているほか、頭部にバルカン砲4門、胸部に3連装マシンキャノン2門を搭載している。頭部バルカンが増設され、マシンキャノンが連装になったため、シャイニングガンダムに比べると若干火力は増した。しかし、もともとの攻撃力が低いため牽制の域を出ず、モビルファイター同士の戦いではそれほど役には立たなかった。

主力を担う技としては、増幅されたエネルギーを手のひらから一気に放出する爆熱ゴッドフィンガーがある。爆熱ゴッドフィンガー使用時には、前腕部に装着したプロテクターが手の甲を覆うように展開し、エネルギーの放出方向を限定。エネルギーのロスを抑えることで、威力を高めている。

実際、爆熱ゴッドフィンガーの破壊力は、シャイニングフィンガーをはるかに凌駕しており、直接触れた目標を破壊するだけでなく、火の玉を撃ち出すなど遠距離の目標も攻撃可能だ。

また、直接触れて攻撃する場合にかぎり、「ヒートエンド!」のかけ声とともに対象を爆砕する点も、



直接触れて攻撃する爆熱ゴッドフィンガーは、かけ声とともに対象を一瞬で爆砕する破壊力をもつ。

シャイニングフィンガーと異なっている。

このように、ゴッドガンダムはシャイニングガンダムよりも、はるかに高スペックを誇る機体だったが、乗り換えた当初のドモンはやや苦戦することが多かった。しかし、決勝大会が進むに連れて、徐々に性能を発揮できるようになっていったところを見ると、乗りなれていなかったことが原因だったのだろう。

■ドモンの全勝優勝を支えた数々の必殺技

決勝大会の開会式で、ドモンは決勝リーグを全勝で勝ち進むことを宣言。その言葉通り、ドモンは全勝のまま最終バトルロイヤルへ進出し、全勝優勝を達成した。

ドモンがこの偉業を達成できた要因として、ゴッドガンダムの機体性能の優秀さは無論だが、明鏡止水の境地に達したドモン自身の能力や、数々の必殺技の存在も忘れてはならないだろう。

決勝大会で最初に使用した爆熱ゴッドスラッシュは、ネオネパールの「マンダラガンダム」との戦いで使用した技。爆熱ゴッドフィンガーで発生させたエネルギーを、ビームソードに沿わせて破壊力を高めるというもので、後述のゴッドスラッシュエタيفونにも生かされている。

「ガンダムマックスター」との対戦では、分身殺法ゴッドシャドウを披露。一瞬間



ドモンとレインのふたりが放った必殺技は、過去最大の破壊力。愛のパワーでデビルガンダムを粉碎。

に10発ものパンチを繰り出す、豪熱マシンガンパンチに対し、ゴッドガンダムを10体に分身させることでパンチをすべて受け止めてしまった。次にドモンが編み出したゴッドスラッシュタイフーンは、「ガンダムローズ」のローゼスハリケーンに対するための技。爆熱ゴッドスラッシュを使いながら、ローゼスハリケーンを上回る速度で回転することで、エネルギーの渦を拡散させてしまう大技だった。

さて、数々の必殺技のなかでも特に強力なのがマスター・アジアの流派東方不敗の奥義、石破天驚拳で、強豪「ガンダムシユピーゲル」をこの技で打ち破っている。さらにマスターガンダムとの最終決戦では、石破天驚拳と爆熱ゴッドフィンガーを合わせた石破天驚ゴッドフィンガーを繰り出し、師匠超えを果たしている。

しかし、こうした無茶な必殺技を繰り出してなお機体が最後までもったのは、ドモンを支え続けたレイン・ミカムラあつてのこと。

ゴッドガンダム最後の必殺技が、ドモンとレインの、石破ラブラブ天驚拳だったのはある意味、自然なことなのかもしれない。

ドモン・カッシュの技を正確に再現するモビルファイター

GF13-017NJ

シャイニングガンダム

シャッフル
同題

ネオジャパンがガンダムファイト第13回大会用に開発したモビルファイター。全高16・2m。重量6・8t。搭乗者はドモン・カッシュ。

■シャイニングフィンガーで 初陣を飾る

いよいよ開催が目前に迫った、ガンダムファイト第13回大会。コロニーから地球の故国へ降下するガンダムが多数を占めるなか、ファイトを行うべくいち早くネオイタリヤへ降下したのが、「シャイニングガンダム」であった。

また、シャイニングガンダムの搭乗者ドモン・カッシュも、パートナーのレイン・ミカムラとともにネオイタリヤへ入国していた。





シャイニングガンダムは、その代名詞ともいえるシャイニングフィンガーで数々の戦いを制した。

ところが、降下するシャイニングガンダムを目撃した、ネオイタリアのミケロ・チャリオットは、ドモンの存在に気づき、「ネロスガンダム」で襲いかかる。

マフィアのドンらしく卑怯な手でドモンを呼び出し、ガンダムに乗るまえに倒そうと企むミケロだったが、窮地を脱したドモンはシャイニングガンダムを召喚。やむなくミケロもファイトに応じることになり、ここにガンダムファイト第13回大会が開幕した。そしてシャイニングガンダムは、シャイニングフィンガーでネロスガンダムの頭部を破壊し、初陣を勝利で飾った。

こののち、シャイニングガンダムはドモンとともに世界各地を転戦。

決勝大会の前哨戦となるサバイバルイレブンで、ネオフランスの「ガンダムローズ」やネオチャイナの「ドラゴンガンダム」といった、のちにシャッフル同盟の仲間となるライバルたちをはじめ、各国のガンダムと戦った。

このあいだ、シャイニングガンダムは、つねにドモンとともにあり、すべてを共有するよき相棒となっていた。

■ドモンの感情をエネルギーに、スーパーモードを発動

シャイニングガンダムは、ネオジャパンが第13回ガンダムファイトに向け、「ライジングガンダム」や「アルティメットガンダム」（デビルガンダム）と同時期に開発した機体。外見は第12回大会に出場した機体の流れを継承し、日本らしい鎧武者がモチーフとなっている。

搭乗者のドモンが、流派東方不敗を受け継ぐコロニー格闘技の覇者ということもあり、シャイニングガンダムはドモンが繰り出す数々の技を正確に再現する能力を有していた。

武装としては、侍の刀のように左腰に大小2本のビームソードを装備。射撃武器は、頭部にバルカン砲、胸部にマシンキャノンをもつ2門ずつ搭載しているほか、両腕に装着している箆手にビーム砲を2門ずつ内蔵している。

また、フェイスガードをはじめ、各部の放熱板を開きバトルモードに移行して放つ必殺技シャイニングフィンガーは、シャイニングガンダムの実質的な主力を担っている。シャイニングフィンガーの仕組みは、マニピュレータの指関節を伸ばすことでエネルギーを噴射し、このエネルギーを液体金属で包んで、対象にぶつけ破壊するというもの。ピンポイントで対象を破壊できることから、相手のガンダムの頭

部を破壊する、文字通り必殺技となっていた。

さらに、シャイニングガンダムには感情エネルギーシステムが搭載されており、怒りが頂点に達したとき、その感情をエネルギーとしてスーパーモードを発動できる。スーパーモードでは、シャイニングフィンガーのエネルギーをビームのように発射できるほか、シャイニングフィンガーの全エネルギーをビームソードに注ぎこんで対象を両断する、シャイニングフィンガーソードも使用できる。

ただし、スーパーモードを発動させるには相当な怒りが必要なようで、デビルガンダムと個人的な関わりから復讐を誓うドモンにしか扱えないとされていた。のちに、ドモンが明鏡止水の境地に達したことで任意にスーパーモードを発動できるようになるが、こちらは「真のスーパーモード」と呼ばれて区別されている。

シャイニングガンダムは、ギアナ高地での戦いで「ゴッドガンダム」に乗り換えるド蒙ンの盾となつたのち、残つた力でゴッドガンダムにデータを転送。最後までドモンを守り続け、その役目を終えた。



ついに「真のスーパーモード」を発動させ、圧倒的な力でマスターガンダムを叩きのめす。

ボクサー魂で戦い続けたネオアメリカの英雄

GF13-006NA

ガンダムマックスター

シャッフル
同盟

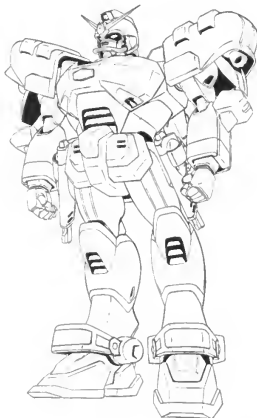
重装甲を誇るネオアメリカのモビルファイター。
全高16・3m。重量7・3t。搭乗者は、チボ
デー・クロケット。

■ボクシングの技で戦う

格闘機

ネオイタリアでの諸戦で勝利をおさめたドモン・カッシュが、次に向かったのはネオアメリカのマンハッタン。ここでは、ボクシングのコロニーチャンプでもあるネオアメリカのガンダムファイター、チボデー・クロケットが、コロニーと地球の統一戦タイトルマッチを行おうとしていた。

ドモンは、チボデーの対戦相手になりすましてリングに登場。チ





ボクサーモードに移行したガンダムマックスター。チボデー自身ボクサーということで多用された。

ボデーに不意打ちを食らわして、ガンダムファイトを申しこんだ。

観客の面前で恥をかかされたチボデーは、ドモンが挑んだガンダムファイトを受けて立つ。途中、ドモンを抹殺しようとする国防総省のモビルスーツ「マーフィー」の妨害が入るが、チボデーはドモンと協力してこれを排除。ブロードウェイで、「ガンダムマックスター」と「シャイニングガンダム」の対戦がはじまった。

ボクサーモードにチェンジしたガンダムマックスターは、ストリートでシャイニングガンダムの正拳突きと打ち合う。しかし、明らかにパワー負けしていたガンダムマックスターは、そのままシャイニングフィンガーで右腕を破壊され、敗北するのだった。

しかし、ドモンがとどめを刺さなかったためチボデーは失格にはならず、引き続きサバイバルレブンを戦い抜いていくことになる。

ドモンとチボデーはともに熱血タイプだったため、何か通じるものがあつたようだ。これ以後、ドモンのシャイニングガンダムとチボデーのガンダムマックスターは、よきライバルとなつていった。

さらにその後、チボデーがシャッフル同盟の紋章を受け継いだことから、チボデーとガンダムマックスターはドモンの盟友となる。

■機動性が格段にアップするボクサーモード

ガンダムマックスターは、本場アメリカではベースポール以上に人気があるといわれるアメリカンフットボールのプロテクターを模した姿をしている。

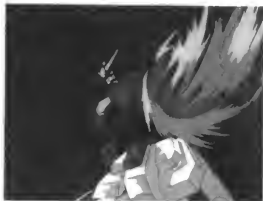
武装には、両腰に射撃武器のギガンテックマグナムを一丁ずつ下げているほか、両腕部にマニピュレータを保護するためのファイティングナックルを装備。左手に大型のシールドも装備しているが、劇中では移動用のトランスポーターとして使用していた。

ガンダムマックスターは重装甲が特徴のひとつだが、搭乗者のチボデーがボクシングで百戦百勝の成績をもつコロニーチャンピオンということからか、ボクサーモードへも移行できる。

ボクサーモードでは胸部装甲がバージされ、防御力が低下する代わりに機動性が



大型のシールドは、もっぱら移動用として使用。空中を飛んだり海上を滑ることもできる。



ギアナ高地で修得した必殺技、バーニングパンチ。
デスアーミーとの戦いでさっそく使っていた。

向上。肩のアーマーが外れてグローブのように拳に装着され、アーマー内部のスラストによってパンチ力が大幅にアップする。

必殺技としては、パンチを繰り出して竜巻を発生させ対象を吹き飛ばす、サイクロンパンチがある。ドモンとの初対戦でマフイーが放ったミサイルを吹き飛ばしていたほか、ギニア高地でドモンと対戦した際にも使用していた。

また、危機に瀕したクルーたちを救うために編み出した、炎を放って目標を打ち砕くバーニングパンチや、一秒間に10発ものパンチを放つという豪熱マシガンパンチも使用する。

決勝大会では、ドモンの「ゴッドガンダム」との対戦で、チボデーが明鏡止水の境地に達し、機体が金色の輝いて性能をフルに発揮していた。

チボデーが血気盛んで先走りがちなため、デビルガンダムとの戦いなどでも本機は最初に攻撃を受けてダウンする役回が多い。

しかし、うかつな主のために何度も窮地に陥りながらも戦い抜けたのは、性能が優れていた証といえるだろう。

少林寺の未来を託された暴れ竜

GF13-011NC

ドラゴンガンダム

シャッフル
同型

格闘戦を得意とするネオチャイナのモビルファイター。全高16・4m。重量7・4t。搭乗者はサイ・サイシー。

■ゴッドフィンガーを 打ち破る力

兄キョウジ・カッシユの手がかりを求め、ネオチャイナを訪れたドモン・カッシユは、そこで盗賊団とともに村を襲う「ドラゴンガンダム」を目撃する。

もともとドラゴンガンダムの搭乗者は、武術で名高い少林寺の後継者サイ・サイシーだった。しかし、ネオチャイナコロニーから地球へ向かう途中、事故に遭って別々の地点に降下してしまい、ド





金色に輝くドラゴンガンダムは、最高奥義の真流星
胡蝶剣で勝負をかける。

ラゴンガンダムを盗賊団に奪われてしまっていたのだ。

困ったサイ・サイシーは、ドラゴンガンダムと対戦するために盗賊団のアジトへ向かうドモンと出会い、ドモンを上手に利用することでドラゴンガンダムを奪還。事情を知ったドモンと、改めてガンダムファイトを開始する。

ドラゴンガンダムは、すばやい動きと棒の先に旗状のビームを形成するフェイロフフラッグで、シャイニングガンダムを幻惑。しかし、気配を悟られシャイニングガンダムのシャイニングフィンガーを食らいそうになるが、弁髪刀で相討ちを狙い、引き分けにもちこんだ。

これ以降、ドラゴンガンダムはサバイバルイレブンで、DG細胞に感染した「ファラオガンダムIV世」と戦った以外、あまり大きな活躍はない。ただ決勝大会では、「マーメイドガンダム」や「ゴッドガンダム」と激戦を繰り広げている。

特に「ゴッドガンダム」との対戦は、ようやく本気になったサイ・サイシーが明鏡止水の境地に達したことから、熾烈なものとなった。

この戦いでは、ドラゴンクロードゴッドガンダムを締め上げたドラゴンガンダムが優勢に戦っていたが、ゴッドガンダムにハイパーモードで腕を引きちぎられてしまふ。しかし、ここでドラゴンガンダムは、両腕を破壊されながらもなお弁髪刀と蹴り技で怒涛の攻撃を仕掛け、底力を見せつける。

さらに、爆熱ゴッドフィンガーを仕掛けるゴッドガンダムに対し、最高奥義、真・流星胡蝶剣を放って右腕を粉碎する大健闘を見せるも反撃はここまで。最後は左腕のゴッドフィンガーを食らって力尽きた。

ゴッドガンダムに敗北はしたが、爆熱ゴッドフィンガーを打ち破ったこの一戦は、大会屈指の名勝負だった。ドラゴンガンダムの戦いぶりは、応援に来ていたネオチヤイナ一行の心を動かし、サイ・サイシーは総師から少林寺再興を約束されるのだった。

■爆熱ゴッドフィンガーを破った唯一の機体

ドラゴンガンダムは、少林拳の使い手であるサイ・サイシーの動きをトレースするため、機動性と柔軟性に富んだ機体となっている。

一番の特徴は、竜をかたどった伸縮自在の腕。つかんだものを碎く強靱な握力だけでなく、相手に巻きつけて動きを封じることでもできるほか、先端からはドラゴン

ファイアと呼ばれる炎を放射する。

このほか、後頭部から伸びた弁髪刀と肩部アーマーや背面に装備している12本のフェイロンフラッグがある。弁髪刀は、相手と斬り結びながら第三の腕として機能するもので、攻撃の幅を広げることができる武器だ。

フェイロンフラッグは旗状のビームを形成する棒で、目標をとり囲んで動きを封じドラゴンファイアを浴びせる必殺技、宝華教典・十絶陣で使用。劇中ではファイラオガンダムⅣ世との戦いで使用し、強烈な炎で機体を焼き尽くしていた。また、2本を連結すればリーチのある打撃武器に、先端にビームで矛先を形成すれば槍としても機能する。そのほか、旗の部分で敵のビーム攻撃を防いだり、目くらましとして使うなど、非常に幅広い用途がある武器であった。

ドラゴンガンダムは、ゴッドガンダムの決め技である爆熱ゴッドフィンガーを唯一破った機体。サイ・サイシーは最年少の選手であり、まだまだ力は伸びていくはずで、本機とサイ・サイシーのコンビはいずれ優勝する可能性を秘めているのだ。



フェイロンフラッグは直接相手を攻撃するだけでなく、行動を制限したり防御にも使用できる。

華麗にしてクールに戦う気高き薔薇の騎士

GF13-009NF

ガンダムローズ

シャッフル
同盟

遠隔攻撃兵器ビットを搭載したネオフランスのモビルファイター。全高16・2m。重量7・2t。搭乗者はジオルジュ・ド・サンド。

■優雅に戦う

ネオフランスの星

ネオフランスのパリ市外。エツフェル塔を望むセーヌ川のほとりで、ネオフランスの「ガンダムローズ」とネオキューバの「アラクノガンダム」が、まさにファイトをはじめようとしていた。

ところがそこへ、ネオジャパンの「シャイニングガンダム」が乱入。搭乗者のドモン・カッシュは、ガンダムローズのジオルジュ・ド・サンドに対して「先にファイ





シャイニングガンダムとの初顔合わせでは、ジョルジュを肩に乗せたまま攻撃をあっさりいなした。

トをしろ」と言い出し、異を唱えたアラクノガンダムを一撃で倒してしまった。

ドモンの行為に呆れたジョルジュは、ファイトを拒否。ガンダムローズは、突っかかるシャイニングガンダムを華麗にいなして去っていった。

だが、ネオフランスの姫君マリアルイゼが、ジョルジュを振り向かせようとドモンに偽装誘拐をもちかけたことから、ジョルジュとガンダムローズはシャイニングガンダムと対戦することになる。

ところが、対戦中に崩れかかっていたエッフェル塔に被害がおよび、現場にいたマリアルイゼとレイン・ミカムラが窮地に陥る。これに気づいたジョルジュは、勝負を捨てて倒れるエッフェル塔を受け止め、対戦は引き分けとなった。

この後、ドモンがネオイングラランドのジェントル・チャップマンと戦った際、居合わせたジョルジュがガンダムローズで協力。ドモンが修行しているギニア高地を訪れるなど、ジョルジュとガンダムローズはドモンにとって近しい存在になっていく。

決勝大会では、ジョルジュは新たな必殺技を編み

出してドモンとの対決に備えるが、ネオフランスの方針で試合を放棄させられた。

しかし、納得いかないジョルジュは勝手にガンダムローズをもち出してドモンと対戦。勝負には敗れたものの、ジョルジュはこの戦いで明鏡止水の境地に達し、以後ガンダムローズの性能をフルに引き出せるようになった。

格闘中心で熱い戦いをする機体が多いなか、ガンダムローズの戦い方はどこかクールであった。これは戦い方に優雅さを求める、ジョルジュの影響だろう。

■ビットを華麗に操る伝説のナイト

ガンダムローズは、フランス史上の英雄ナポレオンを思わせる姿をしている。搭乗者のジョルジュ・ド・サンドが貴族ということもあって、どこか優雅さを感じさせる機体だ。

自ら騎士を名乗り、フェンシングを得意とするジョルジュが搭乗者であって、メインの武装はシユバリエサーベル。射撃武器は、頭部にバルカン砲を2門装備しているほか、左肩に装備しているマント状のシールド内部に無数のローゼスビットを搭載している。

ビットとは、搭乗者の脳波で遠隔操作する小型砲台で、目標を他方向から同時に攻撃できるという優れた武器だ。ビットを搭載しているモビルファイターは珍しく、

ほかにはネオポルトガルの「ジェスターガンダム」に見られるくらいだろうか。

ローゼスピットは、ひとつひとつが薔薇の花を模している。戦いですらあくまで優雅にという、ジョルジュのこだわりが表れているのだろう。

また、ローゼスピットは直接相手を攻撃するだけでなく、展開したローゼスピット同士を電流のようなもので繋ぎ、形成した磁場で敵の動きを封じる、ローゼスクリーマーという必殺技でも使用される。

さらに、ジョルジュは、多数のローゼスピットで目標をとり囲み、回転させつつ飛ばすことでエネルギーの渦をつくり出して動きを封じる必殺技、ローゼハリケーンも編み出していた。

ほかにも、ランタオ島で「グランドガンダム」と戦った際には、ローゼスピットで岩を崩して相手の動きを止める場面もあった。

万能なローゼスピットを搭載しながら、ガンダムローズはシュバリエサーベルを使うことも多かった。ジョルジュは、自身が重んじる騎士道精神や祖国に対する思いを、本機で表現していたのであろう。



勝負への執念を燃やすジョルジュは明鏡止水の境地に達し、ガンダムローズもそれに応えて金色に輝く。

ネオロシアで生まれた大会屈指のパワーファイター

GF-3-013NR

ボルトガンダム

シャッフル
同僚

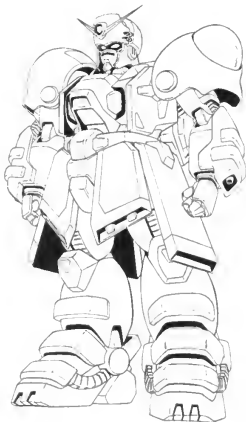
全機体中最高のパワーを誇る、ネオロシアのモビルファイター。全高17・3m。重量8・9t。搭乗者はアルゴ・ガルスキー。

■強靱なボディと 圧倒的なパワー

ドモン・カッシュは、ガンダムファイターを求めてネオロシアを訪れるが、いきなり収容所へ収監されてしまった。

なんと、ネオロシアは自国へやってきた他国のガンダムファイターを捕らえ、そのガンダムを回収。最新技術を取り出して、自国のガンダム製造にフィードバックしていたのである。

ドモンは、収容所にいた四人の





シャイニングガンダム戦では腕をへし折り、尋常ならざるパワーを見せつけた。

手引きで脱走に成功するが、海上に出たところでネオロシアの「ポルトガンダム」の追跡を受ける。このポルトガンダムの搭乗者こそ、ドモンを手引きした囚人であり、ネオロシアのガンダムファイター、アルゴ・ガルスキーだったのだ。

そこへ、ドモンのパートナーであるレイン・ミカムラが、「シャイニングガンダム」のコアランダー（移動用ビークル）で到着。ドモンはシャイニングガンダムを召喚し、ポルトガンダムとのガンダムファイトがはじまった。

ファイト開始と同時に攻めこむシャイニングガンダム。しかし、ポルトガンダムは微動だにせず、逆にシャイニングガンダムの左腕をたやすくへし折ってしまう。

ポルトガンダムは、シャイニングフィンガーを頭部に受けそうになるも、ドモンが戦闘不能になったため引き分けに終わる。

特別な技をもたないポルトガンダムだが、強靱なボディと圧倒的なパワーという、基本性能そのものが武器であることを見せつけた一戦となった。

また、決勝大会での「ゴッドガンダム」との戦い

では、炸裂ガイアクラッシャーを放つことであえてゴッドフィンガーを使用させ、その腕の破壊を狙うという二段構えの戦法にでた。

この戦法は成功するかに思えたが、炸裂ガイアクラッシャーを放つ際、脚にかかる負担に機体が耐えきれなくなり、損傷して敗北した。

この後、ボルトガンダムは「ガンダムヘブンズソード」や「グランドマスターガンダム」との戦いで活躍。シャッフル同盟のメンバーとともに戦い抜き、「デビルガンダム」の打倒に貢献した。

■単純な技だからこそ、効果は絶大

前述したようにボルトガンダムは、捕獲した各国のガンダムの技術を流用してつくられた機体である。

重厚なフォルムが示すとおり、生半可な攻撃は一切通じないほど厚い装甲をもち、今大会随一といわれる驚異的なパワーによって高い機動力を維持している。この強力なパワーを生み出しているのが、機体各所に搭載された独立駆動機関のビクトルエンジンで、総合的な出力は通常のモビルファイターの2倍にもおよぶという。

ボルトガンダムの武装は、頭部に搭載したバルカン砲4門と、左肩に装着された巨大な鉄球。この鉄球は高速で撃ち出すことができ、目標に向けて直接発射するだ

けだが、かなりの破壊力を有している。

この鉄球は、両腕部に1本ずつ収納されたハンマーグリップとビームチェーンで繋ぐことも可能。グリップを握って振り回すことで生じる遠心力に、鉄球の質量を乗せて相手に叩きつける打撃武器グラビトンハンマーとして機能する。原理は単純かつ原始的だが、その効果は絶大といえるだろう。

また、チェーンを接続した鉄球を重りとして、目標にチェーンを巻きつけることも可能で、空中を飛び回る「ガンダムヘブンスソード」を地面に引きずり下ろすという場面もあった。

当初、ポルトガンダムは一切必殺技をもっていなかった。しかしギニア高地での修行を経て、アルゴが大地を殴りつけて隆起させた岩盤で敵を閉じこめる炸裂ガイアクラッシュヤーを体得。ポルトガンダム唯一の必殺技となった。

ロシアのお国柄なのかポルトガンダムは、無骨で華がない印象を受ける機体である。しかし、怪力を誇るアルゴの能力を最大限に活かせる機体だったのは間違いない。



ガンダムヘブンスソードとの戦いでは、ドラゴンガンダムとの見事な連携で撃破した。

ゲルマン忍法を使うネオドイツの強豪

GF13-021MG

ガンダムシユピーゲル

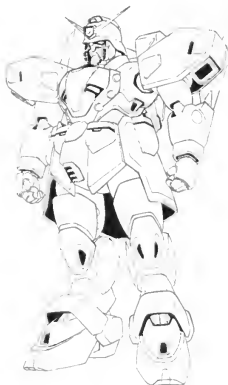
ゲルマン忍法を再現できる、ネオドイツの高性能モビルファイター。全高16・3m。重量7・3t。搭乗者はシユバルツ・ブルーダー。

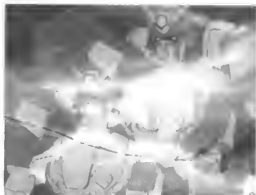
■驚異的な性能を生かし

ドモン・カッシュを導く

シンジユクシティで、ドモン・カッシュは拳法の師匠マスター・アジアと再会する。しかし、かつての師は「デビルガンダム」の手先と成り果てており、ここでドモンはマスター・アジアの「マスターガンダム」に戦いを挑む。

このとき、返り討ちにあつてピンチとなったドモンを救ったのが、シユバルツ・ブルーダーの「ガンダムシユピーゲル」だった。





ガンダムシュビーゲルのゲルマン忍法をまえに、さすがのマスター・アジアも動揺を隠せなかった。

マスターガンダムと互角に戦う本機。シュバルツにうながされてデビルガンダムを倒そうとするドモンだったが、心に迷いがあつたためデビルガンダムをとり逃がしてしまふ。そして、マスターガンダムも去っていく。だが、このあともガンダムシュビーゲルとシュバルツは、ドモンの行く先々に現れ、いわば第二の師匠としてドモンを導いていくのであつた。ガンダムシュビーゲルのメイン武装は、両腕に取り付けられたシュビーゲルブレード。機体を高速回転させつつシュビーゲルブレードで斬りつける必殺技「シユトルム・ウント・ドラック」は、強固な岩盤をもたやすく斬り裂くほどだ。ほかにも、相手の動きを封じるアイアンネットや、苦無型の投擲武器メツサーグランツを装備している。搭乗者であるシュバルツは、実はドモンの兄キョウジ・カッシュの心をコピーした、DG細胞によるアンドロイドである。しかし、ガンダムシュビーゲルは人ならざるシュバルツが使うゲルマン忍法を、正確にトレースできるほど高性能な機体だった。シュバルツがたびたびドモンを導いていったのも、本機の性能あつたからこそである。

狂戦士へと変貌するデンジャラスビューティー

GF13-050NSW

ノーベルガンダム



バーサーカーシステムを搭載したネオスウェーデンのモビルファイター。全高16・2m、重量7・0t。搭乗者はアレンビー・ピアズリー。

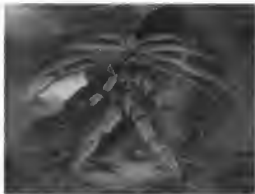
■脅威の

バーサーカーモード

セーラー服を着ているかのような姿の「ノーベルガンダム」は、ネオホンコンの決勝大会に勝ち残ったなかでは無名であった。

しかし、強豪ネオロシアの「ボルトガンダム」を、華奢な機体ながらわずか48秒で打ち破り、にわかに注目の的となる。

搭乗者のアレンビーは十代の若い女性だったが、ネオスウェーデン宇宙軍少尉というれっきとした



誘導波の照射により、バーサーカーモードにチェンジ。ゴッドガンダムに襲い掛かった。

軍人で、軍隊式格闘術に通じているという本格派だったのである。

ノーベルガンダムは新体操の動きをとり入れており、ノーベルフラフープやビームリボンを武器に戦う。恐らく、新体操はアレンビーの特技でもあるのだろう。しかし、本機の最大の秘密は搭載されたサブリミナルシステムにある。外部から誘導波を照射することで、ノーベルガンダムはバーサーカーモードへチェンジ。パイロットの潜在戦闘能力を、120%引き出すのだ。

しかし、搭乗者の正気を失わせる効果もあるため、アレンビーはこのシステムを嫌っていた。ドモン・カッシュの「ゴッドガンダム」との試合では、バーサーカーモードを使わずほぼ互角に戦っており、敗れはしたがドモンを苦しめている。

なお、試合後アレンビーはドモンと意気投合。のちに、タッグマッチで組んだり、特訓につき合うなど、ノーベルガンダムとアレンビーは、ドモンにとって第二のパートナーというべき存在になっていく。ドモンが決勝大会で全勝できたのも、ノーベルガンダムとアレンビーの協力があつたからこそなのだ。

シャイニングガンダムに敗れ悪魔となった機体

GF13-055NI

ネロスガンダム

脚部に搭載したヒームが特徴の、ネオイタリアのモビルファイター。全高16・2m。重量7・0t。搭乗者はミケロ・チャリオット。

■開幕戦直後に敗れ去る

ガンダムファイト第13回大会をまえに、地球へ旅立つ無数のガンダム。そのなかで、ネオジャパンの「シャイニングガンダム」はネオイタリアへ降下し、ドモン・カッシュもネオイタリアの地へと入っていた。

住民が避難して人気のなくなつたホテルに泊まろうとするドモン。そこへ突然現れ襲ってきたのが、ネオイタリアの「ネロスガンダム」





必殺技の銀色の足は付近の建物をまとめて貫通するほどの破壊力があり、周囲への被害も甚大だった。

とミケロ・チャリオットだった。

ネロスガンダムの主武装は、左右の脚部に搭載された16基のサテリコンビームで、必殺技である銀色の足はサテリコンビームを収束したものである。そのほか、頭部にバルカン砲、首のつけ根にビーム砲を各2門ずつ搭載。白兵戦用武器は装備しておらず、射撃戦をメインとする機体であった。

マフィアのボスでもあるミケロは、ドモンと知り合った子供を人質にとるなど、ドモンをガンダムに乗せないまま排除しようと画策した。しかし、結局ガンダムファイトで決着をつけることになる、必殺技の銀色の足がシャイニングガンダムに通じず、頭部を破壊されて敗北となった。

ガンダムファイト国際条約では、頭部を破壊された時点で搭乗者は失格となり、以後のファイトには参加できないことになっている。しかし、ネロスガンダムはのちに「デビルガンダム」と遭遇してDG細胞を植えつけられ、マスター・アジアの手ごまとして登場。新たな機体「ゴッドガンダム」に乗り換えたドモンと、再び戦うことになるのであった。

水中に隠されていたネオメキシコのモビルファイター

GF13-049NM

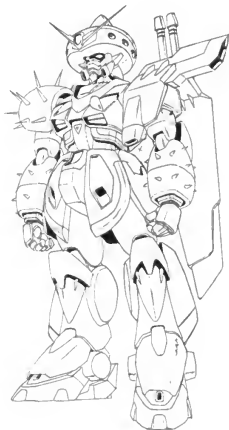
テキーラガンダム

水中戦を得意とするネオメキシコのモビルファイター。全高16・5m。重量7・7t。搭乗者はチコ・ロドリゲス。

■チコ・ロドリゲスの選手生命とともに海中に没する

「デビルガンダム」と兄キヨウジ・カツシユの行方を追う、ドモン・カツシユ。主だった国々での調査は空振りに終わり、ドモンはネオメキシコへとやってきた。

ドモンは「テキーラガンダム」とその搭乗者を探しはじめるが、ガンダムファイターのチコ・ロドリゲスは余命わずかな妹ジーナとひっそり暮らすため、テキーラガンダムを海中に隠していた。





シャイニングガンダムにビームトライデントで突きかかるが、勝負は一瞬でついてしまった。

また、行方をくらましていたチコは祖国からも追跡を受けており、対戦を申しこみに現れたドモンを殺そうとするなど、かたくなにガンダムファイトを拒む。一度ガンダムファイトを受けてしまえば発見されることは免れず、妹と穏やかな生活を送ることができなくなってしまうからだ。しかし、ドモンも引き下がるわけにはいかず、デキーラガンダムは最終的に「シャイニングガンダム」と戦うことになる。

デキーラガンダムは、メキシコといえば誰もが思い浮かべるソンブレロ風の頭部が印象的な機体。メイン武装は左背面に装備している2本のビームトライデントで、海中や敵の頭上から突き刺す攻撃を得意とする。また、右肩や腕には自生するサポテンをモチーフとしたスパイクアーマーが取り付けられており、体当たりなどでもダメージを与えることができる。

シャイニングガンダムとの戦いでは、果敢にビームトライデントで突きかかるも、ビームソードで両腕を斬り落とされた。そして、チコが試合で死んだことにしようと考えたドモンにより、頭部をシャイニングフィンガーで破壊されて海中に没した。

復讐の鬼と化した重量級ファイター

GF13-037NCA

ランバーガンダム



ネオカナダのパワー型モビルファイター。全高17・0m。重量8・5t。搭乗者は、元宇宙刑事のアンドリュー・グラハム。

■ボルトガンダムと

互角のパワーを持つ機体

ネオメキシコでの戦いを終えたドモン・カッシュ。次に訪れたネオカナダで、「ボルトガンダム」打倒を誓うアンドリュー・グラハムと出会う。

ドモンは「シャイニングガンダム」を呼び出してガンダムファイトを挑むが、アンドリューは対戦を拒否。アンドリューの「ランバーガンダム」は、なおも挑みかかるシャイニングガンダムを投げ飛



両腕に装備しているランバーアックスだが、残念ながらほとんど出番がなかった。

ばし、ドモンのパートナー、レイン・ミカムラを連れ去ってしまうのだった。この後、ドモンはネオロシアの一行とともに、ロッキーマウンテンで再度ランバーガンダムと対峙。アルゴ・ガルスキーがボルトガンダムで戦いを挑むが、ランバーガンダムの中にレインがいることを知ったドモンが、シャイニングガンダムで乱入。勝負はお預けとなる。

のちの決勝大会で、ランバーガンダムは再びボルトガンダムと戦うが、このときはガイアクラッシャーで動きを封じられ敗北。のちのタッグマッチで大破している。

ランバーガンダムのメイン武装は、両腕に装備しているランバーアックス。強靱なパワーを活かした肉弾戦を得意とする。頭部にはバルカン砲を2門搭載しているが、こちらは牽制用である。

ランバーガンダムは、大会随一のパワーを誇るボルトガンダムと、真つ向勝負ができる機体だった。

搭乗者のアンドリュウが、アルゴを妻の仇と誤解して倒すことにこだわっていたため、活躍の場が狭まってしまったのが惜しまれる。

勝利にこだわるネオイングランドのスナイパー

GF13-003NEL

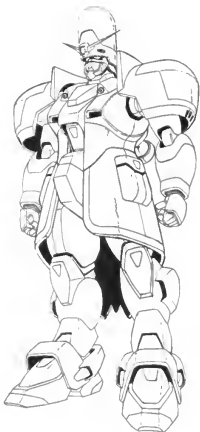
ジヨンブルガンダム

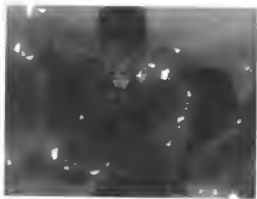
射撃戦に特化した、ネオイングランドのモビルファイター。全高16・4m。重量7・3t。搭乗者はジェントル・チャップマン。

■シャイニングガンダムを あと一步まで追い詰める

「デビルガンダム」の手がかりを求め、ドモン・カッシュはネオイングランドへと向かう。第9回から第11回まで3連覇を成し遂げたガンダムファイター、ジェントル・チャップマンとのファイトが目的だった。

英国近衛兵を髣髴^{はうふく}とさせるチャップマンの「ジヨンブルガンダム」は、かつて大会3連覇を成し遂げた「ブリテンガンダム」の後継機





チャップマンが健康を書していないければ、シャイニングガンダムを倒していたかもしれない。

である。武装は頭部のバルカン砲2門のほか、主武装にロングビームライフルを装備。スナイパーとして優れた腕をもつチャップマンに合わせた機体となっている。「シャイニングガンダム」との戦いでは、斬りかかるシャイニングガンダムの手を射撃してビームソードを弾き飛ばし、足を撃ち抜いて転倒させ優勢に戦いを進める。しかし、病に侵されていたチャップマンが身体に変調をきたしたため、シャイニングガンダムをあと一步まで追い詰めながらとどめはさせなかった。

ドモンはジョンプルガンダムの頭部を破壊することを躊躇するが、チャップマンは彼を「甘い」と叱責。結果ジョンプルガンダムは、シャイニングガンダムに頭部を破壊されて敗退し、身体の限界を向かえたチャップマンは亡くなってしまった。

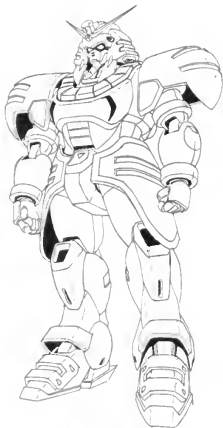
この後、チャップマンはDG細胞によって復活し、ジョンプルガンダムとともに再び登場する。

病に冒され薬漬けだったにも関わらず、チャップマンの実力は本物だった。彼が健康を害していなければ、ジョンプルガンダムはデビルガンダムの手下などではなく、まっとうな活躍をしていただろう。

蘇ったネオエジプトの英雄が駆る恐怖の亡霊

GF4-001NE

ファラオガンダムⅣ世



DG細胞によって蘇ったネオエジプトのモビルファイター。全高16・6m、重量7・8t。搭乗者はダハール・ムハマンド。

■DG細胞によって

搭乗者が蘇り動き出す

「ドラゴンガンダム」との対戦を控えた、ネオエジプトのクルーたち。だが、彼らは突如現れた謎の敵によって全滅させられてしまう。その翌日、砂漠には全身を布で覆われた不気味なモビルファイターと戦う、ドラゴンガンダムの姿があった……。

ドラゴンガンダムと戦っていたモビルファイターこそ、すでに亡くなったはずのネオエジプトの英



ファラオガンダムⅣ世が墓場から蘇ったのは、デビルガンダムとDG細胞のせいだった。

雄、ダハール・ムハマンドが駆る「ファラオガンダムⅣ世」である。この戦いは、ドラゴンガンダムの勝利で幕を閉じるも、ダハールとファラオガンダムⅣ世は、ダハールの墓へ調査に向かったドモン・カッシュとサイ・サイシーらの前に再び現れ、ドラゴンガンダムと戦うのである。

実は、ダハールは第4回大会でネオチャイナの代表だったサイ・サイシーの祖父と戦い、機体が爆発して亡くなっていた。その後、ダハールはDG細胞の影響で復活をとげ、少林寺の後継者を前に再戦を挑んできたのであった。

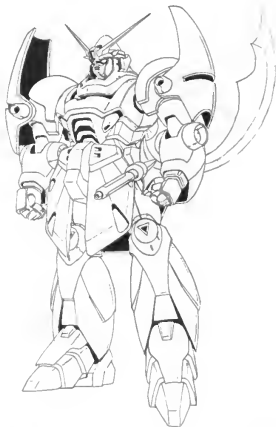
ややオカルトじみたファラオガンダムⅣ世だが、それにたがわずメインの武器は目や胸部から発する怪光線。また、全身に巻かれた布を伸ばして相手に巻きつけ、電流のようなものを流して攻撃するほか、手には蛇状のマンバ・ウィップを装備していた。

ダハールとファラオガンダムⅣ世は、「シャイニングガンダム」によって葬り去られたが、この一件は亡くなった人間すら蘇らせてしまうDG細胞の恐ろしさを、まざまざと見せつけた事件であった。

巨大な壱月刀が印象的な剣士系ガンダム

GF13-052NT

ミナレットガンダム



巨大な壱月刀での白兵戦を得意とする、ネオトルコのモビルファイター。全高16・9m。重量8・0t。搭乗者はセイト・ギュゼル。

■デビルガンダムに襲われ D G細胞に感染

ネオトルコにやってきたドモン・カッシュとレイン・ミカムラは、レインの大学時代の友人セイト・ギュゼルと出会う。

しかし、セイトはネオトルコのガンダムファイターとなっており、しかも世界を転戦中に「デビルガンダム」に襲われてD G細胞に感染していたのだった。

D G細胞の影響が出はじめていたセイトは、街を破壊して追わ



デビルガンダムに襲われたミナレットガンダムは、反撃を試みるがまったく歯がたたなかった。

れる身となっていた。レインはセイトを放っておけず介抱するが、武装警官に発見されてしまう。ギューセルは、レインたちに迷惑をかけまいと隠してあった「ミナレットガンダム」に乗りこむが、DG細胞に意識を支配されてしまうのだった。

イスラム教の礼拝所モスクの屋根のような頭部が特徴のミナレットガンダムは、巨大な堰月刀ミナレットシュミッターによる剣技を得意とする。また、両肩には大型のアーマーが装備されているが、これはレスリングが得意なセイトに合わせ、シヨルダータックルなど肉弾戦もこなせるようにとの配慮だろう。

ドモン・カッシュの「シャイニングガンダム」と戦った際には、DG細胞の影響で戦闘力もアップしており、斬り落とされた右腕を即座に修復。逆に、シャイニングガンダムをタックルで押し倒し、ミナレットシュミッターで頭部を破壊しようとした追いつめる場面も見られた。

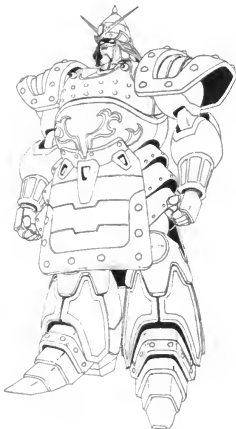
イスラム圏らしいミナレットシュミッターはなかなか性格よく、出番がわずかだったのが惜しまれるモビルファイターだ。

前回大会でネオホンコンに優勝をもたらした強力な機体

GF12-035NH / GF13-001NH

クーロンガンダム

前大会で優勝を勝ちとった、ネオホンコンのモビルファイター。全高16・7m。重量7・2t。搭乗者はマスター・アジア。



■シャイニングガンダムとの

合体技でデスアーミーを一掃

「デビルガンダム」の行方を追うネオジャパン政府だが、諜報員たちが次々と消息を絶つ事態が発生。ドモン・カッシュは、救難信号が発信されたシンジユクシティに派遣された。

シンジユクシティにやってきたドモンとレイン・ミカムラは、そこでデビルガンダム配下の「デスアーミー」と遭遇する。

ドモンは「シャイニングガンダ



シャイニングガンダムとクーロンガンダムは、超級霸王電影弾でデスアーミーの大軍を一掃した。

ム」を呼び出そうとするが、突如現れたマスター・アジアがこれを制止。マスター・アジアは素手でデスアーミーを撃退すると、ドモンに対して一緒に戦うよう協力を求める。このとき登場したのが、ネオホンコンの「クーロンガンダム」だった。

クーロンガンダムは、ネオホンコン代表として第12回大会に出場したマスター・アジアが、見事優勝を勝ちとった機体。布を武器とするマスター・アジアに合わせ、带状にエネルギーを発生させるクーロンクロスを装備しているほか、劇中では使わなかったが、マシンキャノンをも2門搭載している。

また、デスアーミーとの戦いでは、高速回転するクーロンガンダムをシャイニングガンダムが両腕で押し出して放つ合体技、超級霸王電影弾を使用。デスアーミーの大群を一掃する場面も見られた。

古代中国の鎧をまとったような外見をしているが、機動性、耐久性ともにかなり高水準な機体である。素手でデスアーミーを破壊してしまうマスター・アジアが乗る以上、クーロンガンダムがただのモビルファイターでないのは明らかだろう。

射撃戦が得意なネオフランス代表の座を狙う軍用機

RX-75

ミラージュガンダム

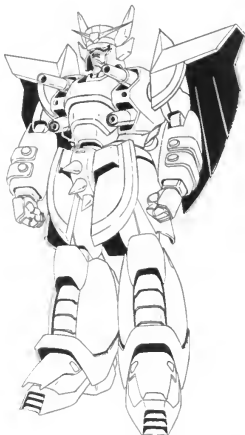
ガンダムローズとネオフランス代表の座を争ったモビルファイター。全高16・2m。重量7・2t。搭乗者はジャン・ピエール・ミラボー。

■強力な射撃戦がもち味

ドモン・カッシュをはじめとするシャッフル同盟の面々が修行に励むなか、ネオフランスコロニーから1機のシャトルがギアナ高地へと向かった。

シャトルに乗っていたのは、ジヨルジュ・ド・サンドとネオフランス代表の座を争った、ジャン・ピエール・ミラボー。

彼は、フランス代表を決める予選で観客を巻きこむ惨事を起こし、





射撃戦が得意な機体だけに火力は高い。D G細胞によって強化され、より弾幕が厚くなっている。

刑務所送りとなっていた。

しかし、代表の座を手にしたジオルジュを倒そうと、「ミラージュガンダム」を奪って脱走。さらに、地球に降りた際にマスター・アジアと出会い、D G細胞の力を手に入れたのち、ジオルジュの前に現れたのだった。

ミラージュガンダムは、胸部にメガビーム砲を4門、両腕部および両足脛部に小型多連装ミサイルを搭載。D G細胞を得てからは、背面にミサイルランチャーをつ

くり出し、D Gミサイルを発射できるようになった。

ギアナ高地の戦いでは腕部や脛部のミサイルは使っていないが、かつてのネオフランス代表決定戦ではこれらを使用し、大惨事の原因となった。

なお、ミラボーが脱獄した際の報道で「軍事装甲ガンダムを奪取して逃亡」とされていたため、ミラージュガンダムは軍用機と考えると間違いないだろう。武装の面から見ても、どちらかというと長距離戦に向いた装備で、近接戦闘には向いていない。やはり、一対一で戦うガンダムファイトには、あまり似つかわしくない機体といえるだろう。

ギリシャ神話の最高神を模した優勝候補の筆頭

GF13-002NGR

ゼウスガンダム



優勝候補の筆頭ともいわれたネオギリシャのモビルファイター。全高17・5m。重量8・9t。搭乗者はマーキット・クロノス。

■搭乗者の慢心から

ゴッドガンダムに敗れる

ネオホンコンにて、いよいよはじまったガンダムファイト第13回決勝大会。「ゴッドガンダム」に乗り換えたドモン・カッシュは、第1戦目で優勝候補の筆頭にあげられている、ネオギリシャの「ゼウスガンダム」と対戦した。

ゼウスガンダムは、その名が示す通りギリシャ神話の最高神ゼウスをモチーフとしており、翼が付いた金色の冠や赤い顎ヒゲなど、



優勝候補ナンバーワンにあげられたが、マーキットの慢心から敗れることになった。

まさに威風堂々とした外見が特徴の機体だ。

武装は腰に下げたゼウスソードのほか、イカヅチハンマーを装備。このハンマーで、最高神ゼウスのように雷撃を放つ必殺技、裁きの雷を放つ。また、モビルホース「ハーキュリー」が引くチャリオット（二輪戦車）に乗っており、ハーキュリーも突進や踏みつけ、チャリオットでひいてしまうなど、強烈な攻撃手段をもっている。

決勝大会の前哨戦となるサバイバルイレブンでは、ゼウスガンダムをチャリオットから引きずり降ろした相手はいないというから、優勝候補の筆頭にあげられるのもうなずけるだろう。ゴッドガンダムとの戦いでも、当初は優勢に戦いを進めていた。

しかし、前日にドモン自身を叩きのめしていたことからマーキットに油断が生じ、爆熱ゴッドフィンガーのまえに敗れている。

ただ、劇中ではほかのモビルファイターたちに比べて、はるかに勝利する場面が多く描かれており、最終バトルロイヤルにも見事進出。前評判に違わぬ優れた機体であることを証明した。

コブラの動きを再現した異色のモビルファイター

GF13-030NIN

コブラガンダム

上半身と下半身が別々に行動するネオインドのモビルファイター。全高18・8m。重量21・8t。搭乗者はチャンドラ・シジーマ。

■巨大コブラとの連係プレイ
で目標を仕留める

「ゼウスガンダム」を倒したドモン・カッシュ。

次なる対戦相手となったのがネオインドのガンダムファイター、チャンドラ・シジーマが操る「コブラガンダム」だった。

コブラガンダムは、その名のとおりコブラそのものを模した外見をしており、ほかの機体のような足はついていない。蛇使いのチャンドラは、コクピットにペットの



分離状態





ゴッドガンダムを捕らえて分離するコブラガンダム。
ここまでは必勝パターンだった。

巨大なコブラとともに乗りこんでおり、このコブラが下半身を動かす。また、上半身と下半身は分離が可能で、分離した上半身は人型をしている。チャンドラ自身は、この上半身を操作している。コブラガンダムの戦法は、まず相手に巻きついて締めあげること対象を行動不能とし、その後に分離して人型になった上半身がビームパイパーで目標を仕留めるといふもの。蛇の特徴をもつ機体性能を活かした二段構えの戦法といえる。

武装はコブラに指示を出す笛を兼ねたビームパイパーのみだが、動けない相手をしとめるなら、これだけで十分ということなのだろう。

「ゴッドガンダム」との対戦では、巨大な本体に似合わず意外に俊敏な動きを披露。必勝パターンにもちこんだが、ゴッドガンダムが肩を外して捕縛を抜け出すという、予想外の行動をとったため敗れた。

コブラガンダムは、最終バトルロイヤルにも進出するほどの優秀な機体ではある。しかし、どこか釈然としなないのは、チャンドラの陰湿さを感じさせる性格のためなのだろうか。

盲目の暗殺者が心眼で操る驚愕の機体

GF13-044NMP

マンダラガンダム

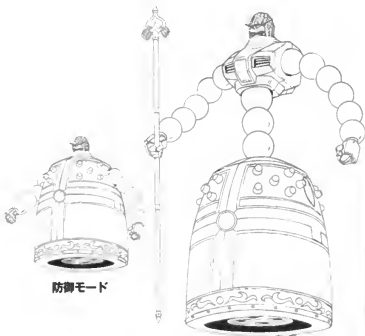
仕込み杖を武器とする、ネオネパールのモビルファイター。全高17・3m。重量7・4t。搭乗者は盲目の暗殺者キラル・メキレル。

■デビルガンダムとの戦いで活躍

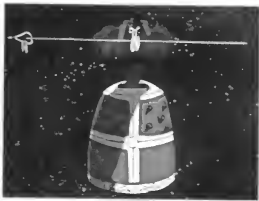
各国のガンダムファイターたちが試合を進めていくなか、不戦勝で勝ち抜けていく人物がいた。「マンダラガンダム」を操る、ネオネパールのキラル・メキレルである。

それもそのはず、キラルは盲目ながら凄腕の暗殺者であり、なんと対戦相手をファイトまえに葬り去っていたのだ。

ドモン・カッシュが次の対戦相手に決まると、キラルはドモンの



防御モード



多数のガンダムを撃ち出して触手を破壊するなど、驚異的な技を使うマンダラガンダム。

前に姿を現す。しかし、チボデー・クロケットがドモンに手助けしたこともあり、キラルはドモンの暗殺に失敗。ガンダムファイトで勝負を決することになった。

仏像を髣髴とさせる螺髪（はうぼう）のような頭部に数珠（じゆ）や梵鐘（ぼんねう）の胴体と、マンダラガンダムはかなり個性的な姿をしている。足がないため浮遊して移動するが、暗殺者というキラルの能力を反映するだけあって機動力は非常に高い。武装は、搭乗者であるキラルと同じく、ビームソードを仕込んだ錫杖（しやくじょう）。錫杖の先端に火炎放射装置が付けられており、「ゴッドガンダム」との対戦では錫杖を回転させながら炎を発する必殺技、炎獄烈風を使用していた。

決勝大会終了後に起きた「デビルガンダム」の危機に際し、マンダラガンダムはデビルガンダムの触手撃退に参加。ほかのガンダムを曼荼羅陣から弾丸のように撃ち出す大技、キラル殺法・曼荼羅円陣・極楽往生などを駆使し、大活躍を見せていた。

キラル自身が超人的な人物ということもあり、暗殺ではなくまともに大会に参加していたならば、マンダラガンダムは十分優勝を狙えたに違いない。

マーメイドガンダム



水中戦を得意とするネオ・デンマークのモビルフ
ァイター。全高16・5m。重量7・6t。搭乗
者はハンス・ホルガー。

■強豪ドラゴンガンダムを 追い詰めた実力者

決勝大会が行われているネオホ
ンコンで、サイ・サイシーは少女
セシル・ホルガーと出会いひと目
惚れしてしまう。しかし、セシル
の兄はネオデンマークのガンダム
ファイターであるハンス・ホルガ
ー。サイの次の対戦相手である
「マーメイドガンダム」の搭乗者だ
った。

マーメイドガンダムは、その名
の通り水中戦を得意とするモビル



フィッシュモードでドラゴンガンダムを襲う姿は、弾猛なサメといったところだ。

ファイター。しかし、外見は美しい人魚というより、半魚人といったほうがピッタリで、しかも魚の着ぐるみを被っているかのような姿をしている。しかし、この魚のような外郭に手足をすべて引っこめ魚型のフィッシュモードに変形することで、水中では驚くほど高い機動性を発揮する。また、陸上での戦いが苦手かというところでもなく、かなり俊敏に動くことができる。

武装は、相手の動きを封じるビームネットと、三叉の矛であるマーメイドトライデント。ネオスベインの「マタドールガンダム」との戦いでは、ビームネットで相手を包みこんで動きを封じたのち、マーメイドトライデントで頭を斬り飛ばしていた。

サイの「ドラゴンガンダム」との対戦では、ドラゴンガンダムを水中へと引きずりこんで優位に立っていた。しかし、自ら腕を斬り落として囧とするドラゴンガンダムの奇策に引っぱり負け敗れている。

水中戦とはいえ、トップランクの実力をもつドラゴンガンダムと互角以上に戦えたのは、マーメイドガンダムが優れていた証といえる。

モノマネ攻撃で相手を揺さぶる道化師

GF13-039NP

ジェスターガンダム

モノマネ戦法で敵を翻弄する、ネオポルトガルのモビルファイター。全高16・2m。重量7・0t。搭乗者はロマニオ・モニーニ。

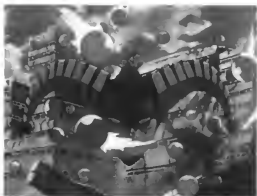
■相手の動揺を誘って
勝利をつかむ策士

決勝大会も中盤に差し掛かったころ、ネオフランスのジヨルジュ・ド・サンドは、思わぬ相手に敗北を喫する。ネオポルトガルのロマニオ・モニーニ操る「ジェスターガンダム」である。

決勝大会に進出したモビルファイターはいずれ劣らぬ個性派揃いだ。相手の攻撃と同じ動きで戦うというのは、このジェスターガンダムだけだろう。

トップモード





シャッフル同盟の一員であるジョルジュも、ローゼスピットまで真似されたことに動揺して敗れた。

ジェスターガンダムは、自身も道化師であるロマリオ同様、ピエロをモチーフとしており、どこかコミカルな外見をしている。相手の攻撃を真似るため、ボディは柔軟にできており、機体の形状まで再現する。

また、コマ状のトップモードに形態を変化させることで、空中を自在に動くことも可能になる。

武装は、頭部にバルカン砲、胸部にはマシンキャノンをもつ2門ずつ装備しているほか、多数のバルーンピットを搭載している。

「ガンダムローズ」との対戦では、ローゼスピットの攻撃をバルーンピットで真似てみせ、ジョルジュの動揺を誘って勝利した。

また、胴体の4本のリングは、相手に被せて行動不能にすることができる。このリングは、チボデー・クロケットの「ガンダムマックスター」との戦いで使用している。

自分の行動を執拗に真似され続けると、イライラしてくるもの。ジェスターガンダムは、そうした搭乗者の心理を突いて勝利を収める機体といえる。

対デビルガンダム用に開発された高性能機

JMF-1336R

ライジングガンダム



ネオジャパンが対デビルガンダム用に準備していたモビルファイター。全高16・2m。重量6・7t。搭乗者はレイン・ミカムラ。

■レインに強奪されて
予想外の活躍を見せる

決勝大会も大詰めに近づくなか、「デビルガンダム」を追っていたネオジャパン政府はデビルガンダム戦に備え、ウルベ・イシカワ少佐の搭乗機となる「ライジングガンダム」を用意していた。

ライジングガンダムは、「シャイニングガンダム」のプロトタイプとしてミカムラ博士が開発した。シャイニングガンダムと、ほぼ同等の性能をもつ高性能機である。



シャイニングガンダムと同等の性能というだけあり、ウォルターガンダムの攻撃をしのぎ勝利した。

武装には、白兵戦用のビームナギナタを装備しているほか、左腕にビームボウを搭載。また、両肩のアーマーを分離・合体させてシールドとしたモビリティモードでは、攻撃力、防御力ともに向上する。

また、スーパモードのような特別な状態への移行機能はもたないが、ビームボウによる必殺技、必殺必中ライジングアローを放つことができる。

劇中では、シュバルツ・ブルーダーの正体をドモン・カッシュに知らせようとしたレイン・ミカムラが強奪。D G細胞によって「ノールガンダム」が変化した、「ウォルターガンダム」と戦っている。

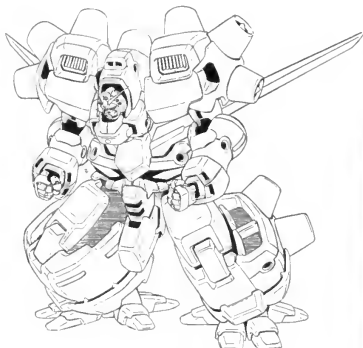
この戦いでは、戦闘経験のないレインが搭乗者ながら、ビーム攻撃をビームナギナタで弾き飛ばしたり、必殺必中ライジングアローでバーサーカーシステムの受信機を破壊するなど、その性能を遺憾なく発揮。最終的にウォルターガンダムを倒している。

レインにも多少は武芸の心得があったのかもしれないが、ウォルターガンダムに勝てたのは性能の高さゆえだろう。

自己進化により変貌を遂げる悪魔のガンダム

JDG-00X

デビルガンダム



カッシュ博士が開発したモビルファイターが、自己進化した姿。全高23・9m。重量41・2t。搭乗者はキョウジ・カッシュ。

※データは最終形態のもの

■シンジユクシティを完全な廃墟にする

ガンダムファイト決勝大会の前哨戦となる、サバイバルイレブン。ネオジャパンの代表ドモン・カッシュは、兄キョウジ・カッシュの搜索と「デビルガンダム」奪還の密命を帯びて、各国を回っていた。そんななか、ドモンはデビルガンダム搜索の指揮をとっているウルベ少佐の命により、シンジユクシティへと向かう。そして、デビルガンダムの手先となってしまっ



無数に伸びるガンダムヘッドも、デビルガンダムの自己進化によって生み出されたものである。

たマスター・アジアとデビルガンダムに遭遇するのだった。

デビルガンダムがキョウウジによって地球へもち出されて以来、ウルベ少佐はようとしてその行方をつかめずにいた。ところが、マスター・アジアの手引きにより、必死の捜索を行っているネオジャパンをあざ笑うかのように、シンジユクシティにある都庁の地下に潜伏。自己再生機能で機体を修復しつつ、じっと復活のときを待っていたのだ。

シンジユクシティに現れた無数の「デスアーミー」は、デビルガンダムが自己再生の糧にすべく、かつて襲ったメカを呼び寄せたもの。そして今、新たにシンジユクシティの人々をゾンビ兵に変え、自身の警護をさせていたのである。

しかし、ドモンの前に姿を現したデビルガンダムは不完全な状態で、自ら形成した藪のような外郭から抜け出そうとする最中だった。

「シャイニングガンダム」に乗りこんだドモンは、シャイニングフィンガードで攻撃をかけるが、一瞬兄の面影が頭をかすめて頭部への攻撃を躊躇し外

郭を攻撃してしまう。すると、デビルガンダムはシャイニングフィンガーソードのエネルギーを全身ですべて吸収。完全復活を遂げ、ドモンに向けて強力なビームを放ち、ショックを受けるドモンを残してどこかへ飛び去っていった。

この騒動により、唯一無事だった都庁も崩壊。デビルガンダムが放ったビームによって街はさらなる被害を受け、完全な廃墟となってしまった。

■デビルガンダムの根幹を成す三大理論

デビルガンダムは、もともと「アルティメットガンダム」として、ドモンの父であるライゾウ・カッシュ博士によって開発された。

機体の開発にあたり、カッシュ博士は一年に渡る大会期間を戦い抜くため、メンテナンスが不要な機体の開発を目指し、自己再生・自己増殖・自己進化の三大理論を確立した。

自己再生とは、機体の各部品にどここの構成部品であるかをインプットしておき、破損した場合にもとの状態へ復帰させるというもの。機体が破損しても人の手をかけることなく、自動的に修復する機能である。

自己増殖は、分子を選択して再結合することで必要な物質をつくり出すもので、これによって無機物、有機物を問わずとりこみ、自己再生の素材に変換できるのだ。



アルティメットガンダムは下半身がクモのような形で、通常のモビルファイターよりやや大きい。

さらにこのふたつを踏まえて確立されたのが、自己進化の理論。物質を変化させることができ、自己修復も可能ならば、環境を認識して適応させるようにするだけで、自己進化も可能になるということなのだろう。

こうしてアルティメットガンダムは、生物の細胞ともいふべき素材で構成された、究極の機体として開発された。

しかし、カッシュ博士は機体をアルティメットガンダムの開発過程で、荒廃した地球環境の浄化に役立てようと考えようになった。

ドモンと戦ったマスター・アジアも、戦いのなかで「デビルガンダムは地球再生のために開発された」と語っている。これは、カッシュ博士がアルティメットガンダムに組みこんでいたプログラムに、反映されていたことなのだろう。

しかし、地球環境の再生すら可能だったかもしれないアルティメットガンダムは、地球へ降下した際の衝撃でプログラムに異常をきたしてしまった。

そして、地球の浄化を行うには地球を汚染する人

類を抹殺する必要があるとして、人間の敵となってしまうたのだった。アルティメットガンダムは、DG細胞をばら撒く“デビル”となってしまうたのである。

■自己進化の果てに地球存亡の危機をもたらす

デビルガンダムは、プログラム異常によっていわば暴走状態にあったわけだが、根本的な性質は変わっておらず、徐々に進化していった。

シンジユクシティに現れた際、デビルガンダムはすでに第二形態に進化している最中で、下半身はとてつもなく巨大なものとなっていた。ギニア高地に現れた際には、形には変化がなかったもののガンダムヘッドを無数に生み出せるようになっており、ドモンたちの行く手を阻んだ。

このガンダムヘッドは、巨大な触手の先端にガンダムの顔がついたもので、口に当たる部分から発射するビームや、体当たりで目標を攻撃する。ギニア高地に現れた際には、地面から無数のガンダムヘッドを伸ばしてドモンたちを包囲。多くのデスアーミーを送りこんで窮地に追いやった。

この直後、デビルガンダムはいったん破壊されるが、ネオホンコン首相ウォン・ユンファによって密かにもち出され、最終バトルロイヤルの会場であるランタオ島に出現。このときには、無数のバルカン砲のようなものを搭載しており、立ち向か



ネオジャパンコロニーと同化したデビルガンダム。この災厄は人間の愚かさが招いたものだった。

ってきた「ガンダムシユビーゲル」を強力な火力で粉々にしている。

こののち、ドモンによって破壊されたデビルガンダムは、ネオジャパンコロニーへと運びこまれてまたもや復活。新たにレイン・ミカムラをコアとし、生命エネルギーを得たデビルガンダムは、外郭部を完全にコロニーと同化させてしまう。

街そのものと同化した外郭部は巨大な翼まで備え、その姿はまさに悪魔そのもの。そして、デビルガンダムは、とてつもない大きさの触手を地球へ伸ばし、地球を

食らい尽くそうとするのだった。

また、体内に侵入した「ゴッドガンダム」に対しては、最終形態へと進化した本体が迎撃に現れる。

2本足で直立した姿は、ややガンダムらしいといえるものだったが、下半身はガンダムの顔で、両肩には巨大な鉤爪を備えたクロウが生えていた。

しかし、圧倒的な力を見せつけたデビルガンダムも、ドモンの呼びかけに応えたレインが支配を脱したことから力を失う。

そして、ふたりが力を合わせた必殺技により、ついに打ち倒されたのだった。

ドモン・カッシュの前に立ち塞がるスーパーマシン

GF13-001NHII

マスターガンダム

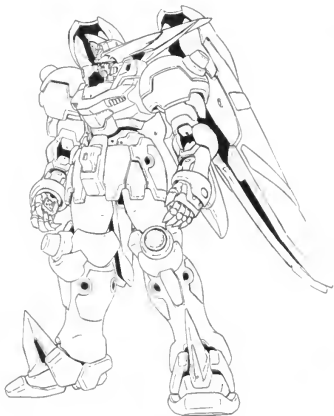
デビルガンダム
四天王

「クーロンガンダム」の流れをくむ、ネオホンのモビルファイター。全高16・7m。重量7・2t。搭乗者はマスター・アジア。

■超人マスター・アジアの動きを完璧に再現

ウルベ・イシカワ少佐の命でシンジユクシテイへ向かったドモン・カッシュは、そこで拳法の師マスター・アジアと再会。「デスマーミー」に襲われる人々を救うため、ともに戦うことになった。

ところがドモンは、ここで「デビルガンダム」の手先となったサイ・サイシーやアルゴ・ガルスキーらに出会い、「マスターガンダム」と遭遇する。





マスター・アジアの動きを完璧にトレースし、圧倒的な強さでドモンを苦しめた。

さらに後日、レイン・ミカムラが地下のDG細胞培養施設を発見。すべてはマスター・アジアの仕業であり、彼の「クローンガンダム」は、マスターガンダムが偽装した姿であった。

この後、マスターガンダムはドモンのシャイニングガンダムと、1対1の勝負を行う。しかし、搭乗者の技量差によるものなのか、この戦いはマスターガンダムが圧倒的に優勢だった。デビルガンダム復活に際しては、正気に戻ったチボデーらシヤッフル同盟の後継者たちと戦った。

マスターガンダムは、突撃してきた「ガンダムマックスター」を瞬く間にダウンさせ、「ガンダムローズ」「ドラゴンガンダム」「ボルトガンダム」による一斉攻撃を、必殺技の十二王方牌大車併の一撃で返り討ちにしてみせた。

ギアナ高地で修行中だったドモンを襲撃した際も、マスターガンダムは性能差とマスター・アジアの技量で当初優勢に戦っていた。

この戦いでは、明鏡止水の境地に達したドモンが、シャイニングガンダムの真のスーパードモードを発動。

最終的に、マスターガンダムは破壊されたかにみえた。

しかし、ネオホンコンで決勝大会の開会式がはじまると、マスターガンダムはモビルホース「風雲再起」に乗って何事もなかったかのように現れ、ドモンたちを驚愕させる。

決勝大会の最終バトルロイヤルでは、ドモンの「ゴッドガンダム」と激突。ガンダムファイト史上最高といわれるほどの激戦を演じたのち、弟子の成長を見届けたマスター・アジアとともに、その役目を終えるのだった。

■DG細胞による再生能力まで備えた強力な機体

マスターガンダムは、ネオホンコンが連覇を狙うべく開発した機体。搭乗者マスター・アジアが繰り出す流派東方不敗の技は、すべて再現できる。また、機体がDG細胞に感染しており、ある程度の損傷ならば即座に修復可能だ。

背面の翼はシールドでマントのようにスッポリと全身を覆うことができるほか、前腕部は伸縮可能になっており、離れている目標も攻撃できる。

武装は、クーロンガンダムと同様に布状にエネルギーを形成するマスタークロスを装備。シャイニングガンダムのシャイニングフィンガーのような技・ダークネスフィンガーを使用できるが、射撃武器は装備していない。

マスターガンダムの武装は決して多くないが、必殺技は豊富。前述の十二王方牌大車併は、掌で円を描いて梵字を出現させ、そこから多数の分身をつくり出して攻撃するもので、多くの敵を相手にできる。

ネオホンコンにガンダムヘッドが現れた際、披露したのが酔舞・再現江湖デッドリーウェイク。気をまといながら突進して目標をぶち抜き、「爆発！」のかけ声とともに爆砕する技だった。

ゴッドガンダムとの最終決戦で使用した超級霸王電影弾は、身体を高速回転させてエネルギーで包み込み目標に突撃する技。シンジユクシテイのときは異なり、単体で使用していた。また、当然ながら流派東方不败最終奥義、石破天驚拳も使用可能で勝負を決する最後の一撃として使っている。

マスターガンダムは、マスター・アジアの超絶的な体技を忠実に再現できるうえ、DG細胞による再生能力まで備えた非常に強力な機体だった。

マスターガンダムとマスター・アジアは、ドモンにとって超えるべき壁だったのである。



ゴッドガンダムとの決戦で金色に輝いたマスターガンダムは、パワー全開で石破天驚拳を放つ。

空中から猛禽のように襲い掛かる天界の剣

ガンダムヘブンズソード

デビルガンダム
四天王

「ネロスガンダム」がDG細胞に感染して変化した姿。全高27・8m。重量8・9t。搭乗者はミケロ・チャリオット。

■DG細胞により変化した ネロスガンダム

大会開催直後、ネオイタリアのガンダムファイター、ミケロ・チャリオットは、ドモン・カッシュに敗れた。

ところが頭部を破壊されて失格となったはずの「ネロスガンダム」は、ミケロとともに決勝大会に進出。ドモンの「ゴッドガンダム」と再戦のときを迎える。

戦いのなか、ネロスガンダムはゴッドガンダムの反撃で頭部を損

飛行モード





ランタオ島では闘技場に出現したときよりはるかに強烈な攻撃で、ゴッドガンダムを圧倒していた。

傷、大爆発を起こし、勝負は決したかに見えた。しかし、闘技場内を包んだ黒煙の中から、突如「ガンダムヘブンズソード」が現れ、ゴッドガンダムに襲い掛かる。鳥のように空中から迫るガンダムヘブンズソードは、ゴッドガンダムをつかんで上昇、上空から落とす。

さらに人型に変形してゴッドガンダムに打撃を与え、脛部のブレードで襲い掛かるも、爆熱ゴッドフィンガーによって敗れてしまう。

しかし、黒煙が晴れたとき現れたのは、なんと大破したネロスガンダム。ガンダムヘブンズソードの正体は、DG細胞に感染したネロスガンダムが変化したものだったのである。

このうちガンダムヘブンズソードはランタオ島での最終バトルロイヤルにも現れ、再びゴッドガンダムに襲い掛かる。

高空から数々の必殺技を放ち、ゴッドガンダムを苦しめるガンダムヘブンズソード。ゴッドガンダムが苦し紛れに放った爆熱ゴッドフィンガーをかわし、とどめを刺すべく空中から襲い掛かる。

だが、そこへ「ボルトガンダム」と「ドラゴンガンダム」が救援に現れ、ボルトガンダムの必殺技、ガイアクラッシャーによってゴッドガンダムはなんとか難を逃れた。

仲間の救援で力を得たゴッドガンダムは、爆熱ゴッドフィンガーを放つが、ガンダムへブンスソードはこのエネルギーを体全体で吸収。逆に必殺技のヘブンストルネードなど、空中からの攻撃で攻めたてた。

当初、戦いはガンダムへブンスソードが優勢だったが、ドラゴンガンダムの真・流星胡蝶剣によってバランスを崩してしまう。

そして、ボルトガンダムのグラビトンハンマーで地面に引きずり落とされたガンダムへブンスソードは、ドラゴンガンダムのフェイロンフラッグで頭部を貫かれて撃破されてしまったのだ。

■空中から猛禽のように襲い来る強敵

ガンダムへブンスソードは、ネロスガンダムがDG細胞に感染した姿で、「デビルガンダム」が従える四天王のうちの1体である。空中戦を得意としており、人型のスタンディングモードから鳥のような形のアタックモードに変形することで、自在に空中を飛び回ることができる。アタックモードでは、機体の下部に巨大なクロ-

が展開され、劇中ではさながら猛禽のように空中から襲い掛かっていた。

また、クローは直接攻撃に使用できるだけでなく、ガンダム1機程度ならつかむことが可能で、空中高く持ち上げてから落とすことでダメージを与えていた。

スタンディングモードでの必殺技は、衝撃波を無数に繰り出す虹色の足のほか、強力な破壊力をもつ飛び蹴りのハイパー銀色の足がある。これらはゴッドガンダムとの戦いで使われ、ドモンを苦しめていた。

アタックモードでは、巨大な翼で旋風を巻き起こし、風圧で攻撃するヘブンズトルネードや、翼から炎の風を巻き起こして攻撃するウインドファイヤー、翼から羽根そのものを飛ばして攻撃するヘブンズダート

の3つがある。これらは、攻撃範囲が非常に広く複数の目標に効果があり、ドラゴンガンダムとボルトガンダムが現れたのちに多用していた。

空中を自在に飛び回り、3機を相手に猛威を振るったガンダムヘブンズソードは、まさしく「天界の剣」の名にふさわしい機体だった。



アタックモードで空中を飛び回りつつ繰り出す数々の必殺技は、ドモンたちを大いに苦しめた。

グランドガンダム

デビルガンダム
四天王

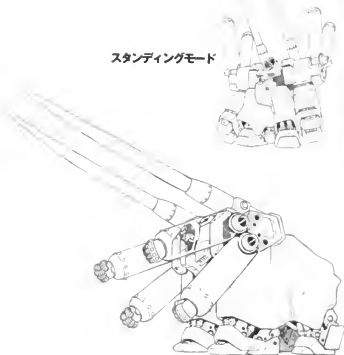
「ジヨンプルガンダム」がD G細胞に感染した姿。全高24・6m。重量23・4t。搭乗者はジエントル・チャップマン。

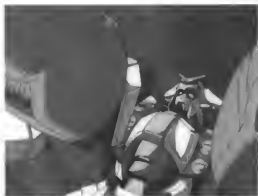
■ジヨンプルガンダムから 変化した巨獣

ネオホンコンで開かれている決勝大会。ジョルジュ・ド・サンドは、かつて「シャイニングガンダム」に敗れたはずの「ジヨンプルガンダム」と戦うことになる。

対戦の直前、ジヨンプルガンダムの搭乗者ジエントル・チャップマンがD G細胞に感染していることが発覚。ジョルジュは、打倒チャップマンを胸に闘技場へ向かった。

スタンディングモード





超重量を利用した踏みつけ攻撃は、踏まれた時点で回避のしようがなく、ある意味必殺の攻撃である。

卑怯な手段を使い、序盤は優勢に戦っていたジョンブルガンダムだったが、「ガンダムローズ」のシュバリエサーベルが突き刺さる。ところが破損したジョンブルガンダムから黒煙が噴出し、煙の中から巨大な角が飛び出してガンダムローズの両肩を貫いてしまう。そして黒煙の中から「グランドガンダム」が姿を現した。

圧倒的な巨体を誇るグランドガンダムは、その重量でガンダムローズを踏み潰そうとするが、破損したマントの隙間から発射されたローゼスビットにより頭部に損傷を受けて退けられてしまう。

しかし、戦いが終わって黒煙が晴れると、倒れていたのはジョンブルガンダム。グランドガンダムも「ガンダムヘブンズソード」と同様、ジョンブルガンダムがDG細胞に感染したことで変化した姿だったのである。

このあとグランドガンダムはランタオ島でのバトルロイヤルに出現。マスター・アジアのもとへ向かうとするゴッドガンダムの前に立ち塞がった。

グランドガンダムの強大な火力に、さすがのゴッドガンダムも後退。グランドガンダムは腕を伸ばしてゴッドガンダムを捕らえると、地面に倒して踏み潰しにかかる。しかし、ガンダムローズと「ガンダムマックスター」が救援に現れてグランドガンダムを攻撃したため、ゴッドガンダムはなんとか窮地を脱する。

グランドガンダムは、ゴッドガンダムを先に進ませたガンダムマックスターとガンダムローズの2体と戦闘を開始し、巨体の重量と火力で窮地に追いこむ。しかし、渾身の力を振るうガンダムローズに足を持ち上げられ、バランスを崩してしまう。

そこへ、ガンダムマックスターがギガンティックマグナムで射ち出したローゼスビットがコクビットを直撃。グランドガンダムは大爆発を起こして消えてしまった。

■迫力満点の踏みつけ攻撃で敵を圧倒

グランドガンダムは、DG細胞でつくられた「デビルガンダム」四天王のうちの1機で、陸上での戦闘を得意とする。巨大なボディに似合わず変形が可能で、4本足状態のアタックモードと2本足状態のスタンディングモードの2種類を使い分けることができる。

巨大なボディから突き出た大きな2本の角、グランドホーンは、目標に伸びて串

刺しにするだけでなく、角のあいだから放電状のビーム、グランドサンダーを放つことができる。

劇中では、ガンダムローズの両肩を串刺しにしていたほか、帯電させた角をガンダムマックスターに叩きつけようとする場面も見られた。

側面に備えた4本の腕は伸縮自在で、グランドボンバーとしてパンチを撃ち出すほか、離れた目標をつかんで引き寄せることができる。グランドガンダムから距離をとろうとしたゴッドガンダムを捕らえ、地面に叩きつけて踏み潰そうとする場面もあった。また、この腕は砲身を兼ねており、大口径の砲弾を無限に発射することも可能だ。さらに、劇中では使用しなかったが、指先からビームを放つこともできる。

グランドガンダムは、その巨大さゆえに俊敏な動きはできないが、離れた敵には圧倒的な火力、近く敵には超重量による踏みつけ攻撃と、さながら動く地上要塞といった感があった。ジョルジュのガンダムローズが見せた火事場の馬鹿力がなければ、倒されることはなかったかもしれない。



大砲のような腕からは、伸縮自在の手を発射。引き寄せてしまえば踏みつけることができる。

ウォルターガンダム

デビルガンダム
四天王

「ノーベルガンダム」がDG細胞に感染して変化した姿。全高19・4m。重量9・2t。搭乗者はアレンビー・ピアズリー。

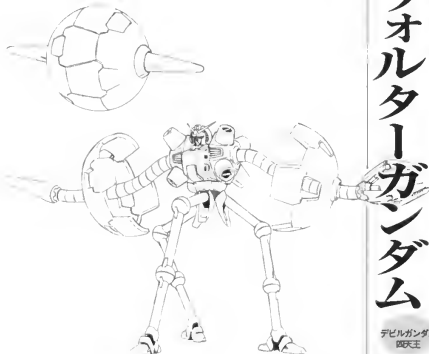
■真の能力を

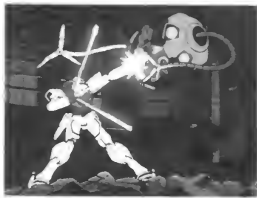
発揮することなく敗れる

最終バトルロイヤルの会場ランタオ島に「デビルガンダム」が出現。デビルガンダムのもとへ急ぐドモン・カッシュの前に、バーサーカーと化したアレンビー・ピアズリーの「ノーベルガンダム」が立ち塞がる。

するとそこへ、レイン・ミカムラの「ライジングガンダム」が現れ、ノーベルガンダムを海中へと突き飛ばすのだった。

完全閉鎖状態





アレンビーのウォルターガンダムは、ライジングガンダムのライジングアローで撃破される。

ノーベルガンダムは、海中でライジングガンダムに押さえこまれていたが、ウォン・ユンファが叫んだ「デビルアレンビー」という言葉に反応。レインが見守るなか「ウォルターガンダム」へと変化を遂げる。アレンビーとノーベルガンダムは、ウォンによってD G細胞を植え付けられていたのだ。

ウォルターガンダムは、デビルガンダム四天王のうちの1機で、水中戦に長けている。水中では球形のアタックモードだが、陸上では3本の足で歩行するスタンディングモードに移行できる。ただし、アタックモードで空中を飛べるため、使用頻度は低いようだ。

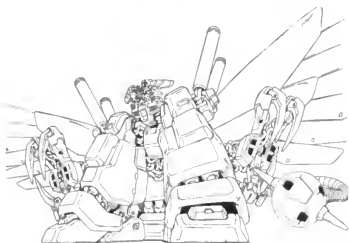
両腕には、ビーム砲ウォルターテナクトルを搭載。フェイスガードの下にはウォルターファングがあり、噛みついて攻撃していた。

ウォルターガンダムは、搭乗者のアレンビーがD G細胞に侵されきっておらず、また本人がバーサーカーモードを嫌っていたこともあり、全性能を出しきってはいなかったようだ。

レインのライジングガンダムに敗れたのは、この影響もあったのだろう。

デビルガンダム四天王が合体した無敵の動力炉

グランドマスターガンダム

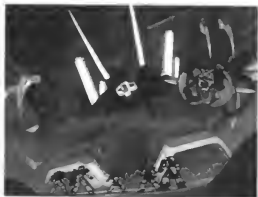


ネオジャパンコロニーと同化した「デビルガンダム」が、エネルギー源とした動力炉。全高・重量は不明。搭乗者はウルベ・イシカワ。

■デビルガンダムの活動を支える動力炉

ネオジャパンコロニーへ運びこまれた「デビルガンダム」は、ウルベ・イシカワ少佐の陰謀で復活を果たし、ネオジャパンコロニーと同化。地球を呑みこもうと活動を開始する。

これに対し、ドモン・カッシュ、ラシャッフル同盟の仲間たちは、デビルガンダムがエネルギー源としているコロニーの動力炉を破壊することを決意する。



ネオジャパンコロニーの動力炉は、巨大なグランドマスターガンダムへと変貌を遂げていた。

ところがコロニーの動力炉はD G細胞の影響により、「グランドマスターガンダム」へと変貌を遂げていたのである。

グランドマスターガンダムは、頭が「マスターガンダム」、胴は「グランドガンダム」で、腕には「ガンダムヘブンスソード」のクロウを備え、「ウォルターガンダム」を尾のように生やした姿をしており、いわばガンダム版キメラといった機体だった。ボディは驚くほど頑丈で、シャッフル同盟のメンバーが放った必殺技はまるで通じず、グランドマスターガンダムは無敵かと思われた。

しかし、ゴッドガンダムを筆頭にすべての機体が金色に輝くと、究極の一撃、爆熱シャッフル同盟拳を放たれグランドマスターガンダムは大破。搭乗者のウルベ少佐は滅んだ。

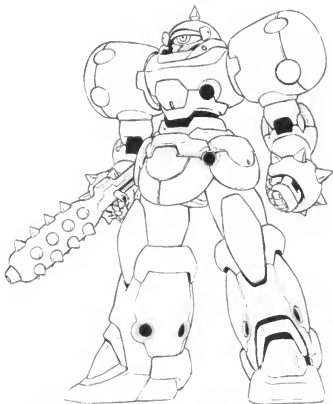
しかし、デビルガンダムは止まらず、スクラップ同然となったグランドマスターガンダムも復活。

結局、デビルガンダムのコアとなったレイン・ミカムラが救出されるまで動き続け、ドモンたちにとって、最後まで厄介な敵となった。

デビルガンダムを支える忠実な下僕

JDG-009X(JDG-00X)

デスアーミー



「デビルガンダム」が生み出したモビルスーツで、戦闘するだけでなく自己再生の素材にもなる。全高・重量は不明。搭乗者はゾンビ兵。

■アタッチメントにより

さまざまな状況に対応

シンジユクシティに派遣されたドモン・カッシュは、到着早々墜落する偵察機を発見。

まだ息があるパイロットに駆け寄りドモンの前に「デスアーミー」が現れた。

デスアーミーは、「デビルガンダム」の自己増殖機能によって生み出されたモビルスーツで、DG細胞でゾンビ兵と化した人間が搭乗。デビルガンダムの忠実な駒として



デスアーミーは、アタッチメントでさまざまな状況に対応できる汎用性が高いモビルスーツだ。

活動する。

シンジユクシテイでは、不完全な状態のデビルガンダムを守っていただけでなく、自己再生に必要な素材として、デビルガンダムにとりこまれている場面もあった。

4脚をもつ地上タイプのデスビーストや翼をもつ空中タイプのデスバーディ、ウオータージェット機能を備えたデスネイビーなど、アタッチメントによりさまざまな姿に変化するため汎用性は高いといえる。

また、「ドラゴンガンダム」に化けてネオロシアのクルーを襲ったり、「マスターガンダム」の姿になってドモンを惑わせるなど、特定の機体に偽装することも可能だ。

デスアーミーの基本武装は金棒形のビームライフルだが、デスビーストなら専用マシンライフル、デスネイビーなら魚雷とトライデントというように、アタッチメントによって武装も変化する。

特別な機能としては、敵を認識すると仲間を呼び寄せる能力があるほか、音声を発する機能も有しており、生物的な特徴がみられる機体でもある。

所属国の特徴を反映して戦うモビルファイター

地球圏が未来世紀を迎えるころ、人類はスペース・コロニーで暮らす一部の支配層と、地球に残された人々の大きくふたつに分かれていた。

そんななか、地域紛争に端を発した争いが地球全土を巻きこむ大戦に発展し、戦いは宇宙にまで広がる気配を見せた。環境汚染が進む地球を放棄したスペース・コロニーの人々は、事態を静観していたが、この時点でようやく各国のコロニー政府が動きはじめ、コロニー間で軍事連合を結成。軍事への転用がはじまっていたモビルスーツを投入することで、戦争は終結したのだった。

しかし、これによって各国のモビルスーツ開発競争が激化し、再び大戦が起こる危機がせまった。「ガンダムファイター」は、こうした事態を打開するために開かれることになる。

ガンダムファイターは、国の代表が1対1で戦うというスポーツ的な要素をもっているが、あくまで各国が主導権を争う代理戦争。よって、大会には各国の最新技術がとり入れられた、自慢の「ガンダム」たちが投入されていくことになる。

また、制御システムに、搭乗者の動きをそのまま機体に反映するモビルトレースシ

システムを採用したことから、従来のモビルスーツのように熟練したパイロットでなくとも機体を動かせるようになった。むしろ、搭乗者自体の強さがそのまま機体に反映されてしまったため、熟練したパイロットよりも強い格闘家のほうがより適するようになっていった。そして、各国は、コロニー格闘技大会を開催し、搭乗者の確保にも力を入れていくのである。

なお、過去のモビルスーツ開発競争によって、すでにガンダムの基本的な技術はほぼ均一化されており、各国の機体に使われている構成素材は同じものであった。さらにルールによって、強力過ぎるバリアや大火力のビーム兵器などは制限されているため使用できない。よって、自国をアピールするために、他国が真似できない新たな新技術を導入するか、外見に自国の特徴を盛り込むようになっていった。

独自の技術といえば、第13回大会に出場した機体ではネオスウェーデンの「ノーベルガンダム」に搭載された「バーサーカーシステム」や、ネオジャパンの「シャイニングガンダム」に搭載された「感情エネルギーシステム」などがある。

しかし、全体的にみれば新技術を搭載した機体はわずかなようで、やはり所属国をアピールするために外見に特徴を反映させた機体の方が多かったようだ。

風車を模したネオオランダの「ネーデルガンダム」や、闘牛で有名だったネオスベインの「マタドールガンダム」のように、大会に参加するガンダムが独特の形をしているのは、こうした事情からなのだろう。

第2章

新機動戦記

ガンダム
W

ウイング

アフターコロニー暦一九五年。秘密結社O

Z(オズ)は地球圏制覇を狙い暗躍していた。それを阻止すべく、コロニーのOZ抵抗派は5機の「ガンダム」を地球に流星として送りこむオペレーション・メテオを展開した。

OZはモビルスーツ「リーオー」を主力とし、そこから開発した新型機を運用していた。だが、自律式無人兵器モビルドールシステムの開発に成功すると、これを搭載した「トールラス」や「ビルゴ」を主力の座につける。

一方のガンダム各機はこうした敵戦力の増強に対し、それぞれの機体を宇宙用に強化改造することで対抗することとなる。さらには最強ゆえに封印されていた「ウイングガンダムゼロ」も製造。最終的に戦争は、有人機と無人機の戦いという図式になっていった。

■ OZ (オズ)

地球環境の保全などを目的に、旧北欧の王侯貴族が設立したロームフェラ財団。この財団内の一部のエリートによって結成されたのが軍事秘密結社OZである。その目的は地球圏統一連合をクーデターにより倒し、政権を奪取することであり、表向きには連合軍独立部隊スペシャルズとして軍事力を蓄えていた。総帥はトレース・クシュリナーダ。

■ ホワイトファンク

コロニー独立運動の過激派が、OZのトレース派をとりこんで、設立した組織。オペレーション・メテオもこの過激派が立案したものだったが、無益な流血を嫌った5人の科学者たちによって計画は変

更させられ、自身の作戦も修正を余儀なくされてしまった。そのため表立った活動は控えていたが、OZが建造した超大型戦艦「リーブラ」の強奪に成功したことで武装蜂起した。

■ ガンダニウム合金

宇宙空間でのみ精錬可能な特殊なマテリアルの総称であり、一種類の合金の名称ではない。その特性もさまざまだが、一般的には高い硬度と強度、ビームの直撃にも融解せぬ耐熱性、ステルス性などが知られている。なお、ガンダニウム合金で建造されたモビルスーツが「ガンダム」と認識されているが、OZの後期モビルスーツにも、この合金が用いられているものがある。

パイロットに必勝の策を授ける脅威のシステム

XXXG-90WM

ウイングガンダムゼロ

コロニー
地下組織

5人の科学者が設計し、カトル・ラバーバ・ウイナーが完成させたガンダム。全高16・7m、重量8・0t。主な搭乗者はヒイロ・ユイ。

■コロニーを破砕する一撃

OZ宇宙軍が掌握する資源衛星を、突如「ウイングガンダムゼロ」が襲撃した。

ウイングガンダムゼロは駐留するOZ宇宙軍171部隊の攻撃をものともせず、静かにツインバスターライフルを構える。

その一撃に171部隊は資源衛星もろとも爆散するのであった。

その後、予告どおり06E3コロニーに現れたウイングガンダム

ネオバード形態





本機はウイングガンダムと同様に、長距離移動時には変形する。これをネオバード形態と呼ぶ。

ゼロは、コロニー外壁に取り付けられたビーム砲塔の攻撃を難なくかわすと、広げた左右の手に分割したツインバスターライフルを発射しつつ回転。ウイングガンダムゼロを挟撃に出た「リーオー」6機を同時に殲滅した。

遅れてきたリーオー部隊には肩のマシンキャノンで銃撃、牽制すると、左のツインバスターライフルの一撃でとどめを刺す。

こうしてウイングガンダムゼロはリーオー迎撃部隊を赤子の手をひねるがごとく全滅させると、連結させたツインバスターライフルの砲口を06E3コロニーに向ける。

ツインバスターライフルから放たれた激しい光の一撃はドーナツ型をしたコロニーを貫通、崩壊させた。モビルスーツがもてるであろう域をはるかに超えた恐るべき破壊力だった。

■諸刃の剣、ゼロシステム

この最強の万能機、ウイングガンダムゼロを開発したのは、のちに5機のガンダムを開発することになるドクターJら5人の科学者たちだった。

彼らはOZの下で「プロトリオー」ともいわれる第一のモビルスーツ「トールギス」を完成させ、そこで蓄積したデータと、新素材ガンダニウム合金を用いて最強の機動兵器をつくりあげようとした。

それこそがウイングガンダムゼロだったが、完成まえに5人は脱走。のちに残された設計図を基にカトル・ラバーバ・ウィナーが完成させる。

このウイングガンダムゼロの特徴のひとつが、ツインバスターライフルである。「ウイングガンダム」のバスターライフルには、発射できるビームは3発までという制限があったが、こちらにはそうした制約はない。

それでいて、半径150mを超高温と電磁場の嵐に巻きこみつつ直進するという特性は変わらなかった。威力の調節も簡単なようで、モビルドールの「トール」1機を破壊するビームもあれば、一撃でコロニーを消滅させることもできた。

このほかの武装としては肩部のマシンキャノンや、肩アーマー内に格納されたビームサーベルがある。

また、ウイングガンダムゼロの最大の特徴は、戦闘用プログラム「ゼロシステム」である。

ゼロシステムとは簡単にいってしまえば、必勝の策をパイロットの脳に直接伝達する、というものである。だが、このシステムは非常に強い強制力をもち、それを

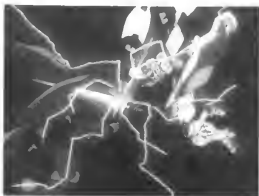
実行させるために必要とあらば、パイロットの精神だけでなく肉体にすら干渉し、さまざまな能力を底上げするという驚くべき機能をもっていた。

前述したコロニー破壊も、ゼロシステムに心の隙をつかれたカトルが暴走した結果であり、最悪の場合、パイロットが死に至るケースもあった。

その反面、これを使いこなせるならば、ウイングガンダムゼロの圧倒的な攻撃力と相まって、絶望的な戦局でさえもくつがえすことができるという。

カトルのほか、デュオ・マックスウエルさえもその餌食としたこのシステムを服従させ、使いこなしたのはヒイロ・ユイただひとりであった。OZのエースパイロットであったゼクス・マークスですら、その域に達していたとはいえない。

そしてそのヒイロも、乗り換えた当初はたびたびゼロシステムの影響で暴走していた（同種のエビオンシステムをもつ「ガンダムエビオン」にはじめて乗った際には、敵味方を問わず破壊のかぎりをつくした）。ゼロシステムがいかに強力であるかを物語るエピソードである。



ウイングガンダムゼロのビームサーベルは、ガンダムエビオンのものと互角のパワーをもつ。

■大気圏突入中にツインバスターライフルを放ち、地球を救う

ウイングガンダムゼロは、製作したカトルからOZ、OZからゼクスを経て最終的にはヒイロへ引き継がれていく。

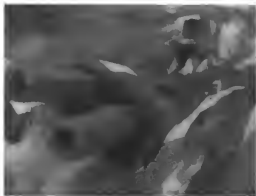
ヒイロはこの機体で完全平和主義をかけるサンクキングダム防衛戦に参加したのち、コロニー革命組織ホワイトファンクが台頭する宇宙へとあがった。今や戦いの中心は地球ではなく、宇宙へ移ったことを知ったからである。

ここでは主にガンダムエピソードと戦うことになるが、ゼロシステムと同種のエピソードを搭載するこの機体と戦うには、互角の性能をもつウイングガンダムゼロしかいなかったのである。

また、張五飛やトロワ・バートンといったほかのガンダムパイロットが乗りこんで、戦闘を行ったこともあった。その場合、ゼロシステムがパイロットの進むべき道を指し示したり、失われた記憶をとり戻すきっかけになったという。

ヒイロらガンダムチームが少数精鋭の第三勢力として参加した、地球とコロニーのあいだの戦争は、ゼクス率いるホワイトファンクが勝利を手にした。

しかし、ヒイロとゼクスの死闘は超大型戦艦「リーブラ」を舞台に続いていた。ウイングガンダムゼロは、その手にツインバスターライフルを持たぬまま、ガンダ



ツインバスターライフルの一撃が、落下する超大型戦艦リーブラの一部を砕き地球を救った。

ムエビオンの超強力なビームサーベルと戦わねばならなかった。

リーブラ表面から宇宙空間。そしてリーブラの内部へと、戦いの場を目まぐるしく変えながら、ヒイロとゼクスの激しい戦いは一進一退のまま続いた。

巨大移動要塞「バルジ」すら一刀両断する、ガンダムエビオンのビームサーベル。それをかわし、マシんキャノンを叩きこうもうとするウイングガンダムゼロ。

長く緊迫した激闘の末に勝利をつかんだのはヒイロだった。

その決着直後、ヒイロたちはリーブラの一部が地球に落下していることを知らされる。

ゼクスはガンダムエビオンの最後の力でリーブラの動力システムを破壊。ヒイロは五飛が運んできたツインバスターライフルに望みを託し、大気圏に突入する。

大気圏突入中という困難な状況のなか、ヒイロはツインバスターライフルの照準を合わせた。その一撃はリーブラを木端微塵に粉碎し、自身も生還した。こうしてウイングガンダムゼロは地球を災厄の危機から救い、最後の戦争の幕を引いたのであった。

天より降り立った猛き流星

XXXG-01W

ウイングガンダム

コロニー
地下組織

ドクターJがつくりあげた、高い汎用性を持つ
可変型モビルスーツ。全高16・3m。重量7・
1t。主な搭乗者はヒイロ・ユイ。

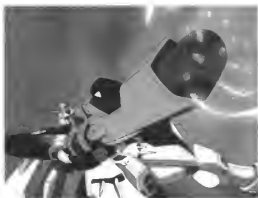
■海原に落下した第一の流星

L1コロニーから射出された「ウイングガンダム」であったが、その計画はすでにOZ本部の察知するところであった。

OZのゼクス・マーキスは「リーオー」でウイングガンダムに攻撃をしかけるが、バスターライフルの反撃にあい、瞬時に部下の「エアリーズ」2機を失ってしまふ。だが、それにひるむゼクスではなく、リーオーの四肢をウイン



バード形態



バスターライフルを構えるウイングガンダム。その火力は一度に十数機を撃破することができる。

グガンダムにからめつかせて自由を奪うと、自身はバラシユートで脱出。この作戦は見事に成功し、ウイングガンダムは深海に消えていった。

ウイングガンダムは可変機能を備え、高い戦闘能力と汎用性を併せもつ万能モビルスーツであったが、それはひな型となつた「ウイングガンダムゼロ」のデチューン（性能を下げる処理）した機体と考えるなら納得のいくところである。

むろん、バード形態は単なる移動手段ではない。OZのガンダニューム合金輸送シャトル撃墜任務では、高空で迎え撃つための手段として使用されていた。

オペレーションメテオ開始早々に深海5500mへと沈んだウイングガンダムであったが、「ガンダムデスサイズ」のパイロットであるデュオ・マックスウェルの助けを借りて戦線に復帰し、前述のシャトル迎撃を皮切りに、さまざまな任務に参加することとなる。

北大西洋OZ補給基地襲撃、リリーナ・ドーリアン暗殺モビルスーツ部隊迎撃、北米・ニューエドワーズ基地襲撃、「トールラス」輸送作戦阻止など、ウ

イングガンダムはわかっているだけでもこれだけの対OZ作戦に従事している。

どの作戦でもリーオーやエアリーズ、「トラゴス」といった、スペシャルズ率いるモビルスーツの大軍を相手にしながら、一步も譲らぬ獅子奮迅の働きを見せている。しかし、トールラス輸送作戦阻止時に指令を受けて自爆。その直後、破片はゼクスにより回収され、修復。ヒイロ・ユイの手に戻ったものの時すでに遅く、OZの地球圏掌握の動きを止めることはできなかった。

■3 発限りのバスターライフル

主兵装のバスターライフルは、一度発射すれば半径150mを超高温圏と強電磁場に変える恐るべき威力をもつが、最大出力では3発しか撃つことができない。

ウイングガンダムが戦闘開始直後にバスターライフルを投げ捨てて、シールド内に格納されたビームサーベルで白兵戦を挑むのは、バスターライフルのエネルギー切れという単純だが深刻な問題を抱えているためであったのだ。

また、ウイングガンダムのもうひとつの特徴であるバード形態だが、これがウイングガンダムの高い汎用性を支えている。バード形態に変形することで、高速かつ長距離移動が可能となっているのだ。

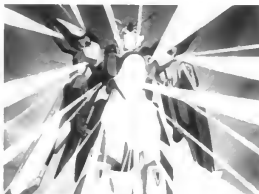
ヒイロがコロニー社会に帰還した際、ウイングガンダムは海底に廃棄されたが、

レジスタンスのサリイ・ポオがこれを発見、回収。密かに再興されたサンクキングダムへともち込まれ、三度、ヒロの手に戻ることになる。

この直後、欧州・ルクセンブルク基地においてモビルドール「ビルゴ」の大部隊に戦いを挑むが、衆寡敵せず、ウイングガンダムは行動不能に陥ってしまう。結局、ヒロは「ガンダムエビオン」に乗り換えることを選択する。

最終的にウイングガンダムはOZによって回収、修理されたものの、乗る者もないままルクセンブルク基地格納庫で埃をかぶり続けるはずであった。

だが、世界国家元首たるトレイズ・クシュリナーダの戦いで最後の活躍をみせる。トレイズの乗る「トールギスⅡ」がコロニー革命組織ホワイトファングの超大型戦艦「リーブラ」の主砲の直撃を受ける寸前、レイディ・アンの乗ったウイングガンダムがトールギスⅡをかばって身代わりとなり、大破した。破壊と修復、勝利と敗北を繰り返しながら数多くの戦場を駆け抜けたウイングガンダムの、これが最期であった。



自爆装置が作動し、内部からまばゆい光を放つウイングガンダム。この後、大爆発を起こす。

音もなく忍びより死をもたらす暗殺者

XXXG-01b

ガンダムデスサイズ

コロニー
地下結城

プロフェッサーGが開発した、隠密性と白兵戦に優れる機体。全高16・3m。重量7・2t。主な搭乗者はデュオ・マックスウェル。

■死神の鎌を持つ

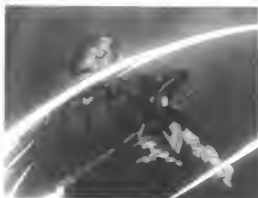
黒きガンダム

5人の科学者によるオペレーション・メテオ発動時、L2コロニー付近から出撃した漆黒の機体。デュオ・マックスウェルが操る「ガンダムデスサイズ」である。

地上での初戦闘はOZが掌握していた「リーオー」工場の破壊任務であった。

ここで、ガンダムデスサイズは監視用のレーダーや各種センサーにその存在をさとられることなく、





ソナーにもセンサーにも察知されず攻撃を仕掛けるガンダムデスサイズは恐怖そのものであった。

建物内に侵入。ビームサイズによって工場施設や多数の稼働前のリーオーを斬り裂いた。

この後、海底5500mに沈んだ「ウイングガンダム」を鹵獲しようとするOZの作戦を察知したデュオは、OZの「キャンサー」や「バイシーズ」といった水中用モビルスーツ部隊を、またたく間に両断、殲滅。

返す刃で水上の航空母艦1隻を含む軍艦3隻を撃沈し、OZのガンダム鹵獲作戦を妨害した。

また、北米・地球圏統一連合軍ニューエドワーズ基地を襲撃した際には、ビームサイズを振るってリーオーと「トラゴス」の混成部隊を斬り裂いただけでなく、刃部とは反対の石突きで背後からせまるリーオーの頭部を破壊するという、手練の技も見せて奮戦した。

さらに、飛び道具として左腕に装備された射出可能なバスターシールドがあり、その性能は、逃げ去ろうとした地球圏統一連合海軍の軍用ヘリを追尾、一撃で破壊したほどである。

■戦う場所を選ばぬ白兵戦用ステルス機

さて、ガンダムデスサイズが携行する長い鎌状の武器はビームサイズと呼ばれており、その名のとおり、長大で切れ味抜群なビームの鎌（サイズ）を形成する。

その威力はすさまじく、OZの技術ではビーム兵器を稼働させることができなかった水中ですら、変わらぬ斬れ味を見せる。

また、前述のバスターシールドがあり、これはシールド左右のエッジがV字型に展開すると同時に先端からビームの穂先が出現。標的に向かって飛翔し、粉碎するというものである。このほか、頭部にバルカン、肩部にマシンキャノンが装備されている。

しかし、この機体の真価はそうした武装ではなく、肉眼でしか発見することのできない高度なステルス性能にある。

ガンダムデスサイズは単にレーダー波からだけでなく、ソナーによる音波探査や赤外線センサーによる探査からも逃れ、隠密活動が可能である。

それはハイパージャマーと呼ばれる装置によるもので、これを作動させることで高いステルス性能を発揮することが可能となっている。通説では攪乱粒子を散布して、ステルス性を確保するといわれている。

このようにガンダムデスサイズは高いステルス性能を活かし、敵に察知されぬまま接近。ビームサイズで一刀両断するという機体であった。だからこそ、ガンダムデスサイズの武装は原則として白兵戦もしくは近距離兵器のみなのである。

ニューエドワーズ基地での戦い以降も中国大陸湾岸部やユーラシア大陸鉄道、中東某国等、地球中を連戦したガンダムデスサイズであったが、それでもOZが地球圏統一連合政府とコロニーを掌握する流れを変えることはできなかった。

結局、ガンダムデスサイズは「シェンロンガンダム」や「ガンダムサンドロック」らの援護でOZのシンガポール宇宙港から宇宙へと上がったものの、OZ宇宙部隊に捕捉され、善戦むなしく鹵獲された。さしものガンダムデスサイズも、OZのモビルドールシステムを搭載した「トールラス」には歯が立たなかったのだ。

パイロットのデュオはなんとか生きて脱出したものの、ガンダムデスサイズはトールラスのビームカノンの炎に沈み、そのようないわば公開処刑のような形でコロニー中に中継されたのであった。



背後から迫るリーオーのモニターカメラを、ビームサイズの石突きで破壊するガンダムデスサイズ。

地獄から舞い戻った死神の鎌

XXXG-01D2

ガンダムデスサイズヘル

コロニー
地下組織

「ガンダムデスサイズ」を5人の科学者が大幅に改造した機体。全高16・3m。重量7・4t。主な搭乗者はデュオ・マックスウェル。

■復活のデスサイズ

トロワ・バートンによって破壊された「ガンダムデスサイズ」であったが、機体そのものは回収され、OZの月面工場に運ばれていた。そこでプロフェッサーGら5人の科学者の手によって隠密裏に修理、強化されたのがこの「ガンダムデスサイズヘル」である。

パイロットであるデュオ・マックスウェルは、OZの内部抗争にともなう混乱に乗じて、秘匿され





胸部に装着されているのがステルス性を強化するリブジャマー。その名のとおり肋骨のように見える。

ていた未完成のガンダムデスサイズヘルに乗りこみ、脱出することになった。そのため、この機体の初陣は70あるいは80%程度の完成度で戦わざるをえなかった。にもかかわらず、ガンダムデスサイズヘルは圧倒的な性能を見せつけた。新たに装備されたアクティブクロークはモビルドールの新型「ビルゴ」のビームをよせつけず、同じく新兵器のツインビームサイズはビルゴを袈裟斬りで大破させ、難なくOZの眼から逃れたのであった。

その後、デュオは某コロニーにてジャンク屋のふりをしつつ、OZの輸送部隊を襲撃する破壊工作に従事していた。

頭部バルカンで迫る敵機を牽制し、ツインビームサイズで両断。また、より大型になり出力も増したバスター・シールドで破壊するという戦法も健在である。

散発的な戦闘でOZの勢力を削ぐという破壊工作は月工場でのビルゴ製造を妨害、加えて、未完成のガンダムデスサイズヘルを実戦で調整できるという、一石三鳥の作戦であった。

■新たな力はコウモリの翼

ガンダムデスサイズヘルは、各部にバーニアを増設して宇宙戦に対応させた本体に加え、ツインビームサイズやアクティブクローク、リブジャマーといった追加装備によって戦闘力を飛躍的に増強させている。

ツインビームサイズは上下にブレードを並べたもので、通常のビームサイズよりも斬れ味が増している。また、先端にロケットブースターが設置されており、これらの相乗効果によって、従来の量産型よりも防御力が向上したモビルドールの「ビュルゴII」をも切断、大破させることが可能である。

また、もうひとつの主兵装であるバスターシールドもより大型化し、形状も死神らしく棺桶型となった。加えて先端から放出するビーム刃も出力が増強されており、その威力は「ウイングガンダムゼロ」のツインバスターライフルの一撃をも、相殺するほどであった。

防御面では上半身を覆うアクティブクロークが特筆される。これはコウモリの翼にも似た形状をした可動式の増加装甲であり、ビュルゴのビーム攻撃程度なら弾いてびくともしない。また、展開時には機体の姿勢制御に用いることもできる。

一方、ハイパージャマーの機能も増強されており、単に身を隠すステルス機能だ

けではなく、敵機の電子機器の動作や無線通信を積極的に妨害することが可能なECM（ジャミング装置）としても使用できる。

この新たな機能を活用することで、ガンダムデスサイズヘルは敵部隊のセンサーや、不法に占拠されたコロニーの探査機器に気どられることなく接近、もしくは内部へと潜入することが可能であった。

こうしてガンダムデスサイズヘルは、デルマイユ派とトレイズ・クシユリナーダ派とに分裂したOZや、コロニー革命組織ホワイトファングの台頭などで、乱戦と混乱の度合いを深めて行く宇宙にあって、いずれの陣営にも属さぬ独自の戦力として戦うこととなる。

ガンダムデスサイズヘルと、それぞれ個別に戦っていた残る4機のガンダムは、最終的に超大型戦艦「ピースミリオン」へと結集し、少数だが一騎当千ぞろいのGチームを結成。そして、宇宙の諸勢力を實力で併合、その装備や施設を接収して拡大したホワイトファングのモビルドール部隊や、大将機たる「ガンダムエビオン」と戦うこととなる。



コロニーを守るべく、OZのトラント・クラーク特尉が乗るウイングガンダムゼロと戦う。

全身に銃砲とミサイルを宿した火薬庫

XXXG-01H

ガンダムヘビーアームズ

コロニー
地下組織

ドクトルSが設計・製造した遠距離戦に特化した機体。全高16・7m。重量7・7t。主な搭乗者はトロワ・バートン。

■何もかも粉碎する重武装

OZのドーバー基地に現れた「ガンダムヘビーアームズ」は、圧倒的な火力で「リーオー」と「トラゴス」からなる基地防衛隊をまたたく間に掃討した。

ビームガトリングガンはリーオーを蜂の巣のように穴だらけにして沈黙させ、間合いを詰めたあとに胸部に内蔵された二連装大型ガトリング砲の連射で、トラゴス部隊を壊滅させたのだ。





ビームガトリングガンを独特の構えで発射するトロワ。見る者が見れば、すぐに彼だとわかる。

これに追撃としてホーミングミサイルと、マイクロミサイルポッドが発射されれば、どんな堅牢な基地施設であろうとひとたまりもない。

こうしてガンダムヘビーアームズの一斉射撃で、ドーバー基地は宇宙港もろとも、炎の中に沈んだのであった。

ガンダムヘビーアームズは、その身に宿した重武装によって敵を近づけることなく粉碎する、遠距離戦及び砲撃戦に特化した機体。もし仮に弾切れになったとしても、ガンダムヘビーアームズは右下腕部にセットされたアーミーナイフを用い、最後の最後まで戦い抜くのだ。

南極大陸の戦いで、アハト調査官が乗る「エアリーズ」にとどめを刺したのも、このアーミーナイフだった。このとき、トロワ・バートンは機体を激しく回転させながら斬り裂くという大技を披露した。

この基本戦術によってガンダムヘビーアームズは南欧・コルシカ島のリーオー製造工場や北米・ニューエドワーズ基地での戦闘、また、南極大陸におけるアハト調査隊との戦いに勝利したのである。

■近遠、両方の戦闘をたくみにこなす名機

主武装はシールド一体型のビームガトリングガンで、ガンダムヘビーアームズの長射程からの先制攻撃を担う。

また、肩部アーマー内に搭載されたホーミングミサイルは、左右合わせて6発。もうひとつのミサイル兵器である両脚部外側にとり付けられたマイクロミサイルポッドには、12発づつの計24発を装填。

ホーミングミサイルとマイクロミサイルの計30発が全弾命中すれば、地面はちょっとしたクレーターのようになり様となる。

また、たとえ直撃を避けられたとしても、その爆風と衝撃波でリーオー程度のモビルスーツは、たちまちばらばらになってしまうのであった。

このほかの武装としては頭部バルカン砲と、左右肩部のマシンキャノンがある。これらは比較的低威力だが、砲撃戦用でありながら敵機との接近戦も多かったガンダムヘビーアームズにとっては、重要な武器であった。

そしてこれら近距離用火器を使い果たしたとき、最後の武器となるのが右下腕部にセットされた大型のアーミーナイフである。

これは普段は肘側へと折りたたまれていたが、いざ戦闘となった際には起き上が

って必殺の武器となるのだ。

南極・パークレー基地ではヒイロ・ユイが乗りこみ、ゼクス・マークスの「トルギス」と死闘を繰り広げた。このときは左腕を負傷したヒイロが使いやすいうに左下腕部を取り外し、ビームガトリングガン直接将マウントしていた。

この調整をしたのはトロワだが、ビームガトリングガンを排除したあとの肘には、本来ガンダムヘビーアームズにはないビームサーベルをセットするという気遣いも見せている。

結局、ガンダムヘビーアームズはトロワらガンダムパイロットがそろって宇宙に帰還した際に乗り捨てられ、その後の行方は杳として知れなかった。

しかし、実はレジスタンスのサリイ・ポオが苦心して回収していた。

そして「ウイングガンダムゼロ」に乗ったヒイロが宇宙へと戻ろうとしたときに託され、超大型戦艦「ピースミリオン」へと運ばれた。

かくして「ガンダムヘビーアームズ改」に生まれ変わった機体は、トロワの帰還を待つのであった。



ガンダムヘビーアームズがアハト機に回転斬りを決めた瞬間。渦巻く煙が技の威力を物語っている。

武装を強化され宇宙を駆ける弾薬庫

XXXG-01H2

ガンダムヘビーアームズ改

コロニー
地下組織

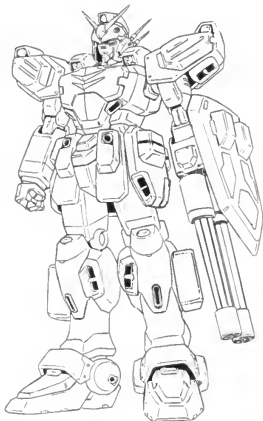
「ガンダムヘビーアームズ」を強化改造した機体。全高16・7m。重量7・7t。主な搭乗者はトロワ・バートン。

■宇宙でも変わらぬ重武装

物理攻撃を無効化するプラネイトディフェンサーを標準装備する、モビルドールの「ビルゴII」部隊に突撃する「ガンダムヘビーアームズ改」。

宇宙用に改造され、かつ、増強された火力にものをいわせ、群がる戦闘人形を次々と撃破していた。

ガンダムヘビーアームズ改は、サリイ・ポオが回収していたものと





ダブルビームガトリリングガンはタイミングさえ合えば、プラネイトディフェンサーをも貫く。

もとの機体が、超大型戦艦「ピースミリオン」をあずかるハワードの手で宇宙用に改修されたものである。

主な改修点はバックパックのスラスタの増強と、スカートアーマー各部へのバニーアの増設であった。

主兵装も二連装式のダブルビームガトリリングガンとなり戦闘力も増強した。これによってコロニー独立運動組織ホワイトファングの主力であるビルゴⅡにも、十分対抗できるようになったのである。

ほかの武装にはあまり手が加えられていないようであるが健在で、胸部ガトリリング砲、各部ミサイルの一斉発射も使っていた。

ただ、戦場が広大な宇宙空間では、有効射程の長いダブルビームガトリリングガンの使い勝手がよかったのだろう、多用していた。

このほかにも単独で戦うだけでなく、カトル・ラバーバ・ウィナーの指揮のもと、「ガンダムデスサイズヘル」や「アルترونガンダム」の進撃を補佐する長距離支援の役も果たしていた。

猛烈な瞬発力を活かして戦場を駆けぬける二刀流使い

XXXG-01SR

ガンダムサンドロック

コロニー
地下組織

H教授が完成させた、汎用型ガンダム 全高
16・5m。重量7・5t。主な搭乗者はカト
ル・ラバーバ・ウィナー。



■二刀流の猛威

オペレーション・メテオが発動し、コロニーから飛来した5つの流星の内のひとつ「ガンダムサンドロック」が某砂漠に落下した。

現場に急行したOZの「リーオー」部隊が調査に当たろうとしたところ、砂にまぎれて隠れていた「マグアナック」部隊の奇襲攻撃を受ける。

その混乱に乗じて、砂の上を猛スピードで接近したガンダムサン



威風堂々としたガンダムサンドロックの姿。この背後にはマグアナック隊がひかえている。

ドロックは、ヒートショーターの二刀流によって、リーオー隊長機と僚機を同時に両断した。

このガンダムサンドロックは汎用機である。しかし主兵装のヒートショーター二振りを手には、猛烈な瞬発力を活かして戦場を縦横無尽に駆けぬけることを本分とすることから、ガンダニウム合金を厚くした重装甲が施されている。

くり出されるヒートショーターの威力は凄まじく、赤熱した刃はリーオーを一瞬で一刀両断にしてしまうほどであった。

そしてこのヒートショーターと専用シールド、さらにバックパックを組み合わせることで生まれたのが、必殺技のクロスクラッシャーである。

このクロスクラッシャーは単に地上の敵だけでなく、ガンダムサンドロックの跳躍力と合わせれば、空中の敵すらも撃退することができる。事実、南欧・シチリア島基地での戦いでは、OZのワーカー特尉が乗った「エアリーズ」をこれで撃退している。このワーカー特尉はスペシャルズのエースたるゼクス・マークスも一目置くほどの優秀な指揮官であ

ったが、その彼ですらカトル・ラバーバ・ウィナーの駆るガンダムサンドロックには歯が立たなかったのである。

■屈強な戦士団を従えるガンダム

ガンダムサンドロックのヒートショーテルは半月型の剣であるが、クロススクラッシュヤーは反りを外側に向けた二振りのあいだに生じる空間に敵機を捕捉、そのまま刃で締めつけるようにして両断するという、おそろべき技であった。

また、シールドに仕込まれた幻惑装備シールドフラッシュは、強烈な閃光を発することで敵機のカメラをくらますもので、その隙にサンドロックは急接近して敵を斬り裂くか、逃走するかを選ぶことができる。

ガンダムサンドロックにはこのほか、頭部バルカンと肩部のミサイルランチャーがある。また、敵にヒートショーテルを投擲し、切断するという捨て身の技もある。どれも威力は申しぶんないが、遠距離の敵に対しては効果は薄いといわざるをえない。だが、ガンダムサンドロックにはその不利を補って余りある心強い味方がいた。それが「マゲアナック」隊である。40機からなるマゲアナック隊の一斉射撃はガンダムサンドロックの支援には十分すぎる威力であった。

こうして、家臣にも似た仲間とともに、またあるときはガンダムの仲間とともに、

ガンダムサンドロックは世界中のOZの基地を攻撃した。

ガンダムサンドロックが活躍した作戦としては南欧・シチリア島基地や北米・ニューエドワーズ基地襲撃、「トールス」のシベリア輸送阻止作戦などがあげられる。

このようにさまざまな戦場で戦ったガンダムサンドロックであったが、やはり、OZ優勢という時代の流れを食い止めることはできなかった。

この事態を打開するために宇宙へと戻ろうとしたカトルらであったが、シンガポール宇宙港に駐留する防衛部隊の抵抗は激しく、このままではガンダムサンドロック「ガンダムデスサイズ」「シェンロンガンダム」の3機が共倒れになってしまうかねなかった。

そう判断したカトルは、ほかのガンダムを宇宙に送るべくガンダムサンドロックの自爆スイッチを押した。

だが、ガンダムサンドロックはすぐに爆発せずコクピットの扉が開きパイロットの脱出をうながす。そして、カトルの脱出を確認してから無人で爆発するのだった。



ワーカー特尉のエアリーズもガンダムサンドロックのクロスクラッシャーのまえに、はかなく散った。

宇宙用に改修された重装歩兵

XXXG-01SR2

ガンダムサンドロック改

コロニー
地下組織

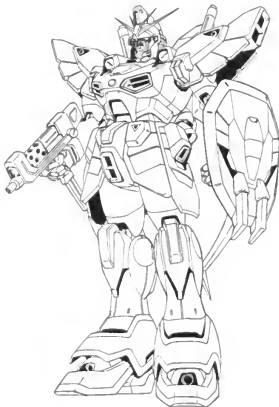
「ガンダムサンドロック」を宇宙用に改修した機体。全高16・5m。重量7・5t。主な搭乗者はカトル・ラバーバ・ウィナー。

■ガンダムをまとめる

指揮官機

コロニー独立運動組織ホワイトファングは、超大型戦艦「リーブラ」よりモビルドールの「ビルゴII」部隊を展開。5機のガンダムを擁する超大型戦艦「ピースミリオーン」に対して消耗戦を仕掛けた。このままではガンダムの敗北は必至と思われたそのとき、「ガンダムサンドロック改」が搭載していたゼロシステムを発動。

これによってカトル・ラバー





宇宙に上がってからは、ほとんどヒートシールドを使わず、ビームマシンガンで戦っていた。

パ・ウイナーの隠れていた戦術眼も引き出され、エビオンシステムによって統率されたビルゴIIを圧倒する見事なフォーメーションを指示し、敵モビルドール部隊を退けることに成功したのだった。

ガンダムサンドロック改は、ピースミリオン内の工廠（工場の意味）において、ガンダムサンドロックが宇宙用に改修されたものである。具体的には肩アーモア内やスカートアーマー後部にバーニアが増設されたことと、バックパックが宇宙用に換装されたことが挙げられる。

これで宇宙での運動性は向上したが、その代わりに必殺技であったクロスクラッシャーは使用不可能となってしまう。それを補うべくビームマシンガンが装備され、その威力は一撃でOZの「トールラス」を破壊するほどである。

冒頭のゼロシステムは一回使っただけで取り外されたが、ガンダムサンドロック改は最後の戦いまでガンダムチームの指揮官機として活躍。その指揮能力は、ミリアルド・ピースクラフト（元OZ士官、ゼクス・マークス）さえ一目置いたほどであった。

伝説の龍を右腕に宿し、業火を操る白兵戦機

XXXG-01S

シエンロンガンダム

コロニー
地下組織

老師Oが設計、開発した格闘戦用ガンダム 全高16・4m、重量7・4t。主な搭乗者は強五飛（チャン・ウーフェイ）。

■単機で基地を破壊

L5コロニーから射出されたカプセルの中より現れた「シエンロンガンダム」は、それを調査にやってきた地球圏統一連合海軍部隊を文字通り焼き尽くした。

伝説の龍を模した右腕から繰り出される二筋の火炎は、軍艦のみならず、空を飛ぶ戦闘機さえ爆破、炎上させたのである。

このシエンロンガンダムは、L5コロニーに潜伏していた科学者





ドラゴンハングを発射寸前のシェンロンガンダム。
この直撃を受けて、軍艦の艦橋は沈黙する。

である老師Oが設計・開発した、白兵戦に秀でた機体であった。
空こそ飛べないが、背部スラスターを噴かしての猛ダッシュで敵機の不意を突き、
近接戦闘にもちこむ戦法を得意とする。

その機動力は水上での対艦戦闘でも發揮され、対空砲火を難なく切りぬけ、敵戦艦の甲板の上に乗ってしまう。そして右腕部のドラゴンハングで戦艦のブリッジを叩き潰すと、飛来した2機の戦闘機をもドラゴンハングファイアーの火炎放射で撃墜した。

もうひとつの主兵装としてはビームグレイブがあり、これは長いスティックの先にビームの刃を発生させるものである。

ドラゴンハングとビームグレイブ。シェンロンガンダムのこのふたつの武器の破壊力は凄まじく、単機でありながらOZのインダス補給基地を壊滅させたほどであった。

このときはビームグレイブで地上の建造物を切り裂き、ドラゴンハングで燃料タンクを破壊すると、続けてドラゴンハングファイアーで補給基地すべて

を炎上させている。

■悪を滅ぼす龍の顎

さて、ドラゴンハングとは伸縮自在の右腕全体をいい、龍の頭を模したアタッチメントが牙で、敵機を引き裂いて致命傷を与える。

さらにアタッチメントには2門の火炎放射機が搭載されており、これはドラゴンハングファイアーという異名をもつ。このシェンロンガンダム火炎放射という特異な主武装は、ほかのモビルスーツと比べかなりの異彩を放っている。

だが、機体構造的に脆弱な戦闘機はともかく、チタニウム合金製の地球圏統一連合軍のモビルスーツや堅牢な装甲をもつ軍艦でさえ溶かし燃やし尽くすドラゴンハングファイアーは、見た目の派手さ以上に恐るべき武器であった。

むろん、ビームグレイブの斬れ味も鋭く、一閃でOZのモビルスーツを大破させるほどである。

この他の装備としては左腕に装着された強固な円形のシールドがあるが、とっさに腕を振って敵機に投擲し、破壊するという離れ業も見せる。

こうして無類の強さを誇ったシェンロンガンダムではあったが、地上での活動を主眼に置かれていたこともあり、戦いの舞台が宇宙空間に移ってからは劣勢にまわ

ってしまう。

OZの宇宙要塞「バルジ」における戦いでは「リーオー」を相手に善戦するものの、要塞からの非人道的攻撃でリーオー部隊ごとビーム砲撃を受け、右腕部のドラゴンハングを失い中破。

さらにはモビルドールの「トールラス」隊の追撃を避けるべく、パイロットの張五飛はビームグレイブで自機の腹部をえぐり、推進剤を急激に膨張させて脱出するという荒業を見せた。

かくして満身創痍となったシェンロンガンダムは、月のモビルドール工場へと向かうツバロフ技師長を襲撃するものの、リーオーからなる防衛部隊のまえに撃破寸前にまで追いこまれる。

だが、ツバロフは研究対象としてガンダムを捕獲できる誘惑に負け、破壊ではなく捕獲を指示。シェンロンガンダムは鹵獲されることとなる。ただしこれは、より強い力を得たい五飛の策略だった……。

なお、五飛は本機を愛称でナタクと呼んでいるが、これは中国の英雄神の名である。



バルカン砲を連射してリーオーを破壊しつつ、OZの宇宙要塞バルジに突撃するシェンロンガンダム。

双頭を得てさらなる力を宿した神の龍

XXXG-01S2

アルトロンガンダム

コロニー
地下組織

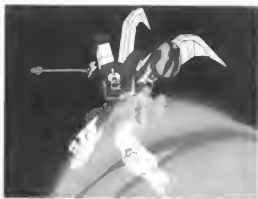
5人の科学者が「シェンロンガンダム」を改造した機体。全高16・4m。重量7・5t。主な搭乗者は張五飛（チャン・ウーフェイ）。

■神の龍から二頭龍への進化

張五飛の思惑通り、OZの月工場へと移送された「シェンロンガンダム」は、老師Oら5人の科学者が隠密裏に入手し、豊富な資材と施設を用いて強化改造を開始した。

OZの内部抗争の影響で「アルトロンガンダム」は急遽出撃するが、完全ではない状態であってもモビルドールの「ビルゴ」を歯牙にもかけぬ強さを見せるのだった。





ドラゴンハングファイアー発射の瞬間。その火炎の威力はビルゴII 2機をも一撃で粉碎する。

アルトロンガンダムの機体色は緑へと変わり、原則として宇宙での自由な活動が可能になったほか、武装面でもさまざまな新兵器が追加された。

事実、シェンロンガンダムはモビルドールの「トールラス」との戦いでは苦戦したが、アルトロンガンダムは1機でトールラス部隊を蹴散らしている。左右から迫る敵はその名の通り両腕のドラゴンハングで破壊し、龍の尾を模したビームキャノンは一撃でトールラスを破壊する。そして新装備のツインビームトライデントは、たやす

く敵機を両断、炎上させるのであった。

アルトロンガンダムはツインビームトライデントによる斬撃と、背部のビームキャノンによる射撃を主体とした戦法を使用している。

アルトロンガンダムになってからドラゴンハングはあまり使われなくなったが、機体制御が地上に比べてシビアな宇宙空間での戦いでは、延伸するがゆえに重心やバランスが狂いかねない同武器は、少々使い勝手が悪かったのかもしれない。

だが、まったく使わないということでもなく、左右同時に迫る敵機を両腕のドラゴンハングで返り討

ちにする離れ技は、たびたび披露していた。

■戦争を終わらせたアルトロンガンダムの一撃

アルトロンガンダムの主兵装は第一にツインビームトライデントであり、これは三つに分かれたビーム刃を長柄の両端に形成する。その威力はガンダニウム合金製のビルゴやモビルドールの「ビルゴⅡ」を一刀両断するほどだった。

また、背部のフレキシブルアーム先端にセットされた二連装式ビームキャノン破壊力もさることながら、かつてのシェンロンガンダムに不足していた広い射角と長射程を補う射撃武器となった。これによってアルトロンガンダムの汎用性はより高まることとなった。

このほか、ドラゴンハンクとドラゴンハンクファイアーが左右の腕に装着され、射程距離や破壊力もシェンロンガンダムより向上した。なお、その関係でシールドは左肩アーマーにマウントされている。

アルトロンガンダムで月面を脱出した五飛は、己の一族のコロニーにて機体の調整と自身の再修業を行っていたが、OZの企みとそれに屈せぬ一族の人々の意志によってコロニーは自爆。これによって五飛は戦う自由を得たものの、その代償は決して小さくなかった。

その後は長らく単独で戦っていたが、宇宙に上がったヒロ・ユイとの再会をきっかけに超大型戦艦「ピースミリオーン」に乗りこみ、ほかのガンダムとともに、勢力を拡大したコロニー独立運動組織のホワイトファンクと戦うこととなる。

そのホワイトファンクと世界国家との最終決戦に介入した五飛とアルトロンガンダムは、かつて自分を打ち負かしたトレーズ・クシユリナーダとの決闘を実現させる。

トレーズの「トールギスⅡ」との戦いは剣戟戦となり、ビームサーベルとツインビームトライデントは激しく交錯、そのたびにまばゆい閃光を宇宙に発した。

最後はツインビームトライデントの光の刃がトールギスⅡのボディを貫き機体は爆破、炎上。トレーズは帰らぬ人となった。かくして、ここに元首を失った世界国家は敗北を宣言したのであった。

こうして、アルトロンガンダムは地球とコロニーとのあいだにおこった闘争に終止符を打った機体となったのである。



一騎討ちの末にトールギスⅡに勝利した五飛。だが、彼の胸に去来したのは憤りと虚しさだった。

ガンダムサンドロックにつき従う頼もしい友軍機

WMS-03

マグアナツク

地球圏統一連合に属さぬ中東諸国が開発。全高16・4m、重量7・4t。主な搭乗者はラシード、アブドゥール、アウダ、アフマド。

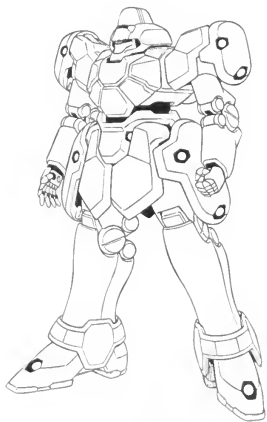
■見事な連携で

戦い抜いた40機

コロニーより降下した物体が「ガンダムサンドロック」とは知らず、それを調査すべく砂漠某所へと急行したOZの「リーオー」部隊。

だが、そこには黄土色をしたモビルスーツ「マグアナツク」の一団が砂の中に潜み、待ち受けていた。

そのビームライフルや実体弾ライフルは強力で、降り注ぐ砲撃に





輸送機で脱出するカトルを援護するマグアナック隊。
見事なまでのフォーメーション攻撃を見せる。

は多勢に無勢の観もあり、リーオー部隊はなすすべもなく破壊されるのだった。その性能はリーオーをわずかに勝る程度であるが、隊員の練度と連携はOZをはるかに上回っていた。

同様に忠誠心も厚く、マグアナック隊はガンダムサンドロックに従うことが多かったが、それは戦場が宇宙になっても変わらず、世界国家軍とコロニー独立運動組織ホワイトファングの決戦の際には、遠く中東から馳せ参じた。

マグアナックの武装はビームライフルにヒートマホーク、大型ライフルと、機体同様に平凡であったが、その反面、カスタマイズは容易であったように、ラシード隊長やアブドゥールなどのパイロットはさまざまにチューンしていた。

隊長機の頭には羽根飾りが付いている。ほかに、腕部を強化してガンダニューム合金製のクローを付けたもの、頭部にサブカメラを付けたものもあった。なかにはバックパックを改良してビームサーベルを装着したものもあるなど、各パイロットの手により、愛情あるカスタマイズがされていた。

高性能すぎるが故に常人には扱えない伝説の機体

02-00MS

トールギス

02

02が完成させた最初の戦闘用プロトタイプモビルスーツ。全高17・4m。重量8・8t。主な搭乗者はゼクス・マークス。

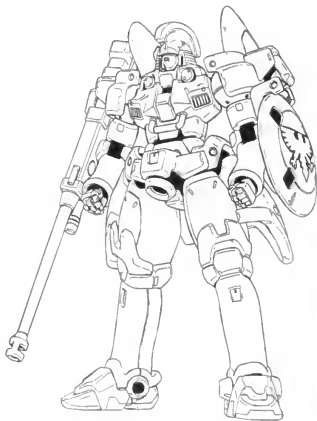
■ゼクス・マークスさえも

扱いかねる最強機体

地球圏統一連合を壊滅させるべく動き出した02は、各地で連合軍の残存勢力を駆逐していった。

02のエースパイロット、ゼクス・マークスは、ようやく調整が終わり完成した「トールギス」に乗り、連合軍のサンクキングダム基地へと出撃した。

だが、無数のビーム砲により撤退を余儀なくされる。ゼクスは自軍に撤退を指示しながらも、自ら





調整中のトールギスに頭部パーツが装着されるところ。その下にはリーオーと同じ顔がある。

はトールギスをサンクキングダム基地へと向けた。

トールギスは重い機体の機動性を、バーニア出力ですべて補うモビルスーツ。その殺人的な加速を自らの身で知ったゼクスは、降りそぐビームを弾きながらも、このモビルスーツの弱点がパイロット自身であると確信する。このままバーニアを吹かせば自分が死んでしまうと。

限界を悟ったゼクスは、トールギスを急上昇させ、後退するのだった。

トールギスは、コルシカ島の古いモビルスーツ工場ではこりをかぶっていたものをワーカーが発見。ゼクスの忠実な部下のオットーが調整し、仕上げたモビルスーツである。

乗る者を選ぶこの機体をゼクスはいたく気に入って、OZを抜けたあともこの機体で戦場を駆け抜けた。その性能は、あるときはたった1機で100機のモビルスーツを退け、またあるときは空と海からせまる「エアリーズ」50機と「キャンサー」20機の大軍を、すべて撃墜しただけでなく、OZの潜水母艦をも一刀両断したほどである。

■史上初の軍用機動兵器として開発される

それもそのはずで、「プロトタイプリーオー」とも呼ばれるトールギスはすべてのモビルスーツの祖であり、「ウイングガンダムゼロ」もこの機体を基としている。

6人（ガンダムを開発した5人の博士と地上に残ったハワード）の技術者が中心となつて開発しており、史上初の軍用機動兵器ということからか「重武装かつ高機動」という両極端な要素を集約した高性能な機体として完成した。

だがその見返りとして、パイロットの生存を考慮しない、莫大な加速重力がかかるものとなった。

この過激な性能からOZはトールギスの正式採用を見送り、余分な性能を排除した量産型モビルスーツである「リーオー」を開発したのである。

トールギスの装甲はガンダニウム合金ではないが、チタニウム合金に特殊な加工をほどこしたものを使用しており、並みのビーム砲やライフルなどの攻撃は弾き返す。そのためかほかの機体に比べて重量が若干重い、突攻機としての装甲は申しぶんなく、背部スラスターの出力はこれを補って余りある。

主兵装はドーバーガンと呼ばれる巨大な砲身の長距離砲と、格闘用のビームサーベル、防御用のシールドで、オプションとしてミサイルポッドもある。

トールギスは南極基地でヒイロ・ユイの駆る「ガンダムヘビーアームズ」と決着をつけるべく対決したが、それはOZの内規を著しく違反した行為であった。これが原因となってゼクスはOZと決別することとなった。

この後、トールギスは宇宙に上がり、ガンダムと同等、もしくはそれを上回るともいわれる性能で、超大型戦艦「ピースミリオン」の支援を受けたゼクスの、対OZ闘争を支えることとなる。

無改造で宇宙戦に対応したトールギスの性能は、実に優秀であったといえるだろう。その過程でゼクスのパイロットとしての技量は著しく向上し、ついにはトールギスをもつてしても役不足にいたった。

そこにはOZが導入したモビルドールとの性能差という深刻な問題もあり、ゼクスは一気にこの問題の解決を図ろうと、ウイングガンダムゼロの奪取をくわだてる。

そしてゼクスはこの作戦の途中でスラスターを破壊されてしまったトールギスをいたみつつも、作戦遂行のために自爆させたのであった。



ガンダムヘビーアームズに搭乗したヒイロと決着をつけるべく、ビームサーベルを振るうゼクス。

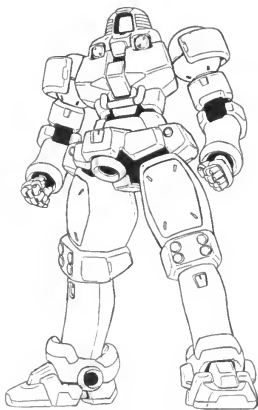
地球圏における主力兵器となった優秀な量産機

0Z-06MS

リーオー

0Z

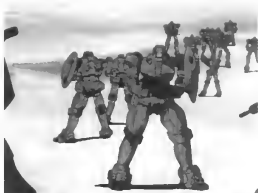
0Zが開発し、地球圏統一連合軍に配備された初のモビルスーツ。全高16・2m。重量7・0t。主な搭乗者は0Z一般兵。



■地球圏全体の主力兵器

地球大気圏に突入する未確認機のひとつを捕捉した0Zのエースパイロット、ゼクス・マーキスはそれを反乱組織の「M作戦」（オペレーション・メテオ）と断定。敵新兵器を破壊すべく「リーオー」で出撃した。

この戦闘でリーオーは、「ウイングガンダム」と互角の戦いを見せたが、それはゼクスのパイロット技術の高さによるものであった。



リーオーは優れた生産性と汎用性から、この時代における戦争の主力兵器となった。

このあと各地の主力機として、テロ活動を行うガンダム等と渡り合うが、その能力差から太刀打ちできなかった。

獅子座に由来する名前を冠したリーオーは、コロニー社会を制圧する地球圏統一連合軍の主力兵器である。

テレビモニターのような四角いカメラアイが特徴で、連合軍にはじめて配備されたモビルスーツでもある。

陸戦用ではあるが汎用性に優れ、オプション装備を装着してさまざまな任務にあたった。また生産性にも優れ、大量に配備されたことから、皮肉なことに地球圏統一連合に反発する勢力においても主力兵器となっていた。

主兵装の105mmライフルのほか、バズーカ、ドーバーガン、シールドおよび、その内側に設置されているビームサーベル、宇宙用ビームライフルなど、さまざまな武装を扱った。

またコストも低く癖のない機体ということから、モビルドールシステムの実験機としても使用された。

リーオーの空戦用として開発された高速ファイター

02-07AMS

エアリーズ

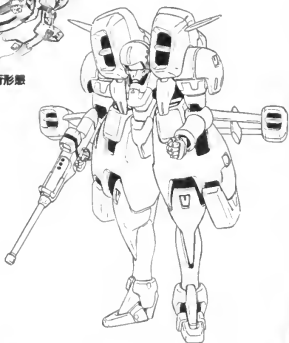
OZ

「リーオー」を基に空戦用に開発されたOZのモビルスーツ。全高16・9m。重量8・0t。主な搭乗者はOZ一般兵。

■優秀なスクランブル機体

大気圏に突入したバード形態の「ウイングガンダム」は、追撃してきたOZのゼクス・マークスが駆る「リーオー」と交戦状態に入った。ゼクスの放ったドーバーガンがウイングガンダムを捉える。

被弾しモビルスーツ形態に変形したウイングガンダムに、ゼクスの援護に駆けつけた2機の高速戦闘モビルスーツ「エアリーズ」が襲いかかった。



飛行形態



飛行形態でも両手は自由に稼働でき、チェーンライフルやミサイルポッドを扱うことが可能だ。

牡羊座にちなんだ名をもつエアリーズは、リーオーから派生した空戦用のモビルスーツである。パイロットスーツを模した姿の足を格納し、オブションパーツなしで飛行が可能となっている。

偵察任務についていたエアリーズ2機で、カトル・ラバーバ・ウイナー操縦の戦闘機を簡単に撃墜し、空戦能力の高さを実証した。

このように得意とする環境においては高い戦闘力を発揮したが、対モビルスーツ戦やモビルドールとの戦闘においては格好の的となつた。

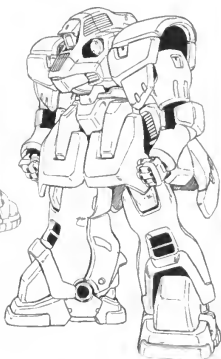
特にガンダム相手にはOZのスペシャルズと呼ばれるスペシャルモビルスーツ隊や、宇宙用モビルスーツ「トーラス」のパイロット教官をしていたルクレイア・ノインをもつてしても有効なダメージを与えることはできなかった。

主な装備はチェーンライフルと砲撃用ミサイルポッドであり、航空戦力という点からもスクランブル機体として使われ、対空・対人・対拠点制圧の任務に多く用いられた。

トラバゴス

02

「リーオー」を基に支援用として開発されたOZの機体。全高13・8m。重量7・7t。搭乗者はOZと地球圏統一連合軍の一般兵。



ホバー形態

■ただの移動砲台ではない モビルスーツ

コロニー国家群と対立していた地球圏統一連合は、正義と平和の名のもとに圧倒的な軍事力ともいえる「モビルスーツ」をもってコロニー内の都市制圧を行った。

連合に反目する一部のコロニー居住者たちは、流星に偽装した新兵器を地球に送りこむ作戦（オペレーション・メテオ）に出る。

ドーバー基地を襲う「ガンダムヘビーアームズ」。突然の奇襲に、



ほかのモビルスーツよりも全高が頭ひとつ低いトラゴス。ホバー付きトーチカといった形態である。

「リーオー」と「トラゴス」は緊急発進した。だが、ガンダムヘビーアームスのビームガトリングガンと、胸部二連装ガトリング砲による連続攻撃のまえには敗北するしかなかった。

連合軍によるコロニー制圧で活躍したトラゴスの名は、山羊座に由来しており、「エアリーズ」と並ぶOZの支援型モビルスーツで、こちらは主に長距離砲撃を担当する。状況に応じて二足歩行形態（人型）と、両肩にキャノン砲、両脚部にホバー

ユニットを装備したホバー形態が運用されていた。

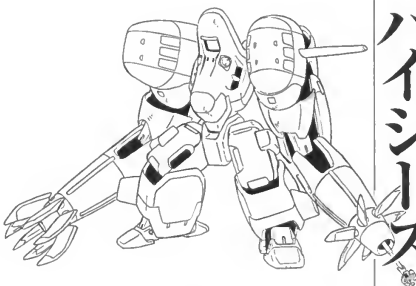
反動の大きいキャノン砲も、ホバーユニットを付けることによって、姿勢を安定させて発砲することが可能となる。ホバーの能力も高く、それを活かして砂漠でも活躍するなど、出撃回数はホバー形態のほうが多い。

運用としてはリーオーの支援だけでなく、ビームライフルを携行した人型形態のトラゴスと小隊編成をすることもあった。ただ、近接兵器はもたないため、これは都市制圧時および、拠点防衛時の編成だと考えられる。

深海での作業も可能な水中用モビルスーツ

0Z-09MMS

パイシーズ



水中巡航モード

0Z

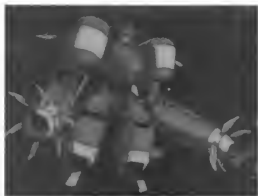
0Zの水中用機。全高16・0m。重量7・4t。主な搭乗者はルクレッティア・ノイン、サリイ・ボオ、0Z一般兵。

■ウイングガンダム

回収作戦で活躍

大気圏戦闘において「ウイングガンダム」を行動不能にし海に沈めた0Zのゼクス・マークスは、トレイズ・クシュリナーダの命により海中探査の特別チームと合流。潜水母艦に乗りウイングガンダムの回収を試みる。

金属反応を感知した潜水母艦は、地球圏統一連合の海軍と協力しつつ、水中用モビルスーツ「パイシーズ」と「キャンサー」を発進さ



水中作業に適した形態に変形したバイシイズ。潜水夫を思わせる姿をしている。

せた。

だが、ウイングガンダムを発見したものの、「ガンダムデスサイズ」により撃沈されてしまう。

魚座に由来する名のバイシイズだが、人型に近い外見をもっている。腕となつているスクリュー部先端にマニピュレーターを内臓しており、深海での作業も可能である。高速移動時にはOZ潜水母艦に似た形の巡航形態へと変形する。

キャンサーと同時に開発が進められた機体であり、キャンサーよりも水中能力に優れているが、航行速度とパワーにおいてはキャンサーに分があった。

水中用のため主兵装はすべて内蔵で、バイシイズは魚雷12門と機雷を装備している。対モビルスーツ戦や対艦戦で威力を発揮したほか、水中作業用としても運用されていた。

特にサリイ・ポオによる「ウイングガンダム」回収作戦では、OZのキャンサー部隊を奇襲で撃沈。その後、潜水母艦に吸着機雷をしかけるなど、バイシイズの性能が十二分に発揮された戦いだった。

水中での格闘を得意とするカニ型モビルスーツ

02-08MMS

キヤンサー

02

カニの型を模した02の水中用モビルスーツ。全高16・9m。重量8・2t。主な搭乗者はアレックス、02や地球圏統一連合軍一般兵。



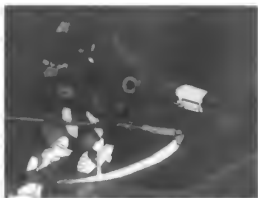
水中巡航時

■サブマリンとしても活躍

海溝に沈む「ウイングガンダム」を搜索する地球圏統一連合の海軍部隊は、未知の敵と遭遇。搜索に潜っていた水中用モビルスーツは次々と撃破されていった。

02のゼクス・マークス率いる潜水母艦から発進した「キヤンサー」と「パイシーズ」は、ウイングガンダムを発見。回収作業に入る。

そこに黒いガンダムが現れ、バ



水中作業機に武装を付けただけの簡易開発機だが、OZ海軍の主力機として活躍した。

イシーズを撃破する。キャンサーはその黒い機体「ガンダムデスサイズ」につかみかかり、その頭部に魚雷を撃ちこむのだった。

カニのような見た目のまま、蟹座にちなんだ名をもつキャンサーは、水中作業用機器を改修するかたちで開発された機体といわれている。

開発期間も短かったようで、OZのほか連合軍にも多数配備された。機体色はOZが赤、連合軍が暗緑色となっている。

キャンサーは脚部をもたないことで、水中での優れた機動性を獲得した。航行速度とパワーにおいてはバイシーズをしのぐ能力をもち、OZのアレックスが駆るキャンサーが、「エアリーズ」と2機で敵前線基地を簡単に攻略したこともある。

主な装備はカニのハサミ部分を開いて発射する魚雷4門だけだが、これは対地ミサイルに換装することができ、サブマリンとしての活躍もこなす機体であった。

しかし、水中ですらビーム兵器を使うことができないガンダムデスサイズの敵ではなかった。

リーオーを上回る性能を有する量産型可変機

OZ-12SMS

トールラス

OZ

OZの製造した宇宙用可変モビルスーツ。全高16・8m。重量7・9t。主な搭乗者はルクレティア・ノイン、ヒルデ・シュバイカー。

■有人機と無人機の 両方が運用された

OZ宇宙軍は「ガンダムデスサイズ」を搭載したHLLV（打ち上げ用ロケット）を捕捉した。

だが外壁に触れた「リーオー」は、その瞬間HLLVの内側から斬り裂かれた。

指揮官機は、モビルドールの「トールラス」に攻撃命令を下した。4機のトールラスのすばやい動きに、さしものガンダムデスサイズも翻弄されるのだった。



飛行形態



ヒルデ・シュバイカーが駆るホワイトファング仕様のトールス。機体色は赤銅色となっている。

宇宙用のリーオーに代わるOZの新たな主力機として開発されたトールスの名は、牡牛座に由来する。

主兵装はビームライフル、ビームカノン、レーザーガン。特にビームカノンの一撃はガンダムデスサイズを小破させるほどであった。

飛行形態への変形機構をもつトールスは、バックパックを換装しなくても地球、宇宙の両環境で運用可能な機体で、攻撃、防御、機動性などすべての面でリーオーを上回っていた。

また、トールスの有人機に搭載されたコンピュータの自己学習機能を基にモビルドールシステムが開発されたため、量産機のモビルドールシステム搭載機種第1号として選ばれた。

トールスはOZやコロニー革命組織ホワイトファングを問わず多数の無人機が実戦配備されたが、有人の指揮官機のコントロールが必要だった。

このほか、サンクキングダムでは機体色が純白の有人機が運用されており、こちらの機体にはビームサーベルが搭載されていた。

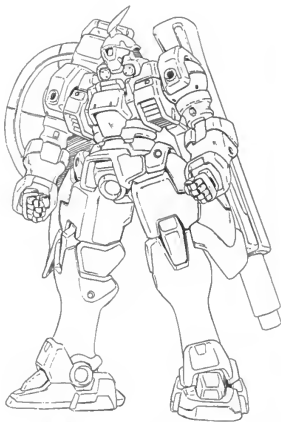
最強の攻撃力を求めてつくられた青い射手

02-13MSX1

ヴァイエイト

OZ

ガンダムをつくった科学者5人が、「メリクリウス」と同時に製造。全高16・3m。重量7・3t。主な搭乗者はトロワ・バートン。



■ガンダムを超える攻撃力

接近する「トールギス」迎撃のため、トロワ・バートンはロールアウトしたばかりの「ヴァイエイト」で出撃し、大出力のビームを放った。

そして、囲むように展開していた自軍モビルドールの「トールラス」群を呑みこんでいった。

OZに潜入していたトロワは緻密な計算のもと、OZの主戦力であるモビルドールを、トールギス



メリクリウスと対の運用が前提のため、OZが名づけたなら「ジェミニ」(双子座)となったかも。

と戦いつつ確実に撃破していたのだ。

防御型の「メリクリウス」と同時開発されたヴァイエイトは、攻めを極める目的でつくられた。武装は、機動力をぎりぎり守るサイズの大型ビームキャノンひとつで、背なかの巨大なビームジェネレーターからエネルギーが供給される。

エネルギー切れを気にすることなく使用できるこの強力なビームキャノンは、ガンダニウム合金を融解するほどの威力がある。対部隊戦用の連続発射や、対要塞戦を考慮した広角発射も可能だ。

ヴァイエイトはメリクリウスとともに「ウイングガンダムゼロ」との戦いで大破したものの、コロニー革命組織ホワイトファングの手でモビルドールとして再生。

砲撃戦に長けたトロワの操縦データをもつヴァイエイトと、ヒイロ・ユイのデータをもつメリクリウスとの連携攻撃は、「ガンダムデスサイズヘル」を終始守勢に回らせた。しかし手練のパイロット、デユオ・マックスウェルに一瞬の隙を突かれ、ツインビームサイズにより撃墜された。

究極の防衛を目指してつくられた赤い守護神

02-13MSX2

メリクリウス

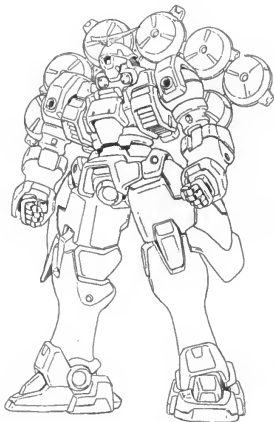
02

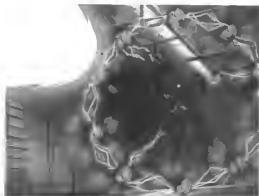
ガンダムをつくった科学者5人が、「ヴァイエイト」と同時に製造。全高16・3m。重量7・3t。主な搭乗者はヒイロ・ユイ。

■防衛を突き詰めた新型機

地球から上がった「トールギス」撃墜に、「ヴァイエイト」と「メリクリウス」、モビルドールの「トール」部隊が出撃する。

危なげなくトールギスを撃破するトールギスに、2機は息の合った連携攻撃で襲いかかり、高性能機同士の1対2の戦闘がはじまった。メリクリウスは防衛主体機で、強力なバリアを発する10基のプラネイトディフェンサーをもち、同





強力なヴァイエイトのビームをも弾く、メリクリウスのプラネイトディフェンサー。

時につくられた攻撃主体機、ヴァイエイトの護衛を務める。

武装は小型のビームガンと、ビームサーベルを内蔵したクラッシュシールド。後者はビームシールドジェネレーターを内蔵した強力な盾である。

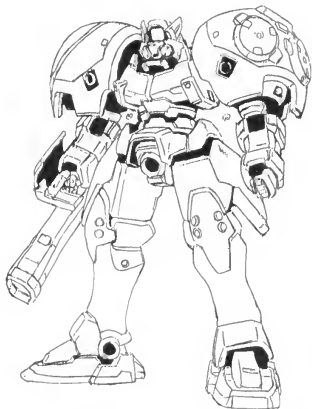
装甲に頼らず高い防御力を可能にした本機は、結果として接近戦にも秀でた機体となった。

この後、メリクリウスは「ウイングガンダムゼロ」の暴走を止めるべく自爆、大破したが、その残骸はコロニー革命組織ホワイトフアングが入手していた。

新たにヒロ・ユイのデータを基にモビルドールとして修復された本機は、同じくモビルドールとされたヴァイエイトとともに「ガンダムデスサイズヘル」と戦うこととなる。

しかし、優秀なパイロットのデータをベースにしているといっても、あまたの修羅場をくぐり抜けてきたガンダムデスサイズヘルの搭乗者であるデュオ・マックスウェルの敵ではなく、ツインビームサイズの露と消えたのであった。

ビルゴ



OZ

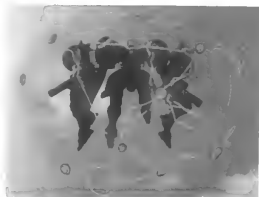
OZのツバロフが、「ヴァイエイト」と「メリクリウス」を参考に開発した機体で、モビルドール。全高16・3m。重量7・3t。

■支配階級の財団を 象徴する機体

ロームフェラ財団はオペレーシ
ョンノヴァを発動。月面基地で完
成したモビルドールの「ビルゴ」
を、反抗の可能性がある地域に降
下させた。

迎撃に出た「エアリーズ」部隊
だったが、その攻撃はプラネイト
ディフェンサーに阻まれ、強力な
ビームのまえに散っていった。

乙女座の名をもつビルゴは、そ
の名に反していかがい姿をしてい



プラネイトディフェンサーを4基しかもたないビルゴは、3機集まることで死角をなくす。

る。「ヴァイエイト」と「メリクリウス」の特性を一機にまとめ、右肩にビームジェネレーター、左肩にプラネイトディフェンサーを装備した結果、大柄な姿になった。モビルドールを前提として開発された機体で、コクピットはなく、プログラムに従って行動する。

また、装甲は量産機でありながらガンタニウム合金でつくられ、総合的な性能において「リーオー」をはるかにしのぐ機体となった。

武装はヴァイエイトと同様のビームキャノンだが、ビームジェネレーターを肩部にまとまるコンパクトなサイズにしたため威力は落ちる。

また、陣形を組む程度の行動は可能なものの、より高度な連携や戦術行動をとることはモビルドールの「トールラス」同様、不可能なままであった。

支配階級と自負するロームフェラ財団が、自らの手を汚さずに戦う道具としてつくりあげたモビルドールは、財団自体を象徴する機体であった。

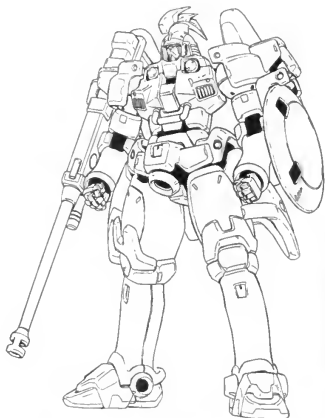
だが、血の通わない人形は、血を流すことをいわない兵士たちの手で倒されることとなる。

地球の命運を背負う男が駆る脅威の機体

02-00MS2

トールギスⅡ

世界最強軍



■最前線に立つ指揮官機

コロニー独立をかかげる革命組織ホワイトファンクが、超大型戦艦「リーブラ」でせまる。世界国家元首のトレーズ・クシュリナーダは、地球軍を率いてその眼前に立ちはだかった。

トレーズは、復活したレディ・アンを後方指揮官に据え、自身は前線指揮官として「トールギスⅡ」で出撃。

敵司令官ミリアルド・ピースク

「トールギス」の予備パーツから組みあげられたトレーズ専用機。全高17・4m。重量8・8t。主な搭乗者はトレーズ・クシュリナーダ。



トレーズの趣味なのか、顔がガンダム風になり上体に青色ペイントが加えられているトールギスII。

ラフト（ゼクス・マーキスの本名）と対峙した。

トールギスIIはトレーズの命で「トールギス」の予備パーツから組み上げられたものである。その性能および兵装はトールギスとまったく変わらない。

ただ頭部ユニットのみが、ガンダムに近いものとなっている。

当然、パイロットの生命を考慮しない過酷さもトールギスと同様だが、トレーズはあたかも自分の手足のごとくトールギスIIを乗りこなし、ホワイトファングの戦力を削いでいくのだった。

そしてトールギスIIは、張五飛の駆る「アルトロングガンダム」と合間見える。

その戦いは激しい肉弾戦となり、トールギスIIのビームサーベルとアルトロングガンダムのツインビームトライデントがぶつかり合い、宇宙に火花を散らせた。

だが最後は、一氣に間合いをつめたトールギスIIの必殺の一刀がかわされ、その直後アルトロングガンダムの三叉の光の刃がトールギスIIの胴体を刺し貫くのであった。

騎士道精神をまとった決闘専用ガンダム

02-13MS

ガンダムエピオン

ホワイト
ファンク

トレイズ・クシュリナーダが開発した決闘専用の可変機。全高17・4m、重量8・5t。主な搭乗者はヒイロ・ユイ、ゼクス・マークス。

■すべてを斬り裂く 圧倒的な光の剣

OZの内部抗争にサンクキングダムが巻きこまれるのを恐れたヒイロ・ユイは、単身で戦場となるルクセンブルク基地に身を投じた。だがさすがの「ウイングガンダム」も、プラネイトディフェンサーとビームキャノンを装備したモビルドールの「ビルゴ」の大部隊の前には劣勢を強いられる。

ヒイロが自爆を覚悟したそのとき、OZの前総帥トレイズ・クシ



パート形態





飛翔してビームサーベルを振るい、すれ違いざまに3機のビルゴを斬断したガンダムエビオン。

ユリナーダより通信が入り、地下の秘密基地でヒイロは「ガンダムエビオン」を託される。

ガンダムエビオンの戦闘力はビルゴをも^{ざいしゅういっしょく}鎧袖一触にするものだった。ジェネレーターに直結した大出力のビームサーベルと、シールド内に装備されたヒートロッドは、プラネイトディフェンサーをもたやすく斬り裂き打ちのめしてビルゴを破壊した。

だが、この直後、エピオンシステムにとりこまれたヒイロは暴走し、ガンダムエピオンは相争うビルゴや「リーオー」だけでなく、基地そのものを破壊してしまう。

その後もヒイロはガンダムエピオンに乗り続けるが、ゼクス・マークスの「ウイングガンダムゼロ」と対決した際にお互いのシステムが干渉、停止したことを機に乗機を交換。

以後、ガンダムエピオンはゼクスの愛機となり、ヒイロのウイングガンダムゼロと一進一退の攻防を繰り返すのであった。

■一切の妥協を排した決闘用ガンダム

ガンダムエビオンはトレースが騎士道精神を重視して製造させた決闘用ガンダムで、いかなる射撃装備ももたない（のちに、コロニー革命組織ホワイトファンクでバルカンが内装されたらしい）。その代わりにすさまじいまでの機動力と運動性を誇る。

戦場を高速で縦横無尽に駆けめぐり、敵機をビームサーベルもしくはヒートロッドの間合いに入れた瞬間に大破させるという戦法がセオリーとなる。

ジェネレーターに直結したビームサーベルは、宇宙要塞「バルジ」を両断し、赤熱化したヒートロッドは、ガンダニウム合金の装甲で覆われたモビルドールすら叩き割る。その戦闘力は決闘用でありながら、大量破壊兵器の域に達しているといっても過言ではない。

さらにこの機体の恐ろしいのはゼロシステムと同種のエビオンシステムという、非常に強い強制力をもつ戦闘用プログラムが搭載されていることだろう。実際、両方に乗ったヒイロは、これを同じと断定している。

このほか、ガンダムエビオンは方式こそ違うものの機体を巡航形態に変形させる機能ももっている。このように、ウィングガンダムゼロとの類似点は意外なまでに多い。

その後、ガンダムエビオンの主となったゼクスは、サンクキングダムの王子ミリアルド・ピースクラフトとして、ホワイトファングの指導者となり、組織と敵対するガンダムチームを牽制するべくたびたび出撃した。

そうしたパイロットとしての活躍もさることながら、モビルドールシステムにエビオンシステムを組みこみ、個別に動く人形でしかなかったモビルドールに組織的な動きを与えた功績も見逃すことはできない。

その後ホワイトファングは、地球圏統一連合の後身たる世界国家軍との最終決戦に勝利するのだが、ゼクスはヒイロとの決着にこだわった。

ゼクスはウイングガンダムゼロのツインバスターライフルをヒートロッドで奪うなど、終始優位に事を運んだが結局は敗北した。

最後は地球に落下し、大災害を引き起こそうとする超大型戦艦「リーブラ」の一部を破壊すべく、動力炉をビームサーベルで斬りつけた。

そしてゼクスはガンダムエビオンとともに、炎の中に消えて行くのであった。



お互いの信念と勝利をかけて、最後の一刀を振るうガンダムエビオンとウイングガンダムゼロ。

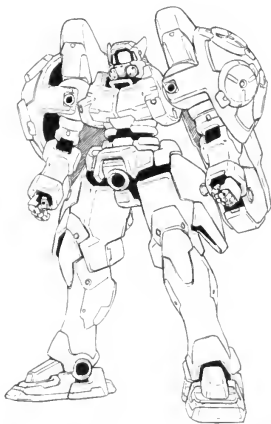
集中制御によって戦術的行動がとれるようになった人形兵士

WF-02MD(0Z-03MD)

ビルゴII

ホワイト
ファンク

0Zが開発していた新型モビルドールを、コロニー革命組織ホワイトファンクが接収した機体。
全高16・3m。重量7・3t。

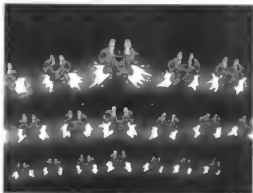


■美少女に操られる 戦争の人形

コロニー革命組織ホワイトファンクは、宇宙から0Zを排除するために、その拠点である宇宙要塞「バルジ」に攻撃を仕掛ける。

接収した0Z月面工場で製造されていたモビルドールの「ビルゴII」を主戦力として、ホワイトファンクはバルジの防衛ラインを突破するのだった。

砲撃戦に特化した「ビルゴ」を再設計し、武装、防御力を強化し



エビオンシステムを用いた集中制御によって操られ、一糸乱れぬ作戦行動をとるビルゴII部隊。

たのがビルゴIIである。

武装はバックパックに接続することでエネルギー供給されるメガビーム砲のほか、ビームライフルとビームサーベルをもつ。

防御面ではプラネイトディフェンサーの数を4基から8基に倍増させることで、より隙のない防衛を可能にした。

ビルゴとの大きな違いは、それだけではない。ホワイトファンゲはモビルドールを遠隔操作するだけではなく、超大型戦艦「リーブラ」の集中制御ルームで、エビオンシステムを用いて制御する方式を導入。

これを操る元OZの美少女、ドロシー・カタロニアの高い戦術指揮能力もあり、ビルゴII部隊は組織的に運用され、戦術的作戦行動をとることが可能となったのである。

これに対抗するため、カトル・ラバーバ・ウィナは「ガンダムサンドロック改」に搭載されたゼロシステムを稼働させ、ガンダムたちはじめてチームとしての戦いをするのだった。

「トールギス」からはじまったモビルスーツの歴史

本来、宇宙空間での作業機械であったモビルスーツを兵器に転用することを考えたのはロームフェラ財団内の軍事秘密結社OZであり、そのプロジェクトの中心となったのが、ドクターJを筆頭とする5人の科学者たちであった。

そこで5人は軍用モビルスーツの始祖ともいえるべきモビルスーツ「トールギス」を完成させる。トールギスは機動力、運動性、装甲とどれをとっても優れた性能を有していた。だが、それ故に一般兵では扱いきれないという致命的な欠点をもっていた。

そこでOZはあくまでもこのトールギスをひな型として扱い、デチューン（性能を下げる処理）する形で最初の量産型モビルスーツ「リーオー」を完成させる。

このリーオーを基にOZは、空戦用の「エアリーズ」や砲撃支援用で簡易可変機能をもつ「トラゴス」、水中戦用の「バイシーズ」「キャンサー」、宇宙戦用の「トールラス」などを開発していった。

そしてその後、無人戦闘システムが開発され、これをトールラスに組みこむことで新たな機動兵器、モビルドールが完成することとなる。

その一方、OZ宇宙軍に投降したドクターJらは、月面工場でガンダムを超える機体の製造に着手。これが強力なビームキャノンを備える「ヴァイエイト」と、プラネイトディフェンサーが展開可能な「メリクリウス」であった。

このふたつの流れは短期間で合流、結実してモビルドールの「ビルゴ」や、そのマインナーチェンジ版である「ビルゴII」となる。

ここで時を戻すと、トルギスを完成させた5人は、次に「ウイングガンダムゼロ」の製作にとりかかったものの、設計段階でOZから離れている。その後、彼らはそれぞれが独自に「ガンダム」を完成させるが、そのひな型となったのはウイングガンダムゼロであった。

「ウイングガンダム」はウイングガンダムゼロをそのままデチューンしたものであり、「ガンダムデスサイズ」はガンダニューム合金のもつステルス性に着目し、それを活かすためにハイパージャマーという特殊な装備を施している。

また、「ガンダムヘビーアームズ」はウイングガンダムゼロのもつ大火力をツインバスターライフルに頼らず実装することを意図した。「ガンダムサンドロック」は重装甲による防御力を重視し、「シエンロンガンダム」は肉弾戦に特化した機体であった。

その後、ウイングガンダムを除く4機は強化改造が実施され、完成したウイングガンダムゼロとともに地球圏に変革をもたらす力となるのである。

第3章

新機動戦記

ガンダム
W

ウイング

Endless Waltz

先年の戦争でその虚しさを知った人々は、武力を放棄した完全平和への道を選択した。

だが、野望を抱くバートン財団は故トレイズ・クシュリナーダの遺児を盟主とするマリーメイア軍を結成、武装蜂起する。

彼らは独自に新型モビルスーツ「サーベント」を開発していた。これは、あらゆる軍備を廃棄し、軍隊が解体された現世界において圧倒的な力となるものであった。

これに対抗する諜報機関ブリベンダーの戦力はとぼしく、月基地の巡洋艦のほかは改造輸送艇程度で、モビルスーツは「トールス」「トールギスⅢ」の2機のみだった。

だが、いったんは太陽に向けて放棄された「ガンダム」を回収した少年たちが参戦し、敵を殺さない戦いをはじめたのだった。

■ 地球圏統一国家

地球圏統一連合が発展的解体したあとを受けた、完全平和主義をかかげる新たな政体。この政府のもとで世界はすべての武装を放棄し、軍隊を解体した。

■ ブリベンダー

世界統一国家の秘密諜報機関で、その意味は「先んじて処理する、～に先手を打つ者」である。その名のとおり、完全平和をおびやかす存在や案件を秘密裏に処理する組織であり、それゆえに完全平和主義社会にあって唯一、武装を認められていた。保有武力は少なく、「トールス」「トールギスⅢ」、月基地の巡洋艦のほかは改造輸送艇などで、人員もさほど多くはない。

■ マリーメイア・クシュリナーダ

旧OZ総統にして世界国家元首でもあったトレイズ・クシュリナーダの遺児。その出自ゆえに、反乱軍の盟主として祭りあげられた。

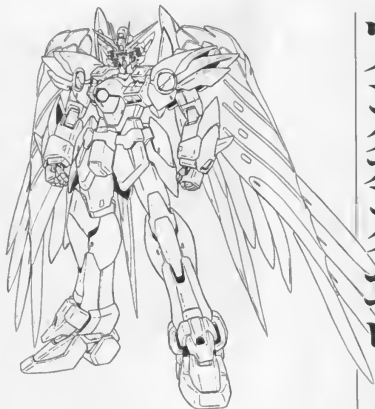
■ バートン財団

デキム・バートンを支配者とする集団で、かつてはコロニー独立運動の過激派に資金援助して、オペレーション・メテオを實行させようとした。今回は独自にマリーメイア軍を組織し、その武力で地球圏を直接支配しようと企む。新型モビルスーツ「サーベント」部隊以外にも「リーオー」部隊や陽動作戦にモビルドールの「トールス」を多数運用するなど、その規模は意外なほど大きかった。

混沌の大地に降り立ち、戦いの終わりを告げる大天使

XXXG-00W0

ウイングガンダムゼロ



5人の科学者が設計し、カトル・ラバーバ・ウイナーが完成させた機体。全高16・7m。重量8・0t。主な搭乗者はヒイロ・ユイ。

■太陽への旅路からの帰還

マリーメシア軍の武装蜂起に対抗すべく、ヒイロ・ユイは一度は廃棄を決め廃棄資源衛星に乗せた「ウイングガンダムゼロ」とのランデブーを果たし、大統領府のある地球のブリュッセルへと急ぐ。

だが、そのウイングガンダムゼロの前に立ちはだかったのは、マリーメシア軍に身を投じた張五飛の乗る「ガンダムナタク」であった。



胸部のゼロシステムインジケーターが輝いており、ゼロシステムが作動していることがわかる。

かつて地球もコロニーも敵にまわし、ともに戦った仲間との戦闘は熾烈を極めた。地球圏最強の機動兵器たるガンダム同士の本気の戦いであれば、それは当然のことである。衛星軌道上から大気圏突入の最中、そして地上へと目まぐるしく舞台を変えつつ、ウイングガンダムゼロはガンダムナタクと戦い続けた。

ビームサーベルとツインビームトラIDENTで鋸迫り合い、襲ってくるドラゴンハングはマシンキャノンで迎撃する。

一合斬り結んでは離れ、離れてはまた斬り結ぶ。2機のガンダムによる互角の戦いはいつ果てるともなく続くと思われたが、その終わりは唐突にやってきた。戦うことのむなしさから、ヒイロが突然戦闘を放棄し、機体もろとも海中へと没したのである。そのとき五飛の心中に去来した想いはどのようなものであろうか。ただ、五飛はウイングガンダムゼロが消えた海面を、無言で見つめるしかなかった。

■機械仕掛けの純白の翼

ウイングガンダムゼロでもっとも特徴的な装備は、

背部に設置された二対のウイングユニットである。むろん、これらの翼も本体同様にガンダニウム合金でつくられている。

巨大なメインウイングは、無重力下での運動性を向上させると同時に機体全面に展開することで堅牢な防御装備にもなる。

そして地上では揚力を発生させ飛ぶことができる、文字通り「翼」としての役割も果たしている。

このときは翼面構造を自由に変化させることで、結果的に大気圏内における運動性の向上に一役買うことにもなる。

内側のサブウイングには大出力のバーニアが内蔵されており、たとえメインウイングが失われたとしても、機体の機動力と大気圏内における飛行能力が失われることはない。

主兵装としては、ツインバスターライフルがあげられる。コロニーでさえも一撃で破壊する、その圧倒的なまでの破壊力は健在である。

しかしながら、ガンダムナタクが相手では白兵戦にならざるを得ず、必然的に戦闘はビームサーベルとツインビームトライデントによる斬り合いとなった。

このほか、肩部にはマシンキャノンが搭載されていた。

海中に没したはずのウイングガンダムゼロは、戦場と化したブリュッセル上空に

突如現れた。そして、大統領府を呑みこんだ地下核シェルターの隔壁の一点に、ツインバスターライフルの照準を合わせる。

しかし、コロニーをも破碎するツインバスターライフルの威力をもってしても、シェルター・シールドを一撃で突破することは不可能だった。

だが、その爆風と衝撃波で大統領府の敷地内に展開していた「サーペント」部隊は行動不能に陥る。

ヒイロの正確無比な射撃はコンマ2桁まで狂いがなく、続けて放たれた第2射でシェルター・シールドの強度は半減した。

そしてヒイロは緊急展開したサーペント部隊の攻撃も意に介さず、ツインバスターライフルを放った。運命の第3射は、ついに装甲外殻とそのシェルター・シールドを貫き、地下司令部を沈黙させることに成功する。

だが、ここまでの戦闘で傷ついていたウイングガンダムゼロは、サーペントの一斉射撃に耐え切れず、空中分解し爆発するのであった。



地下シェルターに向けてツインバスターライフルを構える、満身創痍のウイングガンダムゼロ。

死神の鎌を振るう冥府よりの使者

XXXG-0102

ガンダムデスサイズヘル



破壊された「ガンダムデスサイズ」を極秘裏に修理、強化した機体。全高16・3m。重量7・4t。主な搭乗者はデューオ・マックスウェル。

■月夜に舞う黒き勇者

ブリュッセル郊外の荒廃した無人の街で、降下したマリーメリア軍の「サーベント」部隊を、ゼクス・マーキスの「トールギスⅢ」とルクレツィア・ノインの「トールラス」が迎え撃っていた。

だが、いかにふたりが優れたパイロットでも多勢に無勢は否めず、死を覚悟するところまで追いつめられる。

そこに意外な援軍が現れる。軌



傷つきながらも、敵兵士の命を奪わぬ戦いを止めようとはしないガンダムデスサイズヘル。

道上の廃棄資源衛星から直接、大気圏内に突入した3機のガンダムであった。その内の1機「ガンダムデスサイズヘル」は満月を背に戦場に降り立つと、アクティブクロックを開いて機体を軽々とひるがえし、一気に3機のサーベントの頭部を破壊、行動不能に陥らせる。

ガンダムデスサイズヘルはコウモリの羽を模したアクティブクロックを装備し、すばやい動きからビームサイズで敵を斬り裂くという戦法を得意とする。

また、高性能ステルス機能をもつハイパージャマーを装備しており、マリーメア軍が3機のガンダムの接近に気づかなかったのは、このためである。今回は、敵パイロットを殺さないという非常に難しい戦術を選択したために苦戦を強いられたが、「ウイングガンダムゼロ」の活躍により、はからずも生き延びることとなる。

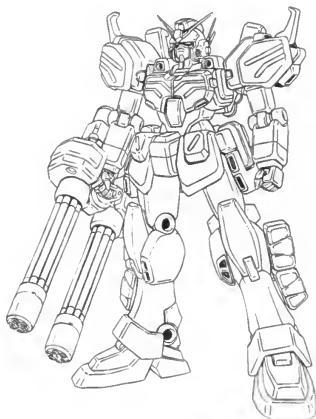
だが戦闘終了後、パイロットのデュオ・マックスウェルはガンダムデスサイズヘルを「ガンダムサンドロック改」「ガンダムヘビーアームズ改」とともに自爆させる道を選んだ。

すべてを撃ち尽くすダブルガトリングガンの猛威

XXXG-01H2

ガンダムヘビーアームズ改

「ガンダムヘビーアームズ」を宇宙用に改造し、武装も強化した機体。全高16・7m。重量7・7t。主な搭乗者はトロワ・バートン。



■ピエロの半面が トレードマーク

ブリュッセル郊外でマリメイア軍の「サーベント」部隊に孤軍奮闘するゼクス・マークスとルクレツィア・ノイン。そこに援軍として廃棄資源衛星から出撃した3機のガンダムの内の1機「ガンダムヘビーアームズ改」。

ガンダムヘビーアームズ改は、ダブルガトリングガンで敵機の急所を精確に狙い撃ち、パイロットを殺さずに銃撃で沈黙させるとい



敵サーベントに向けて、ダブルガトリングガンを斉射するガンダムヘビーアームズ改。

う神業を見せるのであった。

機体色はモスグリーンに白と、落ちついた色目であるが、戦い方は以前と変わらず、搭載した重火器を無駄なく撃ちつくすというものである。両腕に装備したダブルガトリングガンは実体弾式で、ネオ・チタニウム合金製のサーベントの装甲にも大穴をあける威力をもつ。今回の戦闘ではミサイルはほとんど使わなかったが、これはその破壊力を勘案してのことだろう。ミサイルでは敵パイロットを殺傷してしまうおそれがあったからである。

ガンダムヘビーアームズ改が被るピエロの半面を用意しているあたりに、トロワ・バートンの余裕が感じられる。また、空中大回転の芸も健在であった。それでも弾丸を撃ちつくし、サーベント部隊に周囲を十重二十重に包囲されては手も足も出なかったが、ヒイロ・ユイの「ウイングガンダムゼロ」が間に合い、ぎりぎりのところで命を拾うことができた。

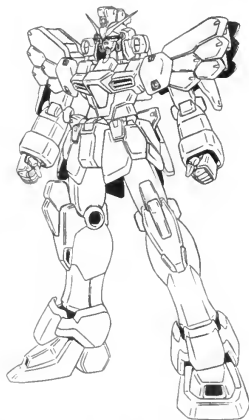
戦闘終了後、トロワは平和な時代に兵器は不要と判断し、「ガンダムデスサイズヘル」「ガンダムサンドロック改」とともに自爆させた。

より精悍に、よりスバルタンになった双剣の機体

XXXG-01SR2

ガンダムサンドロック改

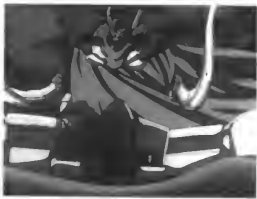
「ガンダムサンドロック」を宇宙用に改修、強化した機体 全高16・5m 重量7・9t 主な搭乗者はカトル・ラバーバ・ウィナー。



■雄々しいマント姿で登場

一度は廃棄を決め、廃棄資源衛星に乗せられた4機のガンダム。そのうちの「ウイングガンダムゼロ」は急ぎブリュッセルに向かった。

遅れて地球衛星軌道へと帰還した衛星から、「ガンダムサンドロック改」は扉をヒートショーターの二刀流で切断し、ほかの2機とともに地球へと躍り出るのであった。そして一直線にブリュッセルに急行し、上方からの一閃で一度に



マントを篇こんだガンダムサンドロック改。この装備で無事、大気圏突入を果たした。

サーペント3機の頭部を両断。「トールギスⅢ」と「トールラス」の危機を救った。主兵装は変わらずヒートショーターだが、より長大かつ厚重なものを使用している。斬れ味は凄まじく、ガンダニウム合金と同等の強度をもつといわれるサーペントのネオ・チタニウム合金の装甲を紙のごとく斬り裂く。また、シールドは装備していないが肩部に追加装甲と、マントを身につけている。

トロワ・バートンの計算によれば残存サーペントは250機。1機につき50機を倒せばよい計算だったが、そうは上手いかず、じりじりと劣勢に追いこまれる5機。

それでもガンダムサンドロック改は相当数の敵機を行動不能にしたが、最後にはヒートショーターも折れ、ぼろぼろのあり様となった。

マリーメイア軍の武装蜂起が終結したあと、ほかのガンダム2機とともに、カトル・ラバーバ・ウィナーはガンダムサンドロック改を自爆させた。

本来、ガンダムを太陽に捨てるといふ発案はカトルから出たものだっただけに、感慨もひとしおだったろう。

強化され英雄神の名を得た龍のガンダム

XXXG-01S2

ガンダムナタク

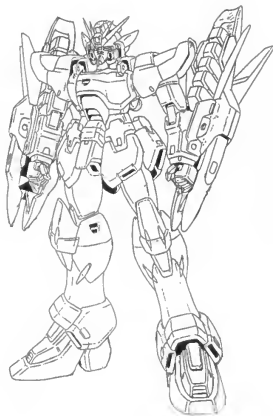
マリーメリア軍

「シエンロンガンダム」を強化した機体。全高16・4m。重量7・5t。主な搭乗者は張五飛（チャン・ウーフェイ）。

■人々の側によって立つ英雄

今の世を疑問視する張五飛は、愛機「ガンダムナタク」と一緒にマリーメリア軍に身を寄せ、本拠地のひとつX18999コロニーにて「リーオー」に乗ったヒロ・ユイと戦った。

ドラゴンハンクやツインビームトライデントでリーオーを追いつめるガンダムナタクであったが、一瞬の隙をつかれヒロに逃げられてしまう。





力をもたぬ人々を護るべく、マリーメシア軍のサーペントににらみを利かすガンダムナタク。

その後、武装蜂起したマリーメシア軍を追うヒイロの「ウイングガンダムゼロ」に戦いを挑んだガンダムナタクは、もてる力を發揮して立ち向かう。

その主兵装は高速で蛇行し、変幻自在の動きを見せて敵機体を噛み砕くドラゴンハング。そして長柄の両端から、三叉のビーム刃を発生させるツインビームトライデント。どちらも直撃すれば、ウイングガンダムゼロでさえも無傷ではいられない威力をもつ。

だが、ヒイロは戦いを放棄して海中に没した。果然とする五飛の耳に入る民衆の声。それはマリーメシア軍の力による支配を拒み、平和な社会を守ろうと立ち上がった人々のものであった。

それを聞いたとき、ガンダムナタクは力なき人々を守る英雄として、人々に害をなそうとした「サーペント」部隊と対峙する。その迫力に思わずたじろぐサーペント。

すべてが終わったあと、ほかのガンダム3機と時を同じくして、五飛は己の弱さとの決別も含めて中国奥地でガンダムナタクを自爆させたのであった。

新たな力を得た最古のモビルスーツ

02-00MS2B

トールギスⅢ

プリベンダー

プリベンダーが「トールギス」を回収、強化した機体。全高17・4m。重量8・2t。主な搭乗者は火消しのウインド（セクス・マークス）。

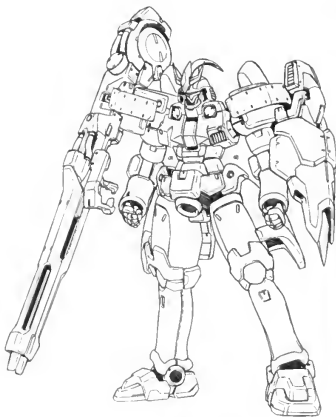
■強化改造された

三番目のトールギス

資源衛星MO・Ⅲから出撃した降下船団を、地上から迎え撃った「トールギスⅢ」は、瞬時に3隻をビームサーベルで斬り裂き、破壊した。

そして右肩のメガキャノンを構えると、MO・Ⅲ管制室のデキム・バートンに向かい、降伏勧告をするのだった。

このトールギスⅢはかつての「トールギス」の予備パーツを基に





ルクレツィア・ノインの駆る「トールス」を、サーペントの攻撃からかばうように降り立つ。

強化改造された機体であり、右肩のメガキャノンは最大出力で発射すれば、MO・Ⅲを一発で木端微塵にすることも可能である。

また、左肩部のシールドに内蔵されたヒートロッドの一閃は敵機をからめ捕り、大破させることもたやすい。

これらの重武装と機動力に加え、エビオンシステムの試作品ともいうべきOSをも搭載しており、トールギスⅢはガンダムに匹敵する圧倒的な戦闘力をもつにいった。

だが、ゼクス・マークスはあえてメガキャノンを機体から取り外した。そして地上に降下、展開した「サーペント」の大部隊に対して、そのパイロットを殺さぬ過酷な戦いを自らに課した。

それこそが亡き祖国、サンクキングダム完全平和主義を受け継いだ地球圏統一国家の理念にふさわしいと信じて。

ゼクスのその思いは届き、人々はマリーメア軍の前に立ちはだかり、武器を持たぬままに抵抗の声をあげたのであった。

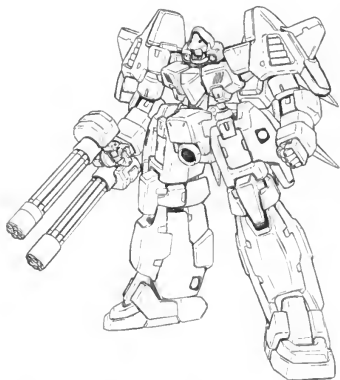
13番目の星座を名乗る叛逆の機体

MMS-01

サーペント

マリーメア軍

バートン財団が独自に開発したモビルスーツ。
全高17・2m、重量8・1t。主な搭乗者はト
ロワ・バートン、マリーメア軍一般兵。

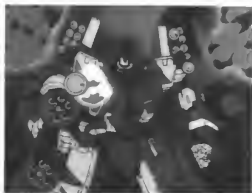


■砲撃戦主体の新型重装機

マリーメア軍が声明を発表したX189999コロニーに強行潜入したデュオ・マックスウェル。その「リーオー」を迎え撃ったのが新型の「サーペント」だった。

左腕のダブルガトリングガン突き出す構えに、デュオはパイロットがトロワ・バートンだと見抜く。

サーペントはバートン財団が開発したネオ・チタニウム製の量



8連装マイクロミサイルを一斉発射する。これでトールギスⅢとトールラスを敗北寸前まで追いつめた。

産型モビルスーツであり、OZとは直接関係ないもののネーミングは踏襲していて、サーベントの名は蛇つかい座の一部であった蛇座に由来する。

主武装は実体弾式のダブルガトリングガンに、両肩部アーマーに内蔵したマイクロミサイルランチャー。これにオブションとしてバズーカやビームキャノンがある。総じて接近戦よりも砲撃戦に主眼が置かれた機体といえるだろう。

何十機かは「トールギスⅢ」のメガキャノンで輸送機ごと撃墜されたが、大半は

降下に成功し、大統領府とその所在地であるブリュッセルを制圧した。

その後は「トールラス」、トールギスⅢや3機のガンダムとの戦いに突入する。

機体の性能やパイロットの実力からすれば、サーベント部隊に勝ち目はなかったが、ゼクス・マークスらが兵士を生かすという戦術をとったことから、数で圧倒することができた。

最終的には今回の反乱の実質的な首謀者であったデキム・バートンの死亡を受け、マリーメイア軍は敗北を宣言。サーベント部隊も武装解除された。

サーペントに終わるモビルスーツ開発の系譜

アフターコロニー暦一九五年に起きた一連の武力闘争を「最後の戦争」と呼ぶのなら、翌年のマリーメア軍による武装蜂起は「最後のモビルスーツテロ」と呼ぶのがふさわしいだろう。

なぜなら「武力は完全に放棄され、世界は戦争を否定した完全平和へと向かっている」という人々の共通認識があったからである。

今回のこのテロで、マリーメア軍が主力として採用したモビルスーツ「サーペント」は、バートン財団が独自に開発したものであった。

名前こそ、かつてのOZが好んで用いた黄道十二宮の星座からとられているが、機体そのものにはOZが最後期に開発した無人戦闘システム、モビルドールなどの先進技術は採用されていない。

また、武装などもダブルガトリングガンや内蔵式のミサイルランチャー、バズーカが主で、どれも最新技術ではなく、バートン財団が「ガンダムヘビーアームズ」を開発したドクトルSの技術を継承、発展させたもののように思われる。

唯一、専用ビームキャノンに円形の加速機が取り付けられているところに「ヴァイ

「エイト」の技術が応用されているくらいである。その一方「メリクリウス」で採用された強力な防衛システムであるプラネイトディフェンサーは装備されていない。

そういう見方をするならば、サーベントはガンダムヘビーアームズの量産型ということにもなるだろう（ガンダムヘビーアームズの建造にはバートン財団が深く関わっていた）。同時にそれは、先年の戦いで急激に発達した軍事工学の成果が完全平和の実現のために廃棄、抹消されたことを意味する。

逆に考えるなら、サーベントに最新技術が盛り込まなかったことは世界にとっても、ガンダムパイロットにとっても幸運であった。そうでなければ、より強力なモビルスーツ、もしくはモビルドールと戦うこととなり、ガンダムといえどもマリーメイア軍の武装蜂起を、実質一晩で鎮圧できたとは考えにくい。

ちなみに「ガンダムデスサイズヘル」は、アクティブクロークを装備することで防御力とステルス性能が増し、「ガンダムナタク」はドラゴンハングを増設して攻撃力の向上を図っている。また、「ガンダムヘビーアームズ改」と「ガンダムサンドロック改」はバーニアを増設され、宇宙での活動に適応したものであった。

そして「ウイングガンダムゼロ」は機体制御や大気圏内の飛行性能の向上、大気圏突入用装備としても使用できるガンダニューム製の翼を有していた。

最後に、OVAである本作の各ガンダムのデザインは、アレンジされてテレビ本編とは異なっているが、同一機であることに変わりはない。

第4章

機動新世紀

ガンダムX

地球連邦軍と宇宙革命軍が激突した第7次宇宙戦争により、地球は壊滅的な打撃を受け人口の約9割が失われた。地球連邦政府はその機能を停止し、天変地異によって宇宙に住む人々も生きることと奔走することとなる。

どちらが勝ったともいえないこの大戦から十五年後、生き延びた人類は徐々に文明と技術を取り戻しはじめていた。当時、前大戦で使用されたモビルスーツは貴重な発掘遺産となり、これを掘り起こして売却するバルチャーと呼ばれる者たちが暗躍していた。

そんななか、密かに地球連邦軍は再建の道を進み、宇宙革命軍も徐々に軍備を整えていた。新たな戦乱がはじまろうとするなか、ガロード・ランなど、戦後生まれの子供たちの希望ある未来に歩む冒険の旅がはじまる。

■ 地球連邦政府

地球上の国家間が確立した連合政府。第7次宇宙戦争では宇宙革命軍と戦ったあと、事実上機能を停止してしまうが、再建委員会のもとに再建された。

■ 宇宙革命軍

地球連邦政府に独立戦争を仕掛けた、クラウド9コロニーを中心とした宇宙国家お抱えの軍隊。宇宙に住む人々こそニュータイプだとする、思想統制・選民思想をかかげる。

■ 第7次宇宙戦争

劇中から15年まえに、旧地球連邦軍と宇宙革命軍のあいだに起きた大戦。革命軍がコロニー落としを強行した結果、地球は甚大なダメージを受けた。

■ 第8次宇宙戦争

フロスト兄弟が暗躍し、再建されたばかりの新地球連邦軍と宇宙革命軍のあいだで起きた新たな大戦。大戦終結後には、両軍間で和平交渉が進行している。

■ バルチャー

戦後の地球では貴重な発掘資源となったモビルスーツや電子部品などを売却し、生計を立てる人々のこと。バルチャーは「ハゲタカ」という意味。

■ ニュータイプ

「人類の新たな革新」、およびその力をもつ者のこと。地球連邦軍にとっては戦争の道具として、宇宙革命軍にとっては選民思想の道具として利用された。だが実際は、単に異能力をもつ者を指す。

圧倒的な攻撃力を有して辞った決戦用モビルスーツ

GX-9900

ガンダムX



第7次宇宙戦争に投入された決戦兵器。全高17・1m、重量7・5t。主な搭乗者はガロード・ラン、ジャミル・ニート。

■戦慄のサテライトキャノンが号砲

セントランジェでモビルスーツハンターをしていた少年、ガロード・ランは、謎の紳士の依頼を受けて、陸上戦艦「フリーデン」からティファ・アディールを助け出す。

しかし、ティファの怯えるようすを見たガロードは、とっさに彼女を連れて逃走。そして、ティファに導かれるまま旧地球連邦軍の工場跡にたどり着き、放置されて



ガンダムXの代名詞ともいえるサテライトキャノン。
コロニーをも破壊した威力は健在だ。

いたモビルスーツに乗りこむ。この機体こそ、「ガンダムX」である。

動き出したガンダムXは、追っ手の「ドートレス」を鮮やかに撃破して圧倒的な強さを見せつけるが、その情報は瞬く間にほかのバルチャーたちのあいだに広まった。ガンダムXを手に入れようとするバルチャーのモビルスーツたちは、闇に紛れてガンダムXの四方をとり囲んでいた。ガロードも必死で戦うが、あまりに数が多く多勢に無勢、徐々に追いつめられていく。そんなガロードの姿を見てティファはつぶやく。「あなたに、力を」。ティファの祈りは、ガンダムXの秘めたる力を解放させる。

月面の太陽発電基地から一筋のレーザー回線が走りガンダムXがそれを受信すると、スーパーマイクローエーブが一気にガンダムXに注がれて背なかのリフレクターを神々しく照らす。そして、発射された極太のビームは、森ごと敵モビルスーツたちを焼き尽くす。夜明けのような明るさが収まり静けさを取り戻した森は、一面が焼け焦げていた……。

この猛々しくも恐ろしいデビュー戦を飾ったガンダムXは、その後フリーデンの戦力として参加。ガ

ロードのパイロットとしての成長とともに、ガンダムXもめざましい活躍をするこ
ととなる。なかでもサテライトキャノンのインパクトは絶大だった。破壊力が凄ま
じいうえに、射程も長距離レンジを誇っており、巨大モビルアーマー「グランディ
ーネ」を一撃で葬ったり、ザコット・ダットネルの罠にはまったフリーデンを救う
べく、マイクロウェーブを直接湖に当てて水蒸気爆発を起こさせたりと、この武器
で何度も戦局を打開した。

■新兵器を得て、超兵器を捨てたガンダムXディバイダー

その後、ガンダムXは「ベルティゴ」との戦いで一度大破し、「ガンダムXディバ
イダー」へと改修される。本機の基本的な機体性能はガンダムXと変わらないが、
大破したサテライトシステムは外されている。その代わり新装備が多数追加されて
おり、なかでも一番大きな特徴となる武器がディバイダーだ。

この武器はフリーデンのメカニック、キッド・サルサミルが長年集めた武器やパ
ーツを組み合わせたオリジナル兵器である。シールドとして、あるいは19連装ビー
ム砲（通称ハモニカ砲）としても機能するほか、背なかに装備すれば長距離をホバリ
ングできるホバリングモードにも移行する。ディバイダーを戦況に応じて使い分け
ることで、ガンダムXはフレキシブルに戦えるようになったというわけだ。

そんなディバイダーの初陣は、フォートセバーン郊外でフロスト兄弟がフリーデンを襲撃したとき。ガロードはもちまえのパイロットセンスを発揮してディバイダーを使いこなすと、ハモニカ砲でなんと「ガンダムヴァアサーゴ」を中破させる戦果をあげる。結果ディバイダーもまた、鮮烈のデビューを飾ったといっている。

その後もガンダムXは数々の激戦をくり抜けているが、実はこのころになるとガロードだけでなく、フリーデン艦長のジャミル・ニートが乗る機会も多くなる。

特にガロードが「ガンダムDX」を乗機とすると、ガンダムXはジャミルの乗機となった。ただ、第7次宇宙戦争時代にジャミルはガンダムXのパイロットだったため、もとの鞘に納まった形といえる。

そんなジャミルのガンダムXがもつとも活躍したのは、なんといってもローレライの海から発見されたLシステムをめぐって新地球連邦軍と戦ったときだろう。ジャミルは、Lシステムにとりこまれたルチル・リリアントの力を借りてニュータイプ能力を発揮すると、ガンダムXのフラッシュシステムを起動。無人の「ピットモビルスーツ」を動かして大軍



新たな武器ディバイダーは、ハモニカ砲だけでなくシールドやスラスターとしても機能する万能兵器。

を一気に撃滅し、数的不利を一気に打開している。ビットモビルスーツの統率のとれた猛攻は、サテライトキャノンにも劣らぬ脅威といえる。

なお、ビットモビルスーツは、この戦闘の直後にすべてジャミルの手で破壊されているため、フラッシュシステムはその後活躍していない。

■大戦の悲劇を招いた超兵器、新たな時代の担い手となる

ガンダムXは、もともと十五年まえに勃発した第7次宇宙戦争において、旧地球連邦軍が開発した決戦用モビルスーツである。ニュータイプ能力を増幅してビットモビルスーツを操作するフラッシュシステムと、月面基地からのマイクロウェーブをエネルギーとしてサテライトキャノンを発射するサテライトシステムを装備。その攻撃力は絶大で、コロニー落とし阻止作戦で投入された際には、コロニーをサテライトキャノンの一撃で破壊している。ただ、その一撃が人口の大半を死滅させるコロニー落としの強行を招いたことは、悲劇というほかない。

そのほかの装備としては、盾と銃を複合させたシールドバスターライフルや、ビーム格闘兵器としてはやや大きい大型ビームソードなどがある。

機体自体は、Gコントローラーと呼ばれる右の操縦桿を駆動キーとして装着することによって起動する。このGコントローラーは、サテライトキャノンの制御システムも



ガンダムXに秘められたフラッシュシステムが起動し、Gビットが一斉攻撃。

兼ねており、ガンダムXにとってはまさに肝といえる。だが、その後ジャミルがガンダムXに乗るようになると通常のコクピット仕様に改造され、Gコントローラーなしでも操縦できるようになった。

そのガンダムXディバイダーは前述通り、シールドとハモニカ砲などを複合させた武器、ディバイダーなどを追加装備した機体である。基本的なマシンのポテンシャルは変わらないものの、制御も使用条件も難しい超兵器がメインだったガンダムXと比べて、汎用性と総合的な戦闘力は格段に高くなったといえる。

また、ガンダムXディバイダーのそのほかの装備には、戦艦用のメガ粒子砲を改造したビームマシンガンや、胸部のプレスバルカンなどがある。

このように呪わしき大戦の遺物として復活したガンダムXは、サテライトキャノンやビットモビルスーツなど、前戦争の面影を徐々にそぎ落とし、新時代に対応した姿へと生まれ変わった。そこに、世代間の相克を語り続けた本作のテーマが見え隠れするのは決して偶然ではないだろう。

凄まじいポテンシャルをもつガンダムXの後継機

GX-9901-DX

ガンダムDX



新地球連邦軍が力の象徴として開発した「ガンダムX」の後継機。全高17・0m。重量7・8t。主な搭乗者はガロード・ラン

■新世代のガンダム見参

新地球連邦軍が建設した人工島ゾンダーエブタ島。そこへと向かう陸上戦艦「フリーデン」はブリッジをジャックされ、サテライトキャノンの有効射程距離まで移動させられてしまう。

そのフリーデンにキャノンを向けていたのが、新連邦軍が開発した「ガンダムDX」である。

本機は、第7次宇宙戦争時代にジャミル・ニートが乗っていた



ハイパービームソードだけで敵部隊を全滅させる。
高い機体性能をうかがわせる見事な初陣だ。

「ガンダムX」そのもののデータを移植して開発した機体だったため、その強大な力を知るジャミルには降伏以外の選択肢はなかった。クルーは全員捕まってしまうが、新連邦軍の特殊部隊隊長カトック・アルザミールの裏切りもあって、ガロード・ランはガンダムDXを奪って逃走。追っ手の「バリエント」部隊を、ハイパービームソードだけで撃破してしまう。

しかし、そこへ新連邦軍参謀本部直属の極東軍が現れ、フリーデンは敵に挟撃される形になってしまった。そこでガロードは、ガンダムDXのサテライトシステムを起動させ、ツインサテライトキャノンをゾンダーエプタ島に向けて発射。島を消滅させ、その脅威を見せつけることで極東軍を撤退させることに成功した。

これ以後、ガンダムDXはガロードの乗機となつて再びフリーデン戦力の中核を担うこととなり、「コルレル」「ラスヴェート」などの強敵を撃破していく。その際、やはり最大の武器ツインサテライトキャノンを駆使し、エスタルド国防衛戦での新地球連邦軍第11飛行基地爆破や、宇宙革命軍のタリヤ作戦

阻止ではコロニー・レーザーを完全破壊するなどしている。

そしてガンダムDXは、最終決戦において第8次宇宙戦争開戦のきっかけをつくったフロスト兄弟が乗る「ガンダムヴァーサゴチェストブレイク」と「ガンダムアシタロンハーミットクラブ」と対峙。両機が発したサテライトランチャーに対しツインサテライトキャノンを真っ向から撃ち合う形となり、両機を撃破することに成功するものの、ガンダムDXもまたボロボロに大破してしまふのだった。

■ツインサテライトキャノンの光は新世代の道標

ガンダムDXは、新地球連邦軍が力の象徴として大戦後に開発した新型ガンダムで、ジャミルが乗機としていたガンダムXをサルベージし、そのデータを移植している。そのため機体コードが流用されており、ガロードのようなニュータイプ以外の人間でもすぐにサテライトキャノンが撃てるようになっていく。

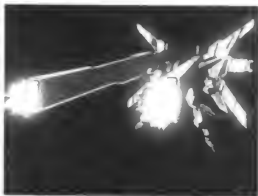
最大の武器となるツインサテライトキャノンは、エネルギー容量が拡大し、ガンダムXの2倍以上の破壊力を発揮。そのぶん単砲身では撃てなくなったため連装式となり、さらに肩部でキャノン砲を固定する形になっている。その威力のほどは、一撃でコロニー・レーザーを撃破したことからも明らかだろう。

そのほかの武器としては、固定武装のプレストランチャー、ヘッドバルカン、ハ

イパービームソードなどがある。また、本機は強奪時は丸腰だったため、そのほかのバスターライフルやデیفュンスプレートなどの武器は、メカニックのキッド・サルサミルが調達したものを使用している。ちなみに、劇中では未使用ながらG・ハンマーやロケットランチャーガンといった武装もあった。

もともとガンダムDXは新たな大戦用に用意された機体だが、実際には戦争を阻む希望の象徴として戦場を駆け抜けることとなった。それはガロードがつねにツインサテライトキャノンの使いどころを見極め、被害を最低限にとどめる努力をしていたから、そう映るのだろう。実は彼はガンダムDXを奪う際、先の大戦で愛する家族を失う悲劇を味わった老兵カトックから、「過ちを繰り返すな」という言葉をかけられている。だから本機は悪魔にならなかった。

そう思うとツインサテライトキャノン発射時に、黄金に光るガンダムDXはなぜか神々しい。未来に向かい生きる世代は、昔を生きた世代の業を受け止めて新たな時代をつくる。そんな希望の道を指し示す姿にも思える。

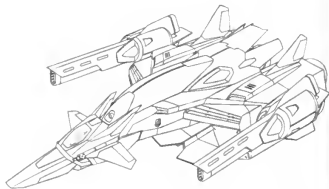


パワーアップしたツインサテライトキャノンは、巨大兵器や施設の破壊に活躍した。

ガンダムタイプを運搬するサポート戦闘機

Gファルコン

サテリコン



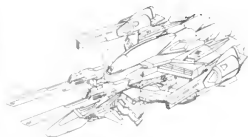
■ガンダムDXの大事な相棒

宇宙へ上がったガロード・ランが宇宙革命軍に襲われ、「ガンダムDX」ごと捕獲されそうになった際、突然現れた謎の戦闘機。その戦闘機はガンダムDXを確保して一気に戦闘空域を脱出した。この機体こそ「Gファルコン」だ。

宇宙革命軍に対抗するゲリラ組織サテリコンの少女、バーラ・シスが乗るGファルコンは、第7次宇宙戦争時に旧地球連邦軍がガンダムタイプ用に開発した支援戦闘機で、主にガンダムとドッキングして戦場へ迅速に移動し、また戦線か



ガンダムDX合体
[展開形態]



ガンダムDX合体
[収納形態]

ら離脱することを目的としている。

ガンダムを運搬する際にはコクピット部とブースター部が分離し、機体を挟んで収納する。

そこから変形した合体形態では、ガンダムとGファルコンの武器を併用することもできるが、劇中ではそうした場面はなかった。

また本機は、「ガンダムエアマスター」や「ガンダムレオバルド」との合体も可能である。

戦闘機単体としての戦闘力も十分あり、バルカン砲、赤外線ホーミングミサイル、拡散ビーム砲などの武装を装備。宇宙ではガンダムDXのパートナーとして活躍し、2機だけで宇宙革命軍のコロニー・レーザーを地球に撃ちこむタリヤ作戦を阻止するなどした。

空を華麗に飛び回る凄腕ガンマン

GW-9800

ガンダムエアマスター



ファイターモード

■戦闘機に変形できる 貴重な空戦力

ガロード・ランによって連れ去られたティファ・アディールを追って、陸上戦艦「フリーデン」は「ガンダムX」のもとへ現れる。そのガンダムXの前に2機のモビルスーツが立ちふさがる。

そのうちの1機が、この「ガンダムエアマスター」だ。本機は「ガンダムレオバルド」との連携でガンダムX捕獲に務めるが、結局とり逃がしてしまう。

第7次宇宙戦争時に地球連邦軍が開発した、変形機構をもつ機体。全高17・2m、重量6・9t。主な搭乗者はウィッツ・スー。



戦闘機形態でもモビルスーツ形態でも、正確無比な射撃を見せる。

その後、ガンダムエアマスターはフリーデンの戦力として活躍するが、乗り手のウィッツ・スーがフリーのモビルスーツ乗りだったこともあり、初期のころは仕事内容が気に入らず戦線から抜けることもあった。

ただ、ザコット・ダットネル一味との抗争のなか、ウィッツが今まで稼いだ大金をザコット一味に狙われる事件が起きた後は、フリーデンお抱えのモビルスーツ乗りとして定着する。

本機は戦闘機形態のファイターモードに変形できる貴重な空戦力であった。空を自在に飛び回って敵陣を翻弄し、2丁のバスターライフルを凄腕ガンマンのように操って敵を撃墜する場面が多かった。また、空を飛べないガンダムレオバルドをつかまえて長距離運搬する場面も見られた。

基本的にガンダムエアマスターは火力が低く、ガンダムXが起死回生のサテライトキャノン撃つまで援護するなど、引き立て役になる場面が多い。だが、バルチャーの操る量産モビルスーツ程度なら1対多数の戦いでも十分に渡りあえる実力がある。

「ガンダムアシュタロン」を襲った「地上用ジェニス」部隊や、ウィッツの金塊を狙ったザコット・ダットネル一味の「ドートレスHMファイヤーワラビー」部隊などとの戦闘では、かなりの敵機を撃墜している。

特にウィッツの故郷を襲ったバルチャーの地上用ジェニス部隊を単機で全滅させたことは、ガンダムエアマスター最大の戦果といえるだろう。

■最小限の武装で高い機動性を確保

ガンダムエアマスターは、第7次宇宙戦争時の旧地球連邦軍が開発したガンダムタイプの1機で、戦闘機形態に変形できるトランスシステムを有する可変モビルスーツである。

単機でも長時間、大気圏内飛行できることが最大の特徴で、その機動性を確保するために徹底的な軽量化がなされ、最小限の武装しか装備されていない。

ヘッドバルカン、ノーズバルカンといった内蔵武器、オブション兵器のシールドミサイルなどがあるが、やはりメイン兵装はバスターライフルである。

基本的に2丁のバスターライフルを両手で持つて撃つが、戦闘機形態では両腕にマウントされた状態になり、この形態でも攻撃することができる。

ただ、バスターライフルの攻撃力は標準的なライフル程度でしかない。劇中で多

数の敵機を撃破しているのは、ウィッツの精密な射撃で確実に敵の急所を仕留めているからである。

ちなみにガンダムX同様、ガンダムエアマスターもフラッシュシステムを搭載しており、第7次宇宙戦争当時には専用のビットモビルスーツを操っていたが、大戦後にその活躍ぶりは再現されなかった。

本機は、ガンダムXなどと同時期に決戦兵器として開発されたため、少数しか生産されていない。大戦から十五年後の劇中では、ウィッツ機以外のガンダムエアマスターは確認されておらず、ウィッツ機はたまたま彼がかつて所属していたバルチャーのリーダーから、形見として譲り受けたものとされている。

ガンダムエアマスターは兵装の数が少なく火力が弱いため、大仕事をした感がない。ただ、十五年まえの大戦で飛行可能な兵器のほとんどが失われた当時としては大変貴重で、フリーデンの戦術的にもかなり役立ったことは間違いない。本機はフリーデンの縁の下の力もち的存在といえるだろう。



射撃専門のイメージがある本機だが、高い機動性を活かした効果的な格闘戦も披露している。

殲滅戦を得意とする陸の王者

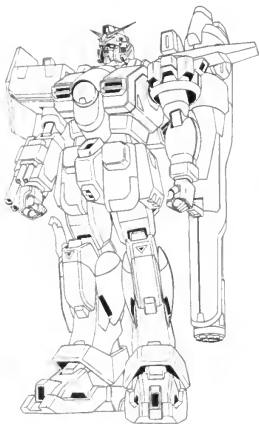
GT-9600

ガンダムレオバルド

第7次宇宙戦争時に地球連邦軍が開発した砲撃用ガンダム。全高16・8m。重量8・5t。主な搭乗者はロアビィ・ロイ。

■全身から実弾の雨を降らす 火力自慢

ティファ・アディールを奪ったガロード・ランを追って、「ガンダムX」の前に2機のガンダムが立ち上がる。「ガンダムエアマスター」とともに現れたそのうちの1機が、フリーのモビルスーツ乗りロアビィ・ロイが乗る「ガンダムレオバルド」である。全身にある火器兵器を撃ち放ち、ガンダムエアマスターとともにガンダムXを追いつめるが、結局この戦いでは





多数の敵をまとめて相手にしたり、戦艦のような大物を撃沈させたりすることが多かった。

ガンダムXに逃げられてしまう。その後、ガンダムエアマスター同様、陸上戦艦「フリーデン」と専属契約を交わし、戦力の一翼をになう。

ガンダムXが強敵に挑む傍ら、空ではガンダムエアマスターが敵部隊を翻弄し、陸ではガンダムレオバルドが重火器で敵部隊を殲滅する形が多かった。全身に多数の火器を装備しているガンダムレオバルドは、ガンダムXがサテライトキャノンを使えないときなどは大活躍。「ガンダムアシュタロン」を追っていたバルチャーの戦艦ブリッジを撃破したり、装甲が強固な「ガブル」

との戦闘では、大破しながらも至近距離から全弾を撃ちこんで撃破の足がかりをつくるなど派手な戦果を残している。

ただ、レオバルドはその火器の多さに比例して重量もあるため、足裏のローラーやキャタピラで移動することが多く、移動方法が困難な戦場ではオブション装備を付けないと、ともに戦えないことがあった。極寒の地にあるフォートセバーンでは足裏に雪上戦用のブレードシューズを、シーバルチャー（海上バルチャー）たちとの戦闘では水中戦用のS・

1ユニットを装備していた。特にS・1ユニット付きの本機は、フリーデン唯一の水中戦力として、シーバルチャーであるドーザ・パロイ一味の「ドーシート」部隊や、マークス・ガイ一味の「ドーシートⅢ」部隊との戦闘で大活躍している。

■機動性を犠牲に、大充実の武装

ガンダムレオバルドは、ガンダムXとガンダムエアマスター同様、第7次宇宙戦争時に地球連邦軍が決戦兵器として開発したガンダムタイプの子機。砲撃戦用の機体で、全身に多数の火器を装備している。メインウェポンとなるインナーアームガトリングは、左腕に装備して使用されるビームガトリング砲で、連射性能も威力も申しぶんなく、戦艦の装甲も容易に破壊することができる。

そのほかの武器としては、頭部のヘッドバルカン、ヘッドキャノン、胸部にある2基のプレストガトリング、右腕にある6門のグレネードランチャー、右肩のシヨルダーミサイル、両膝のホーネットミサイルなどがある。特に大口径のシヨルダーミサイルは、大型の敵にとどめとして使用されることが多い。

このほかオプション兵器の数も多く、両脚にセバレートミサイルポッド、雪上戦用のブレードシューズ、水中戦用のS・1ユニットなどがある。この水中仕様となるS・1ユニット付きのガンダムレオバルドは、背部に音響センサーと曳航センサ

ーが搭載されている推進ユニットが取り付けられているほか、武装も水中戦用のものに換装が可能。左腕のインナーアームガトリングなどには魚雷が装填されている。ちなみに、ガンダムエアマスター同様に本機も大戦当時に少数生産されたが、劇中ではロアビー機しか確認されていない。そのロアビー機は、もともと彼にとって本命だった女性の所有機だが、賭けに勝ったロアビーが譲り受けている。また、本機もフラッシュシステムを搭載しており、第7次宇宙戦争時にはビットモビルスーツを自在に操っていたが、残念ながら劇中での活躍は見られない。

本機は火器が多く攻撃も派手だが、そのぶん機動性が犠牲となっている。2足走行が困難で、基本的に足裏のローラーやキャタピラで移動するため、高機動タンクのような印象が強い。ただ、もともとの開発経緯を考えれば、機動性は高いが兵装は少ないガンダムエアマスターとの連携が前提にあるのかもしれない。そういう意味では、偶然ガンダムエアマスターとともにフリーデンで厄介になったことは、ガンダムレオバルドにとっては幸運だったのだろう。



水中戦用のS-1ユニットを装備したガンダムレオバルドは、貴重な水中戦力として活躍した。

火力を増強した疾風のエアマスター

GM-9800-B

ガンダムエアマスターバースト

大破した「ガンダムエアマスター」を改修・強化した機体。全高17・3m。重量7・2t。主な搭乗者はウィッツ・スー。

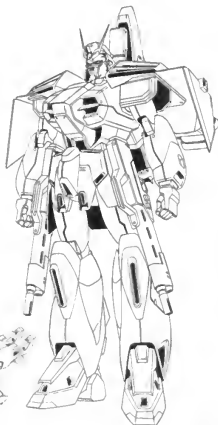
■エスタルド国の協力で

生まれ変わる

新地球連邦軍のサクリファイス作戦が実行され、攻撃を受けたノーザンベル国は同盟国のエスタルド人民共和国に援軍を要請。

エスタルドの援軍として、「ガンダムDX」とともに参加したのが「ガンダムエアマスターバースト」である。

首都に入った本機は、高い機動性を発揮して先の戦いで敗れた「ガディール」部隊を鮮やかに撃



ファイターモード





パワーアップした本機は、より高い機動性を発揮してガディール3機をあっさりと撃墜してしまった。

破。見事前回の雪辱を果たす活躍を見せるのだった。

ガンダムエアマスターバーストは、エスタルドス防衛戦において、ガディール部隊との戦いで大破した「ガンダムエアマスター」を、エスタルドの協力のもと大幅改修した機体である。

大型ブースターを装備することで、ガディールに勝る機動性を有するとともに火力の弱さをカバー。ブースターキャノンや、ノーズビームキャノンといった武装が追加されている。

本機は、その後も陸上戦艦「フリーデン」の主力として第8次宇宙戦争まで駆け抜けることになるが、なかでも最大の戦果は「ブリトヴァ」の撃破だろう。鋼鉄をも斬り裂くこの強敵を、ガンダムエアマスターバーストはガンダムDXと協力してバスターライフルの一撃でコクピットを仕留めている。ただ、実はこのとき本機は、戦闘中に左腕を斬り落とされ、バスターライフルが1丁しかなかった。にも関わらず強敵撃破に至っているということは、火力がパワーアップしていた証拠だろう。

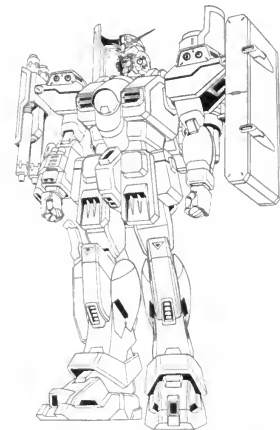
武装強化し宇宙戦にも適応した重爆撃機

GT-9600-D

ガンダムレオバルドデストロイ

大破した「ガンダムレオバルド」を改修・強化した機体。全高16・8m。重量8・6t。主な搭乗者はロアビー・ロイ。

■過剰なほどの重武装化



陸上戦艦「フリーデン」はニュータイプ研究所を訪れた際に、新地球連邦軍の襲撃を受けて応戦。「ガンダムエアマスターバースト」らとともに発進した機体が「ガンダレオバルドデストロイ」である。空をガンダムエアマスターバーストが、陸を本機が担当し、フリーデンに近づく敵を新武装で次々と撃破している。

ガンダムレオバルドデストロイ



ビーム砲になったアームガトリングを2丁携えて乱射。より殲滅戦に適するようになった。

は、「ガブル」戦で大破した「ガンダムレオバルド」を大改造した機体。宇宙での戦闘が考慮されており、ビーム兵器も大幅に追加され、過剰とも思えるほど重武装化されている。

ホーネットミサイルやブレストガトリングといった主力兵器はそのままだが、インナーアームガトリングは両腕に装着されるツインビームシリンドラーに変更。

破壊力をそのままに小型化しているため、使い勝手はかなり向上している。また、ショルダーランチャーやビームキャノンといった新武装もある。

本機はその後フリーデンの主力として、第8次宇宙戦争まで活躍することになるが、大量の武装に反して大戦果と呼べるようなものはない。

登場が遅かったことに加え、第8次宇宙基地攻防戦直後、フリーデンメンバーが一時新地球連邦軍に拘束されてしまったため、活躍する機会が少なかったことが最大の原因だ。

もう少し参戦が早ければ、デストロイの名に相応しい活躍があったと思うと残念でならない。

ビット攻撃を駆使する純白のニュータイプ専用機

RMSN-008

ベルティゴ

高い機動性を誇るニュータイプ専用モビルスーツ。全高18・5m。重量7・2t。主な搭乗者はカリス・ノーティラス。

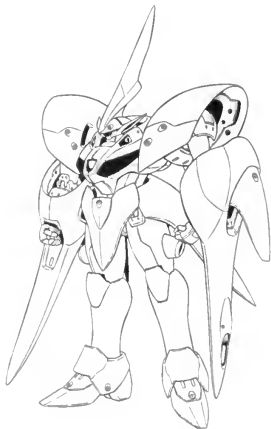
■ビットを捨てた

ニュータイプ専用機

フォートセバーン市に向かう陸上戦艦「フリーデン」の前に、カリス・ノーティラスが乗る真っ白な機体が立ちふさがる。

この「ベルティゴ」はニュータイプ専用機で、人工ニュータイプであるカリスはビット攻撃で「ガンダムX」を猛攻し、サテライトキャノンを破壊。瞬く間に迫いつめてしまう。

ベルティゴは、第7次宇宙戦争





ビットによるオールレンジ攻撃で猛攻するベルティゴ。ニュータイプ専用機の脅威を見つけた。

で宇宙革命軍が地上各都市を制圧するライラック作戦で地球に降下させたニュータイプ専用機である。フラッシュシステムを介した小型ビーム砲台のビットが主力で、そのほかの武装はマシンキャノンや内蔵ビームライフル、ビームサーベルと、いたってシンプルである。ちなみにカリスが乗る機体は、ライラック作戦時に投下した予備パーツから、ドローラット博士が組みあげたものだ。

その後、「ガンダムXディバイダー」との一騎討ちで敗北したベルティゴは、新地球連邦軍への抵抗組織に参加するカリスとともに再登場。新連邦軍に捕獲されたフリーデンメンバーを救出すると、そのまま第8次宇宙戦争まで共闘を続ける仲間となる。

再登場時には、心強い味方となったベルティゴだが、ビットはガンダムXに破壊されたあと、一切披露していない。そのぶん無敵を誇ったかつての姿はないが、人工ニュータイプ特有の後遺症と戦う人生を選んだカリスにとって、ビットを捨てたベルティゴこそ、未来を見据えて生きる彼の覚悟を具現化したものなのかもしれない。

地獄の業火をまき散らす恐怖の暴れ馬

NRX-0013

ガンダムヴァサールゴ

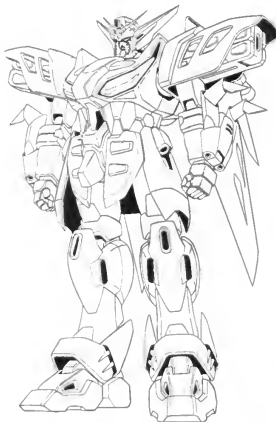
新地球連邦軍

第7次宇宙戦争後に開発された試作ガンダム
全高17・8m。重量8・1t。主な搭乗者はシ
ヤギア・フロスト。

■悪魔の顔を秘めた凶暴機

陸上戦艦「フリーデン」にティ
ファ・アディールを奪われたアル
タネイティヴ社。そこに謎のモビ
ルスーツ乗りのシヤギア・フロス
トが現れ、自分を雇えば彼女を連
れ戻すと取引してきた。そんな不
敵な態度をとるシヤギアの機体が
「ガンダムヴァサールゴ」である。

ガンダムヴァサールゴは、シヤギ
アの双子の弟、オルバ・フロスト
の「ガンダムアシュタロン」と共





禍々しい様相のメガソニック砲。まるで悪魔が咆哮し、地獄の業火をまき散らすかのようだ。

同でティファを奪還。不意打ちに戸惑うフリーデンに対し、待ち伏せをしていた本機は腹部を展開させる。そして、つり目がちな胸部パーツを光らせ、腹部から巨大砲門を出現させたガンダムヴァサゴは胴体から、メガソニック砲を発射させた。真つ赤で極太なメガ粒子砲は猛烈な土煙をたててフリーデンに襲いかかり、メインエンジンに大ダメージを与えた。

さらにガンダムヴァサゴは、引き返してきたガンダムアシュタロンとの連携で猛攻を仕掛け、「ガンダムX」のcockpitを潰す寸前まで追いつめる。この戦いは結局、「ガンダムエアマスター」たちに邪魔されたことで勝負を預けることになるが、本機の猛攻ぶりはシャギア自身が「凶暴です」と言い切る通り、強烈なインパクトを与えた。

その後もガンダムヴァサゴはガンダムアシュタロンとともに、ことあるごとにフリーデンを襲撃。ただ本機は一度、フォートセバーンの戦いでガンダムアシュタロンをかばって「ガンダムXデイバイダー」に倒されたため、アシュタロンに比べるとや

やフリーデン隊との対決は少ない。そんななかで本機最大の戦果は、ニュータイプ研究所の殲滅だろう。

かつて自分たちを認めなかった人々に復讐するべく、フロスト兄弟は新地球連邦軍とニュータイプ研究所のそれぞれに偽情報を流して戦乱を仕掛け、その間に本機とガンダムアシユタロンで研究所を徹底的に破壊している。その爆撃ぶりは、冷静なシャギアが内に秘めた怒りを爆発させているかのように激しかった。

■モビルスーツ単機として最強のビーム兵器を搭載

ガンダムヴァサゴは、第7次宇宙戦争後に、地球連邦政府再建委員会が次世代ガンダムを模索して開発した機体である。高出力ジェネレーターを搭載しているため高い機動力と攻撃力を兼ね備えた機体で、フラッシュシステムも内蔵されているが、フロスト兄弟はこれを扱うことはできない。

劇中でも猛威を奮ったメガソニック砲は、高威力、長射程を誇っており、本機の切り札となるビーム兵器だ。発射時には、腹部を上下に展開させて砲口を露出させ、背なかのラジエータブレードを開く態勢をとる。さらに姿勢制御するために、ストライククローを伸ばしてアンカーとして地面に固定させる。

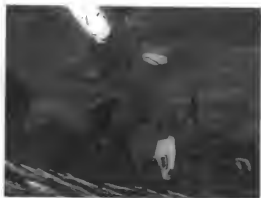
唯一の問題点は射撃時にどうしても隙が大きくなることだが、サテライトキャノ

ンのように発射条件がかぎられることはなく、モビルスーツ単体の内蔵電源のみで撃てるので使い勝手はよいほうだといえる。

伸縮自在の打突兵器ストライククローと、そのクローの先端から放つクロービーム砲は、劇中の戦闘ではもっとも使用された兵器だ。ストライククローで牽制しつつクロービームを近・中距離から自在に撃ち分ける猛攻ぶりは、本機の高い機動力ともあいまって、まるで無数の打撃を繰り出す格闘家のようにも思える。ときにはクローでつかまえた敵機に、そのままビームを放つてとどめを刺す、といった戦い方も見られた。

それ以外の武器としては、ビームサーベル、格闘兵器と射撃兵器を複合させたオプション兵器、ストライクシューターなどがある。

ガンダムヴァサゴは、十五年まえの大戦後に開発されたガンダムとしてはガンダムアシュタロン同様、非常に高い性能を有している。人口の大半を失い、地球自体も荒れ果てた時代にあって、新連邦軍の開発技術が大戦当時のレベルにまで復興したことが、この機体性能を見れば十分にうかがい知れる。



敵機をクローでたたき壊すだけでなく、つかんでそのままビームを放つこともある。

パワフルな攻撃がもち味の重爆撃機

NRX-0015

ガンダムアシュタロン

新兵器解説

第7次宇宙戦争後に開発されたガンダムの1機、変形機構をもつ。全高19・5m、重量10・2t。主な搭乗者はオルバ・フロスト。

■空飛ぶ万能ガニ襲来

ほかのバルチャーに追われ、陸上戦艦「フリーデン」に救われたオルバ・フロスト。彼は助けられた恩を返すためにアルタネイティブ社襲撃を手伝うことになっていたが、作戦の最中に裏切り、ティファ・アディールを奪取してしまふ。その際、彼が乗っていた機体が「ガンダムアシュタロン」だ。

アルタネイティヴ社にティファを引き渡した本機は、双子の兄シ



モビルアーマー形態



モビルアーマー形態は、空中、雪上、水中とあらゆる戦場で活躍。万能戦闘機といえるほどだ。

ヤギアが乗る「ガンダムヴァアサーゴ」と合流。甲殻類のようなモビルアーマー形態に変形して高い機動性を活かし、ガンダムヴァアサーゴと連携して「ガンダムX」を窮地に陥れている。

そのうち本機は、ガンダムヴァアサーゴと連携してフリーデンを襲撃しているが、モビルスーツ形態でもモビルアーマー形態でもパワフルな格闘攻撃を行えるアトミックスザースを中心とした戦法が多い。打撃に使ったり、ビーム砲を撃つたり、隙を見て敵機を羽交い締めにすることもあった。その強力な締めつけは、まさにカニのハサミを思わせ、背なかから敵を挟んでガンダムヴァアサーゴにとどめを任せるパターンもあれば、正面から挟んで自ら襲いかかるパターンも見られた。

モビルアーマー形態でいることが多く、戦闘機のように大気圏を飛行した。またガンダムヴァアサーゴを背なかに乗せたり、アトミックスザースで抱えたりして運搬することも多かった。さらにフォートセバンの戦いではアトミックスザースを前方に出して、ジェットスキーのように雪上を滑空する場面も

見られた。水中戦にも適応力があり、ローレライの海ではガンダムXをあと一歩まで追いつめる活躍を見せている。

くわえてガンダムアシユタロンは、戦場のどさくさに紛れて邪魔者を始末することとも多かった。ローレライ海戦では、Lシステム引き上げに協力したマーカス・ガイ一味を、カトック・アルザミールの特種工作作戦のサポートではフリーデンから脱出したカトックの部下たちをバルカンで亡き者にしていく。

ためらいもせず引き金を引いているあたり、実にオルバらしい。本機もガンダムヴァサーゴに負けず劣らず、凶悪なガンダムだといえよう。

■フレキシブルな戦法が最大の魅力

ガンダムアシユタロンは、ガンダムヴァサーゴ同様、第7次宇宙戦争後に地球連邦政府再建委員会が開発したガンダムのうちの1機である。トランスシステムを採用しており、大型のバックパックに覆いかぶさるようにしてモビルアーマー形態に変形できる。

この形態では機首にあるモノアイ状のセンサーを利用し、長距離を飛行することができるため高機動性を発揮。重爆撃機のような戦い方で敵を翻弄する。また、長距離を飛行する際にはブースターユニットを装備することもあった。

もつとも特徴的な武器がカニのハサミのようなアトミックシザースで、打撃武器として使用できるほか、内蔵されたシザースビーム砲と組み合わせることで、多彩な攻撃を繰り出すことができる。また、シザースはモビルアーマー形態だけでなくモビルスーツ形態でも使用できるため、両手と併用すれば敵をシザースで捕らえたうえで、さらなる攻撃を加えることも可能だ。

そのほかの武器としては、ノーズビーム砲、ショルダーバルカン、ビームサーベル、オブション兵器のビームスピアなどがある。また、ガンダムヴァサールと同様にフラッシュシステムが搭載されているが、こちらもオルバに適応力がなく劇中で使用されることはなかった。

モビルスーツとしては大型だが、そのぶんパワフルな攻撃ができるのが本機のもち味である。しかし、内蔵武器が多く空戦も格闘戦もこなせることから、かなりフレキシブルな機体だ。

見た目こそ凶悪だが、ポテンシャルという点においてはガンダムヴァサール同様、戦後のガンダムとしては優秀といえる。



巨大なアトミックシザースだが、モビルスーツの四肢をつかむなど見かけ以上に器用である。

旧地球連邦軍が開発した三ツ目の量産機

DT-6800

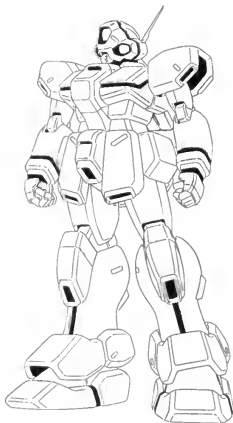
ドートレス

第7次宇宙戦争時に大量投入された量産型モビルスーツ。全高16・3m。重量7・0t。主な搭乗者は新地球連邦軍兵士、バルチャー。

■大戦後も大活躍

アルタネイティヴ社のエージェントのライク・アントは、ガロード・ランを利用し、陸上戦艦「フリーデン」に奪われたティファ・アディールを連れ戻そうとするが、土壇場で彼に裏切られて、急いで部下とともにモビルスーツに乗って追撃する。このときの彼の乗機が「ドートレス」である。

ドートレス隊はガロードたちを追いつめるが、旧地球連邦軍の工





新地球連邦軍の主力として大量に投入されたドートレス。新連邦の勢力拡大に多大な貢献をした。

場跡で稼働した「ガンダムX」によって瞬く間に全滅させられてしまう。

ドートレスは、もともと第7次宇宙戦争で旧地球連邦軍が開発した量産型モビルスーツで大戦当時に大量投入された。

そのため大戦後に多くの機体が投棄されてしまい、それを現在のバルチャーやモビルスーツ乗りが回収して使用している。

劇中では彼らが独自にカラーリングしたものや、カスタマイズされたドートレスが多く登場する。バルチャー仕様は「ドートレス改」と総称されるが、「ジェニス」などと比べるとやや個体数は少ない。

そんなバルチャー仕様のドートレスのなかで、一番目立った機体といえば、ザコット・ダットネル一味に雇われたモビルスーツ乗り、エニル・エルが乗る「ドートレスHMCワイズワラビー」（以下、ワイズワラビー）だろう。

フリーデンを罠にかける一方、個人的にガロードに恨みを抱いたエニルは、ワイズワラビーでガンダムXと交戦。紅蓮の炎に攻め立てられるフリーデン

近辺で、ガンダムXを追いつめる善戦ぶりを見せた。

おそらくガンダムXをもっとも苦戦させたドートレスは、このワイズワラビーだろう。

ドートレスは前述通り、第7次宇宙戦争で旧地球連邦軍が開発した量産型モビルスーツで汎用性が高く、地上・宇宙を問わず運用できるため大戦中に大量投入された。

基本武装は90mmマシンガンのみだが、バリエーション機ごとに武装はいろいろと異なる。また、新地球連邦軍仕様になってからは、シールドとビームサーベルも基本武装に加わっている。

新地球連邦軍仕様のドートレスは、主力機として大量に登場。ノーザンベル首都を急襲したサクリファイス作戦や、第8宇宙基地襲撃作戦などでも数多く投入されている。

その後の第8次宇宙戦争では、後継機の「ドートレス・ネオ」に主力機の座を奪われるが、それまで新地球連邦軍が地球各地を統合するうえで重要な地位を占めていたことは間違いない。



エニルの実力もあるが、ワイズワラビーはドートレスとしてもっともガンダムXを追いつめた実力機。

ドートレスの主なバージョン

ドートレストンク



戦車の車体を組み合わせたカスタム機。ウィッツ・スーの故郷で、農村の自警団が使用した。

ドートレスコマンド
ドートレスの指揮官機。アンテナを増設して通信機能を強化しており、頭部の形状が異なる。



ドートレスウエボン
右肩に500mmキャノンを装備した支援タイプ。エスタルド防衛戦などで登場した。



**ドートレスHMC
(ワイズワラビー)**
エニル・エルが乗る、陸上での機動性を向上させた機体。HMCは、ハイ・モビリティ・コマンドの略。



ドートレスフライヤー
飛行用バックパック装備の空戦タイプ。新地球連邦軍がローレライの海を進軍する際に大量投入した。



**ドートレスHM
(ファイヤーワラビー)**
ザコット・ダットネル一味が使用した高機動型。火炎放射器を装備した部隊がフリーデンを襲った。



巨大な光を放つ悪魔の断末魔

MRX-0013-CB

ガンダムヴァサージュチェストブレイク

新地球連邦軍

宇宙戦に対応した「ガンダムヴァサージュ」の改良機。全高17・8m。重量8・3t。主な搭乗者はシャギア・フロスト。

■パワーアップした悪魔

ティファ・アディールを宇宙革命軍からとり戻し、地球へと帰還する「ガンダムDX」と「Gファルコン」の前に、とある部隊が立ちはだかる。フロスト兄弟率いる新地球連邦軍の先遣部隊で、このときシャギア・フロストが乗っていた機体が「ガンダムヴァサージュチェストブレイク」である。

本機は、宇宙革命軍との戦闘に備えて「ガンダムヴァサージュ」が





胸部に砲門がふたつ増え、トリプルメガソニックはさらに超絶的な破壊力となった。

改良された機体で、宇宙戦にも対応。先代機で猛威を奮ったメガソニック砲は3門に増設され、さらに出力も強化、トリプルメガソニック砲として生まれ変わっている。そして、背なかのラジエータープレートは6枚となり、高効率な機体冷却ができるだけでなく、「ガンダムアシユタロンハーミットクラブ」と連結してサテライトランチャーを使用する際には、このプレートがマイクロウェーブ受信用のリフレクターとなる。また、ストライククローも、衝撃吸収度が格段にアップ。さらに、イ

ンナーフレームが伸びるようになっており、第8次宇宙戦争ではフリーデンや宇宙革命軍との戦闘でその猛威を振るった。

本機は、新連邦軍のエースとして活躍する傍ら、戦争を願うフロスト兄弟の野望のために暗躍。穏健派の新連邦軍首脳たちの乗る特別機をトリプルメガソニック砲で瞬殺している。

最終的にガンダムアシユタロンハーミットクラブとともにガンダムDXと相打ちとなるが、チェストブレイク（胸が割れる）の名の通り、張り裂ける悪意を具現化していた。

宇宙でも猛威を奮う巨大ヤドカリ

NRX-0015-HC

ガンダムアシュタロンハーミットクラブ

新機軸

「ガンダムアシュタロン」の改良機で、ハーミットクラブはヤドカリの意。全高19・5m。重量12・0t。主な搭乗者はオルバ・フロスト。

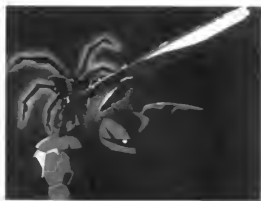
サテライトランチャー

脅威の破壊力

宇宙へと帰還する「ガンダムDX」たちの前に立ちふさがった新地球連邦軍の先遣隊。そのなかに、「ガンダムヴァサゴチェストブレイク」（以下、チェストブレイク）とともにいたのが、「ガンダムアシュタロンハーミットクラブ」である。本機は「ガンダムアシュタロン」の改良機で、チェストブレイク同様宇宙戦に対応できるようになっている。先代と同じくモビルア

モビルアーマー形態





サテライトランチャーのような大型武器を装備可能。
その姿は移動砲台を思わせる。

マー形態に変形できるが、バックパックはより巨大になり、推進力も大幅に強化されている。アトミックシザースも巨大なギガンティックシザースに生まれ変わっており、打撃力も大幅アップ。それでいて、モビルスーツの四肢を捕縛する器用さは相変らずなのだから、脅威というほかない。

また、チェストブレイクと連結することで、サテライトシステムを活用したサテライトランチャーを発射することも可能。モビルアーマー形態となり、背なかにランチャーをセットして、チェストブレイクを砲撃手として乗せる。そしてチェストブレイクがマイクロウェーブを受信し、サテライトランチャーにエネルギーが充填されるといふ仕組みだ。

このランチャーの破壊力は絶大で、しかも砲撃中でも射線を動かせる。第8次宇宙戦争では、宇宙革命軍のザイデル・ラッソ総統の旗艦を撃墜した流れで、射線を動かして新連邦軍のフィクス・ブラッドマン総司令官の乗る旗艦までも撃墜している。

ただ最後は、チェストブレイクとともにガンダムDXと相打ちとなっている。

海のハゲタカが駆る希少な水陸両用モビルスーツ

DTM-7000

ドーシード



■水中戦に長けた イエローサブマリン

新たなニュータイプを探す陸上戦艦「フリーデン」は、ティファ・アディールの予言に従ってサンルーカス海岸へ到着。ティファは、謎の声をたどって単独で沖へと出てしまう。

そこへ、シールバルチャー（海上バルチャー）のドーザ・パロイ一味が偶然通りかかり、ティファを追う「ガンダムX」や「ガンダムエアマスター」に襲いかかる。このとき、

旧地球連邦軍の水陸両用機で、第7次宇宙大戦後はシールバルチャーたちが使用。全高16・4m。重量6・3t。主な搭乗者はドーザ・パロイ。



水中の高い機動性だけでなく、伸びる腕も脅威。動きも意外とフレキシブルだ。

ドーザー一味が使用していた機体が「ドーシート」だ。

ドーシートは、旧地球連邦軍が開発した水陸両用モビルスーツで、背部に推進器を装備している。頭部形状からして、「ドートレス」をベースに開発した機体であろう。主な武装は両肩に装備した魚雷だが、伸縮式の腕の先端にはカギ爪型のマニピュレータ（機械の手）があり、格闘戦などに使用する。また、腕の先端にはビーム砲も装備している。劇中で本機は、ドーザー一味がサルベージして使用しているが、

イルカの細胞組織から製作した生体レーダー、Dナビを搭載しており、水中での作戦行動に適した機体に仕上がっている。

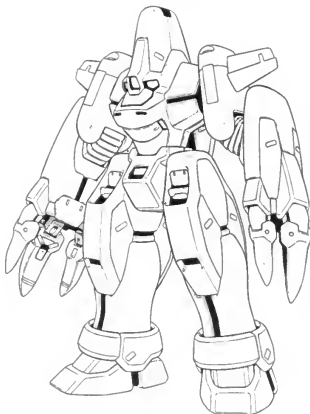
再びガンダムXたちと交戦した際には、海中で大量の泡を立てて目くらましをしたり、水しぶきを立ててバリア代わりにするなどの戦法を繰り出した。

この時代としては珍しい水陸両用機として、ガンダムX相手に善戦したドーシートだったが、ニュータイプである白いイルカにDナビを狂わされてしまふと一気に劣勢になり全滅。機体自体のポテンシャルは、しよせん量産機程度だったようだ。

海水中戦で活躍した水陸両用機

DTM-7200

ドーシートⅢ



「ドーシート」の改良機でシーバルチャータちが使用。全高17・0m。重量7・6t。主な搭乗者はマークス・ガイ。

■ローレライに翻弄された 悲しき水陸両用機

太平洋近海で潜水艦を中心に編成されたシーバルチャー（海上バルチャー）のマークス・ガイ一味は、通りかかる戦艦を襲いパーツを略奪していた。

このとき彼らが使用していたモデルスーツが、「ドーシートⅢ」である。

マークス一味はそこへ突如訪れたオルバ・フロストの依頼によって、ローレライの海に眠るLシス



海水中戦に猛るドーシートⅢ。水中では威力が減退するビーム砲は主に対空兵器として使用していた。

テムとビットモビルスーツをサルベージ。このときにも、深海での細かい作業を得意とする本機が活躍している。

ドーシートⅢは、水陸両用モビルスーツ「ドーシート」の改良機で、脚部がウォータージェット推進機器になっており、水中適応力が向上している。

さらに、ビーム兵器を受けつけないほど強固な装甲で、マニピュレータ（機械の手）兼用のクローも大型化している。魚雷などの基本装備はドーシートと変わらないが、ビーム砲のみ片腕に2門づつの計4門に変更されている。

ドーシートⅢは、近づく陸上戦艦「フリーデン」への攻撃でもその猛威を奮い、ガンダムアシュタロンが「ガンダムX」を捕らえているあいだに「ガンダムレオパルド」などを相手に善戦する。

だがその後、追撃するガンダムXたちを迎撃するために登場するが、あえなく全滅。ドーシートを改良したとはいえ、やはりポテンシャルは凡庸だったといえる。ちなみに、本機は「Ⅲ」となっているが、「Ⅱ」の存在は確認されていない。

大気圏飛行もできる新地球連邦軍主力機の集大成

NRX-018-2

ドートレス・ネオ

新地球連邦軍

新地球連邦軍が開発した、「ドートレス」の後継機。全高18・2m。重量8・0t。主な搭乗者は新地球連邦軍一般兵。

格闘戦に長けた

ドートレスの次世代機

宇宙革命軍のコロニー・レーザーによる地球奇襲作戦、ダリア作戦を失敗に追いこみ、ティファ・アディールを救った「ガンダムDX」と「Gファルコン」。その前に新地球連邦軍の大部隊が立ちほかかる。「ガンダムヴァサールゴチエストブレイク」と「ガンダムアシュタロンハーミットクラブ」に率いられた量産機、「ドートレス・ネオ」である。





ワイヤード・ビームライフルは、ビームカッターの刃先を伸ばしてビームライフルのようにも使える。

本機は、旧地球連邦軍の主力となった「ドートレス」の次世代機となる量産型モビルスーツで、新地球連邦軍の最新主力機となる。ただ、正確には制式採用前の最終テスト段階にあるため、フロスト兄弟の親衛部隊にのみ実戦配備されている。

「ガンダムヴァサゴ」のデータがフィードバックされており、両腕にワイヤード・ビームライフルという、ビームカッター兼ビームライフルとして使える武器を装備している。主に格闘戦では無類の強さを誇っているが、格闘兵器のように見せておいて刃先を伸ばし射撃兵器のように使い分けるフェイント戦法を得意とする。なお、劇中では携帯のビームライフルも使用していた。

ドートレス・ネオは、その後の第8次宇宙戦争にもフロスト兄弟直轄部隊に配備され、宇宙革命軍との戦闘でも奮戦している。だが、残念ながら投入された時期が遅く、あまり活躍した印象はない。

ただ本機は、ドートレス特有の汎用性が最大の特徴で、そのうえ単独で大気圏内飛行もできる。新連邦軍モビルスーツのひとつの集大成といえるものだろう。

大空を蹂躪する新地球連邦軍初の量産型モビルスーツ

NR-001

バリエント

新地球連邦軍

新地球連邦軍初の量産機。簡易変形による大気圏内飛行が可能。全高17・0m。重量6・2t。主な搭乗者は新地球連邦軍一般兵。

■空陸両用の簡易可変機

アイムザット・カートラル諜報統括官が指揮する、旧地球連邦軍の兵器工場、人工島ゾンダーエプタ。ここに、カトック・アルザミールの特務部隊とともに配備された新型量産機が「バリエント」である。

カトックたちが陸上戦艦「フリーデン」に潜入し、ブリッジをジャックする作戦を進める一方、その援護のためにフロスト兄弟たち





貴重な空戦力として活躍。陸のドートレス、空のバリエントといった配備で新地球連邦軍に貢献した。

が出撃し、このバリエント部隊を指揮している。軍隊ならではの統率のとれた戦法で、大気圏内飛行能力を駆使してガンダムたちを攻め立てるものの大敗している。バリエントは、新地球連邦軍が樹立されてから初となる量産型モビルスーツである。手薄だった空戦力を補強する意味で大気圏内飛行能力を有しており、脚部を変形させて推進装置としている。

ただし、武装はビームライフル、ビームサーベル、ミサイルと標準的だ。ちなみに、もともと開発番号はNRX-009だったが、制式採用に伴って番号を変更されている。

武装は標準だが、空を飛べることと機動性の高さは脅威的で、物量作戦で新連邦軍が勢力を拡大するうえで大きく貢献している。

その後も主力機として第8次宇宙戦争でも多くのバリエントが投入され、総司令フィクス・ブラッドマンの護衛機としても登場している。

劇中での活躍は「ドートレス」同様、ノーザンベル奇襲作戦で猛威を奮ったくらいだが、量産機としては十分に役割を全うしたといっていだろう。

ガンダムエアマスターを仕留めた音速ファイター

NRMA-006

ガディール

新地球連邦軍

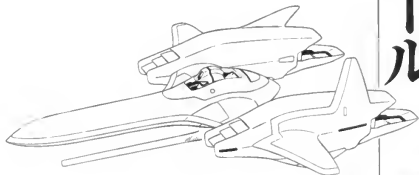
新地球連邦軍が開発した空戦用モビルアーマー。全高18・2m。重量7・0t。主な搭乗者は新地球連邦軍一般兵。

■戦闘機のような

高機動モビルアーマー

エスタルド人民共和国を平定するべく実施された、新地球連邦軍の襲撃作戦。これに「ドートレス」や「バリエント」とともに投入されたのが、モビルアーマー「ガディール」である。

奮戦する「ガンダムエアマスター」に対し、ガディールは高い機動性を武器に猛攻を仕掛けて、量産機ながら、たった2機でガンダムエアマスターを大破させること





一見戦闘機のように見えるモビルアーマーのガディール。よく見ると頭部があることがわかる。

に成功している。

ガディールは、一見すると戦闘機のように見えるが、実は空戦能力に特化したモビルアーマーである。高い空戦能力と推進力を活かして、一撃離脱戦法を得意としている。30機が生産され、そのうち南アジア戦線で5機が確認されている。

本機の機体上部には頭部が、両翼のエンジンの下には腕部が備えられており、マニピレータ（機械の手）で機体下にあるビームライフルを直接持つて射撃したり、

ビームサーベルを使用することも可能である。

本機は、ノーザンベル首都を急襲したサクリファイス作戦でも3機投入されたが、改良された「ガンダムエアマスターバースト」によって全滅させられてしまった。

第7次宇宙戦争後に開発されたものとしては唯一のモビルアーマーだが、なぜか活躍の機会にあまり恵まれなかった。

しかし、バリエントと並んで空を飛べる貴重な存在だけに、おそらく劇中以外の戦闘では大型輸送機などの襲撃に抜群の効果を発揮したに違いない。

曲芸師のような敏捷性を誇る白い悪魔

MRX-007

コルレル

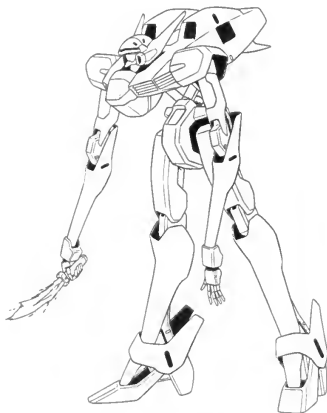
新地球連邦軍

極限まで軽量化した試作モビルスーツで、武器はビームナイフのみ。全高17・9m。重量4・5t。主な搭乗者はデマー・グライフ。

■超速の斬り裂き攻撃

ノーザンベル首都を奇襲する、新地球連邦軍のサクリファイス作戦において、フロスト兄弟は「ガンダムDX」討伐の刺客第1号を送りこむ。それが、アフリカ戦線で白い悪魔とあだ名されたデマー・グライフが乗る「コルレル」である。

コルレルは、袋小路に追い込まれたガンダムDXを急襲し、目にも留まらぬ速さで左腕を斬り落と





華奢な姿だが、敏捷性は異常に高い。モビルスーツとは思えない動きは、まさに曲芸師状態だ。

す。そして、モビルスーツとは思えぬほどの高い敏捷性で、ガンダムDXのボディや武器を次々に斬り刻んでいく。

そのあまりの速さにガンダムDXは手も足も出ず大ピンチを迎える。だが、ガロード・ランは、斬られたライフルの爆発で吹き飛んで動きを止めたコルレルを見逃さず、バルカン砲などで蜂の巣にし、ようやくこれを撃破するのだった。

コルレルはモビルスーツとしては極限まで軽量化された機体で、武器もビームナイフ1本しか持つことができない。しかし、その極端な性能のおかげで曲芸師並みの動きと敏捷性を發揮し、敵を攪乱して斬り刻むことができる。

ガンダムDXの装甲をいとも容易く貫いていることから、デマー自身の操縦技術も群を抜いたものであることは間違いない。

ただ、極端すぎる軽量化のために装甲が脆弱すぎるのが難点で、これが原因で倒された。しかし、単機でガンダムDXを撃破寸前まで追いつめた功績は見事だろう。ちなみに、もともと本機は別のカラーリングで、デマーが自ら白に塗り替えている。

目に見えぬ刃物で敵を葬る悪魔の狩人

NRX-011

ブリトヴァ

新地球連邦軍

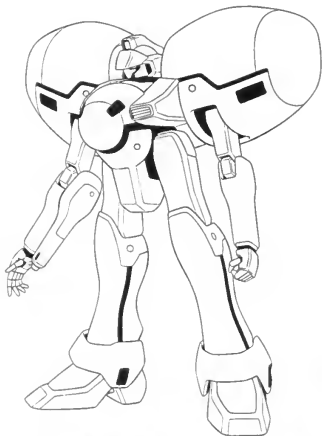
接近戦用のカスタマイズ機。名前はロシア語で「カミソリ」の意味。全高17・5m。重量5・2t。主な搭乗者はドウエート・ラングラフ。

■すべてを斬り刻む 戦慄のかまいたち

新地球連邦軍の傘下に入ったガスタールとの戦いに向かうエストラルドのリー・ジャクソン將軍を追う「ガンダムDX」たち。

その前に、フロスト兄弟の刺客第2号、東部戦線の狩人とあだ名されるドウエート・ラングラフが駆る「ブリトヴァ」が襲いかかった。

本機は、糸のように細く鋭利なヒートワイヤーを使ってガンダム





糸のように細いヒートワイヤーは目視しにくいうえに、鋼鉄を斬り刻むほど鋭利だ。

D Xの武器を真つぱたつにし、猛攻を仕掛ける。

だが、攻撃の正体に気づいたガロード・ランが策を講じて、ガンダムD Xがヒートワイヤーの先端部を破壊し、その隙に「ガンダムエアマスターバースト」がコクピットを一撃で仕留めるのだった。

ブリトヴァは、もともと後方支援機だった機体を接近戦用に改造したカスタマイズ機である。主力兵器は、右手に装備された、超合金製の糸でできたヒートワイヤーである。この目視しにくいヒートワイヤーによる攻撃は猛烈で、しかもガンダムD Xの装甲ですら斬り刻んでしまうほど鋭利である。

そのほかの武器としては、両肩のマイクロミサイルや、オプションの全身を覆う使い捨ての高速移動用ブースターパックがある。

「コレル」ほどではないが、ブリトヴァもモビルスーツとしては軽量で機動性がかなり高い。ガンダムタイプ2機を相手にしながら、最後の1撃以外は無傷でいたことがそれを証明している。攻撃方法は残虐だが、優秀な機体といっている。

究極の防御力をもつ不死身の巨大モビルスーツ

NRX-010

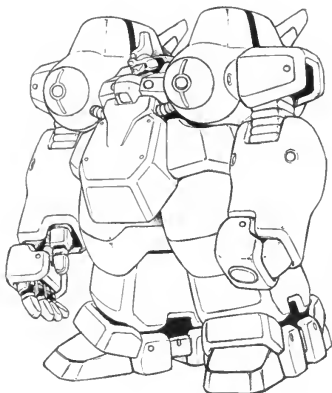
ガブル

新地球連邦軍

防御力を追及した試作機で、フィールド・ジェネレーターを搭載する。全高28・3m。重量22・5t。主な搭乗者はミルラ・ドライド。

■圧倒的な防御力をもつ

エスタルドから出国するべく溪谷のあいだを進軍していた陸上戦艦「フリーデン」の前に、フロスト兄弟の第3の刺客が現れる。インド戦線で活躍し、不死身の殺人マシンの異名をとる、ミルラ・ドライドが乗る「ガブル」である。ガブルは、その巨体を使って敵を押しつぶしたり、打撃を行ってガンダムDXたちを蹂躪。しかも分厚い装甲に加えて、ビームを無





高い防御力を誇るガブル。また武器はないが、単純な打撃だけでも相当な破壊力を秘めている。

効化するバリアも張っていたため、まったくダメージを受けつけなかった。そこへ、途中から加勢した「ガンダムレオバルド」が捨て身でガブルの懷に飛びこむと、零距离から一斉砲撃。やっとバリア装置と胸部の装甲を破壊し、そこへガンダムタイプ3機による集中射撃が加えられたことで、本機はようやく倒れるのであった。

ガブルは、防御力を徹底的に追及した試作モビルスーツで、その装甲は自力で動ける限界までぶ厚くなっている。しかもビーム攻撃を無効化するフィールド・ジェネレーターを両肩に内蔵しており、防御面はほぼ完璧に近い。そのぶんだきは鈍重を極め、しかも武器を一切装備していない。単純な格闘攻撃しかできないが、その打撃力は絶大で、並みの機体ならば圧殺必至だろう。

ガブルは、ちょうど「コルレル」とは真逆のコンセプトで、もしかしたら両機は連携を前提としていた可能性もありうる。両機が互いの弱点をカバーしあえば、劇中での活躍がひと味もふた味も違ったものになったに違いない。

ビットモビルスーツ5機を操る驚愕のニュータイプ専用機

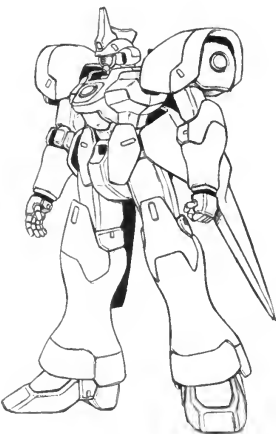
NRX-016

ラスヴェート

新地球連邦軍

新地球連邦軍が初めて開発したニュータイプ専用機。全高17・8m。重量8・1t。主な搭乗者はアベル・パウアー。

■フロスト兄弟に翻弄された ニュータイプ専用機



ニュータイプ研究所を目指す陸上戦艦「フリーデン」の前に、フロスト兄弟の第4の刺客が現れる。太平洋戦線で活躍したアベル・パウアーの乗る「ラスヴェート」である。本機は高機動性を武器に「ガンダムDX」と戦っていたが、援護の「ガンダムヴァサゴ」たちが離脱すると一気に窮地に立たされてしまう。

するとアベルのニュータイプ能



本体と同型のビットモビルスーツを操るラスヴェート。その攪乱は、ガンダムタイプ3機を翻弄した。

力が開花し、フラッシュシステムが作動。ラスヴェートと同型のビットモビルスーツ5機を自在に操り、形勢は逆転する。同型機6機による猛攻は攪乱効果をもたらし、ガンダムDXは窮地に追いこまれる。

しかし、艦外に出たティファ・アディールが直接指差すことで本体を発見。ガンダムDXは、本体のラスヴェートを攻撃し、戦闘不能に陥らせることができた。

ラスヴェートは、新地球連邦軍が第7次宇宙戦争後初めて開発したニュータイプ専用機で、フラッシュシステムを搭載しており、ビットモビルスーツを遠隔操作することができる。

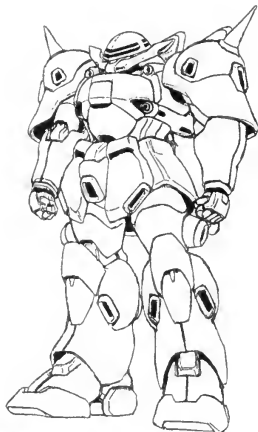
しかもビット機はすべて本体と同型で、高機動性と飛行能力を有する6機の連携は、敵を幻惑する効果も伴って非常な脅威となる。

なお、ガンダムDXに敗れたあと、帰還途中にアベルはシャギア・フロストに射殺され、ラスヴェート自体の行方も不明となってしまう。フロスト兄弟のおかげで戦場に登場したラスヴェートだったが、ニュータイプを憎む彼らの手のうでで踊らされ、闇に葬りさられてしまった。

豊富な武装と高い汎用性がもち味の名機

RMS-006

ジェニス



■もっとも多く使われた モビルスーツ

ガロード・ランの住むセントランジェを、1機のモビルスーツが襲撃してきた。野盗のクロッカが乗る「ジェニス改」である。住民たちは武器を手にして必死で戦うが、マシンガンを放つジェニス改の蹂躞は止まらない。しかし、ガロードは鮮やかな動きでコクピットのクロッカをホールドアップし、機体も奪ってしまうのだった。

ジェニスは、第7次宇宙戦争で

第7次宇宙戦争時に宇宙革命軍が大量投入した量産機。戦後は多くのバルチャーが改造し、使っている。全高16・6m。重量7・7t。



ガンダムXに襲いかかるバルチャーたち。カスタマイズされたジェニスの多さが目立つ。

宇宙革命軍が開発した量産型モビルスーツ。主力兵器として大量に投入され、豊富な武装と高い汎用性もち味となっている。もともとは宇宙用の機体で、のちに陸戦用に開発されたのが「ジェニス改」(G型とも呼ばれる)である。

基本武装は固定武装のシールドバルカンとウェストバルカン、手持ち武器のビームサーベルに100mmマシンガンなど。このほかには、ヒートアックスやジャイアントバズーカ、ビームライフルなど、オプション兵器は多数ある。

第7次宇宙戦争後、ジェニスは宇宙・地球問わず大量に投棄されたままで、多くのバルチャーやモビルスーツ乗りたちがこれをサルベージし、独自にカスタマイズやカラーリングしているため、無数のカスタムバリエーションが存在する。

基本的には陸戦用のジェニス改が多く、劇中の第2話で「ガンダムX」を襲うバルチャー機の中에서도ジェニス改の多さが群を抜いていることから、地球で多く愛用されていることがわかる。

また、反宇宙革命軍ゲリラのサテリコンもジェニス改を使用しており、これは宇宙でも運用できるよ

うに改造されているようだ。

数多く登場するジェニスのなかでも、もつとも活躍が目覚ましいのが、エニル・エルが乗る「ジェニス改エニルカスタム」だろう。これは、自分なりの戦いを続けるエニルが、シーバルチャー（海上バルチャー）のルマーク・カウトから買ったカスタム機。この機体で新地球連邦軍に制圧されたセインズアイランド島を奇襲すると、エニルの卓越した操縦技術でモビルスーツ部隊を次々に撃破してしまう。旧型機ながら、「バリエント」のような最新鋭機を餌食にする勇姿は、ジェニスの底力を感じさせた。

その後、ジェニス改エニルカスタムは、陸上戦艦「フリーデン」と合流。第8宇宙基地防衛戦から第8次宇宙戦争まで、本機とエニルはフリーデンと共闘することとなる。派手な活躍こそガンダムたちに譲っているものの、単機で戦艦「フリーデンⅡ」の護衛を務めるなど、地味に戦力を下支えしている。

そのうえで撃破されることなく最後まで戦い抜いたことは、輝かしい戦歴といえるだろう。



エニルほどの手練パイロットが乗れば、ジェニスでも部隊を壊滅させるほどの活躍ができる。

ジェニスの主なバージョン



ジェニス改ヴェドバオリジナル
スラッシュエッジファロー

女性モビルスーツ乗りのヴェドバ・ホルテの乗るカスタム機。ガンダムXを追いつめるが同業者の餌食となる。



ジェニス改

陸戦用に改修されたジェニスで、G型とも呼ばれている。両肩のトゲが外されるなどしている。



ジェニス改クロックカスベシャル

野盗のクロッカが乗るカスタム機。セントランジェの街に攻めこむが、ガロード・ランの手にかかり奪取される。



ジェニス改エニルカスタム

エニル・エルが乗るカスタム機で、セイインズアイランドを襲撃した機体。頭頂部にサブカメラが搭載されている。

ホバリングによる軽快な攻撃が得意な高機動量産機

RMS-009

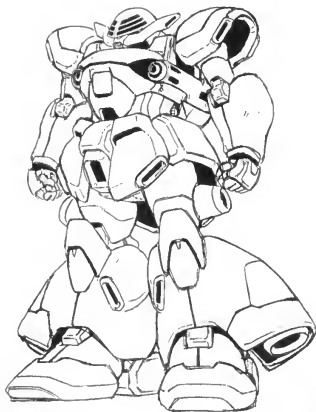
セブテム

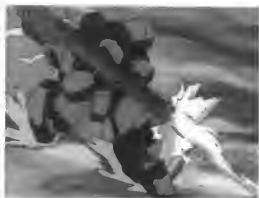
宇宙革命軍が「ジェニス」をベースに開発した量産機。全高16・5m。重量9・0t。主な搭乗者は宇宙革命軍一般兵士、バルチャー。

■前大戦から十五年経っても 宇宙革命軍の現役

陸上戦艦「フリーデン」に潜入するべく、わざとバルチャーに追われる「ガンダムアシユタロン」。これを追っていた部隊が操るモビルスーツこそ「セブテム改」だ。

フリーデンの存在に気づいたセブテム改部隊は二手に分かれてこれを攻撃するが、「ガンダムエアマスタ」と「ガンダムレオパルド」の鮮やかな手並みのまえにあっけなく敗北してしまふ。





ホバリング移動しながらの攻撃は、重モビルスーツながら重さを感じさせない。

「セブテム」は、「ジェニス」をベースに重武装・高機動化を目指して開発された宇宙革命軍の重モビルスーツである。ジェニス同様セブテム改は、本機の陸戦用改修機で防塵機能が強化されている。

頭部の3本のスリットと、大出力バーニアを内蔵した大きな脚部が特徴で、地上ではホバリングのような形で移動することができる。

また、量産機だけあって汎用性も高く、マシガンやジャイアントバズーカなど多くの武装を使いこなせる。

戦後の地球では、セブテム改がバルチャーたちによつて多く運用されていたが、実は宇宙では宇宙革命軍が宇宙用のセブテムを数多く配備。

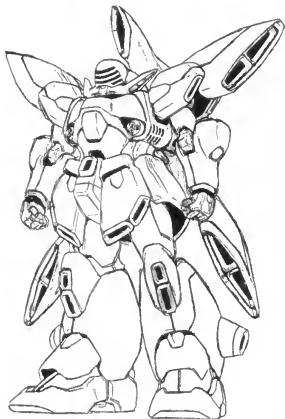
時代的には新型機の「クラウダ」に主役の座を奪われつつあったが、ランスロー・ダーウエルの大隊をはじめとして、第8次宇宙戦争の激戦においてもこのセブテムが大量投入されている。

第7次宇宙戦争後から十五年の時を経て、なお主力として運用されていることから、本機の信頼の高さがうかがい知れる。

高いポテンシャルを誇る宇宙革命軍の傑作機

RMS-014

オクト・エイプ



■脅威のビームライフルで 敵を圧倒する高性能機

昏睡状態に陥ったティファ・ア
ディールを救うために、陸上戦艦
「フリーデン」はバルチャー仲間の
協力を得てアルタネイティヴ社の
ラボ襲撃を決行。その作戦に参加
したグリーツ・ジョーの艦から発
進したモビルスーツが「オクト・
エイプ改」である。

しかし彼は、のちにフリーデン
を襲う「ガンダムヴァサゴ」に
挑み、あえなく倒されている。

高機動の量産機で、量産機初のビームライフル
標準装備。全高17・2m。重量9・3t。主な
搭乗者は宇宙革命軍一般兵士、バルチャー。



強力なビームライフルをもつ。機体数こそ少ないが、新地球連邦軍の猛攻をしのいだ実力は本物。

「オクト・エイブ」は、宇宙革命軍が第7次宇宙戦争時に開発した高機動モビルスーツで、背部の大型バーニアの推進力により、高い機動性と大気圏飛行能力を実現している。

本機も「ジェニス」「セプテム」と同様に、陸戦用に改修された機体がオクト・エイブ改となる。

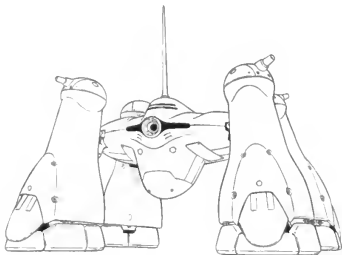
量産機として初めてビームライフルを標準装備しているのが特徴で、新地球連邦軍の第8宇宙基地を占領した宇宙革命軍のスパイたちが搭乗するオクト・エイブは、これを使用。前大戦から十五年経った劇中でも破格の威力を発揮している。ただし、本機は前戦争末期に生産されたため現存数が少ない。そのため、あまり劇中では登場せず印象は薄い。

ただ、第8宇宙基地防衛戦で「バリエント」を一撃で仕留めるビームライフルの威力を見て、敵味方問わず「敵に回したくないね」「これがコロニーの技術力だというのか」といった驚嘆の声があがったことから、ポテンシャルは高いと見ていいだろう。

長距離から爆撃する悪魔の移動砲台

MA-06

グランディーン



第7次宇宙戦争時、宇宙革命軍が使用した巨大モビルアーマー。全高34・0m。重量72・0t。主な搭乗者は不明。

■戦場を襲う長距離の大爆撃

フロスト兄弟の力を借り、ティファ・アディールの奪還に成功したアルタネイティヴ社は、郊外で戦闘をするフロスト兄弟と陸上戦艦「フリーデン」の一团に対し、ある巨大モビルアーマーによる長距離砲撃を開始する。この機体こそ「グランディーン」である。

敵味方関係なく本事件に関わったすべての人間を抹殺するべく、グランディーンは大出力の荷粒子



長距離から強力な荷粒子光弾砲を放つ。拠点攻撃、防衛用としては絶大な効果を発揮したに違いない。

光弾砲を戦場に雨霞あめあられと砲撃していく。

その壮絶な爆撃で両軍を追いつめるが、ここで「ガンダムX」がティファとジャミル・ニートの協力を得て、砲撃ポイントを索敵。グランディーネはサテライトキヤノンたたきこまれ、ラボともども木っ端微塵にされた。

グランディーネはもともと前戦争で宇宙革命軍が地球侵攻用に開発した巨大モビルアーマーで、劇中の機体はそれをアルタネイティヴ社が回収し使用している。メインウェポンとなる荷粒子光弾は破壊力が桁違いで、さらに長距離から発射することができる。ただし、足裏のホバーで移動できるものの機動性は乏しい。なお、そのほかの武器に200m対空ビーム砲があるが、劇中では未使用である。

ちなみに本機は、アルタネイティヴ社とケーブルで接続した形で運用されていた。

これがパイロットがいなかったためののか、エネルギー供給のためなのかは不明だが、モビルアーマーの運用法としてはやや疑問に感じる。本来の運用法は、違った形だったのかもしれない。

雪山を滑走する鋼鉄のスノーボーダー

RMS-007G

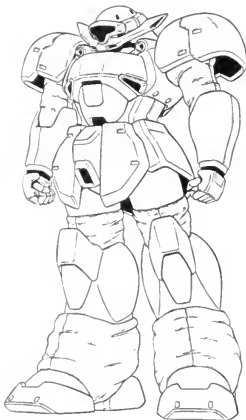
ジュラツグ（ポーラズバー）

旧戦争時、宇宙革命軍が開発した陸戦用量産機。全高16・3m、重量6・9t。主な搭乗者はフォートセバーン自警団員。

■雪上戦に対応した 寒冷地仕様

新たなニュータイプを保護するべく、陸上戦艦「フリーデン」はティファ・アディールの予言に従い、フォートセバーンへと向かっていた。そこへ人工ニュータイプのカリス・ノーティラス率いる自警団が襲いかかる。

その自警団が搭乗し、険しい雪山をまるでスノーボーダーのように滑走して現れた量産型モビルスーツが「ジュラツグ」である。





スレッジを華麗に操るポーラベアー。その姿は、まさにスノーボーダー。

本機は雪上の戦いに不慣れなガンダムタイプたちを攻め立てて、「ガンダムエアマスター」と「ガンダムレオパルド」の足止めに成功。局地戦用の機体らしい活躍を見せつけた。ジュラッグは、前戦争時の宇宙革命軍が「ジェニス改」を陸戦用に再設計した量産機で、フォートセバーン自警団が使用していたジュラッグは、寒冷地仕様の「ポーラベアー」と呼ばれるバリエーション機である。

このポーラベアーは保温用のウォーマーなどで寒冷地用の改造が施されているほか、スノーボード状の移動オブション、スレッジを装備しているのが特徴。

スレッジは雪上だけではなく陸上も移動可能で、またシールドとして使用することもできる。そのほかの武器としては、ビームマシンガンやビームサーベルなどがある。

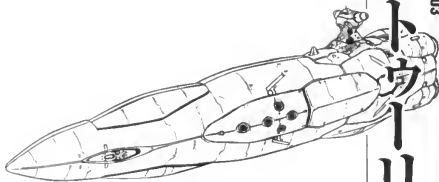
その後、ポーラベアーは、カリスが参加する北米の反政府組織の機体としても活躍した。

なお劇中では、ノーマル状態のジュラッグは登場していない。もともとどんな性能の機体だったのか気になるところだ。

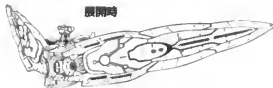
全長600mを超える超巨大モビルアーマー

MAN-003

パトウーリア



展開時



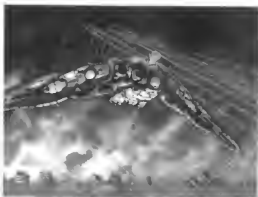
前戦争で投入された巨大ニュータイプ専用機。全高105・0m。全長617m。重量38800・0t。主な搭乗者はカリス・ノーティラス。

■都市の地下に隠された

巨大兵器

ガロード・ランとの戦いに敗れた人工ニュータイプのカリス・ノーティラスをとり返したフォートセバーン市長ノモア・ロングは、彼を生体部品として、ニュータイプ専用巨大モビルアーマー「パトウーリア」を起動させる。

この戦艦と思しき全長600mを超える機動兵器は、地下から街を破壊しながら浮上し、機体を左右に展開させると、ビーム砲でフ



フォートセバーン市を蹂躞するパトゥーリア。モビルアーマーとしてはガンダム史上最大といえる。

オートセバーンを次々に破壊した。それもそのはず、ノモアは元宇宙革命軍のドーラット博士で、前戦争で失敗した作戦の怨みを本機で晴らそうとしたのだ。

だが、陸上戦艦「フリーデン」のガンダムタイプたちは必死に抵抗戦を続け、「ガンダムX」がパトゥーリアの内部に進入して強引にカリスを救い出す。生体部品を失い、操縦者のドーラット博士が自殺したため、パトゥーリアは沈黙してしまう。

パトゥーリアは、前戦争で宇宙革命軍が開発したニュータイプ専用のモビルアーマーで、「ベルティゴ」とともにニュータイプ部隊で

地球攻撃をするライラック作戦に投入された。

しかし作戦は失敗し、ドーラット博士は機体の落着点にフォートセバーン市を建設し機体を修復。再起の日をうかがっていた。

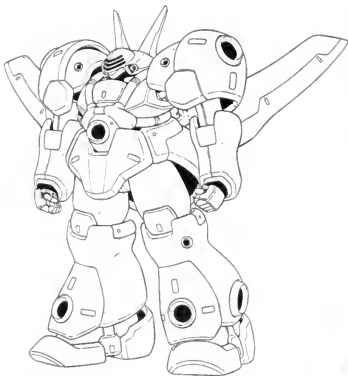
本機は有線ビーム砲を30門備えており、猛烈なオールレンジ攻撃を行うことができる。そのほか4門の荷粒子砲などがある。

なお、本機の617mという全長は、全ガンダムシリーズのなかでも最大級。そんなパトゥーリアが街を焼く姿は、まさに地獄絵図だ。

クラウダ

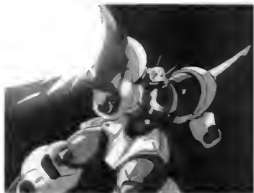
宇宙革命軍

宇宙革命軍が前戦争後に開発した初量産機。全高18・0m。重量8・4t。主な搭乗者はランスロー・ダーウェル、宇宙革命軍一般兵士。



■ガンダムタイプにも 通用する実力機

宇宙革命軍のシャトルで第7番コロニーへ到着したガロード・ランは首尾よく脱出し、「ガンダムDX」に乗って宇宙へ逃げ出す。そこへ革命軍のエース、ランスロー・ダーウェル率いる部隊が襲いかかる。このときランスローが乗っていた機体が「クラウダ」である。最新鋭モデルだけあって、クラウダは宇宙戦に不慣れなガンダムDXを苦戦させるが、支援戦闘



ランスローの駆るクラウドは、ガンダムDXやガンダムヴァサーゴ相手に引けをとらぬ戦いを見せた。

機「Gファルコン」の登場により、その捕獲にはいたらなかった。

クラウドは、宇宙革命軍が第7次宇宙戦争から十五年を経て、新たに開発した最新の量産機である。軍備再建された革命軍の主力兵器として、第8次宇宙戦争では多数が配備された。ビームの直撃に耐えられる厚い装甲、大型スラスターと下腹部の大型バーニアによる高い機動性が本機のもち味である。

翼状のビームカッターは、戦艦の装甲をも斬り裂くほど強力。対艦戦闘では高い推進力を活かし、すれ違いざまに敵戦艦を斬りつけるなどして猛威を奮っていた。

そのほかの武器としてはバルカン砲、ビームライフル、ビームサーベルなどがある。

なお、ランスローの乗るクラウドは指揮官機で、頭部に複合通信アンテナがあり、カラーリングもクリーム色になっている。劇中での活躍ぶりからするとランスロー機は特殊なように見えるが、実は一般機と機体性能は変わらない。逆にいえば、クラウドは改造せずともパイロットの腕次第でガンダムタイプと対等に戦える実力をもっていたといえる。

ドライなまでに強力で兵器感を漂わせるガンダム

さまざまなガンダムシリーズ作品のなかでも、本作に登場するモビルスーツたちは、大きくふたつの系統にハッキリと分かれる。汎用性と拡張性が高い量産機と、ハイグレードなガンダムタイプの2系統だ。

まず、「ドートレス」や「ジェニス」に代表される量産機は、それぞれをベースにしてさまざまな機体が開発されているため、後継機でも極端にデザインの印象が変わることはない。宇宙革命軍のモビルスーツにしても、実は頭部のスリットがジェニスなら2本、「セブテム」なら3本、「オクト・エイブ」なら4本という違いがあるものの、機体自体そのものの印象はあまり変わらない。あえて没個性を打ち出しているともいえる。

逆にハイグレードタイプとなるガンダムたちは、かなり機能が特化しているので戦い方といい、デザインといい、印象がかなり際立っている。過剰なまでに砲撃武器を内蔵した「レオバルド」や、戦闘機形態への変形と高い機動性を保有した「エアマスター」。そしてコロニーをも破壊する脅威のサテライトキャノンを装備した「ガンダムX」。どれもがハッキリとした役割と機能を示しており、劇中ではどれも機し

が登場しないため、ガンダムの特異性は際立っている。

ここまで「ガンダムという存在」に特化性を求めた作品は、『ガンダムW』と本作だけだろう。特に本作は、ガンダムシリーズに関するメタフィクションを多数盛りこんだ作品だけに、戦争の悲劇を引き起こしたガンダムの強さをドライなまでに描写していることには大きな意味合いがある。というのも、本作の主人公は、ニュータイプでも英雄でもない、ガロード・ランという平凡な少年だからだ。

戦争を挟んだ世代間の葛藤などを通して、ガロードは成長していく。その成長の過程で、ガロードはニュータイプになったわけでもなく、兵器による過ちを繰り返すこともなかった。特別な力がなくとも、人類は希望ある未来へと向かえることを彼自身の生き方が証明している。戦後生まれの世代が勝ちとった新たな平和には、ガンダムという存在も、ニュータイプという概念も必要ない。

人は本来、それだけたくましい生きものなんだ。そう主張するように、ガンダムはあえて強力すぎる「兵器」となっている。

これが二十一世紀に入っても核兵器が根絶せず、世界平和が遠い道のみである現実への皮肉ととらえるのか。はたまた、いつまでもガンダムという作品に縛られているファンたちに対する何かのメッセージなのか。とらえ方は人それぞれだが、ドライに強さを極めたガンダムを普通の少年が駆ったことには理由がある。

それを踏まえて本作のモビルスーツの活躍ぶりを見ると面白いだろう。

第5章

ターンエー

▽
ガンダム

MS

MSX-000

地球に住む人々が、月で暮らす人類の存在を忘れて数百年。ムーンレイスの女王ディアナ・ソレルは、地球の北アメリカ大陸を目標とする地球帰還作戦を発動した。

しかし、北アメリカ大陸の人々は月から降りてきたムーンレイスを侵略者とみなし、月のディアナ・カウンターと地球のミリシャのあいだで、武力衝突が起きてしまうのだった。

この戦乱において、ディアナ・カウンターやギンガナム艦隊は、月のマウンテン・サイクルで発掘したモビルスーツのほか、独自に開発した「スモー」や「マヒロー」を投入。

一方、地球文明は二十世紀初頭レベルだったが、ミリシャが「Vガンダム」やマウンテン・サイクルで発掘した「カプル」や「ホルジャーノン」を駆使して対抗した。

■ ムーンレイス

月に住んでいる人類の総称。黒歴史における最終戦争ののち、荒廃した地球を脱出して月へ移り住んだ人々の末裔。

■ ディアナ・カウンター

月の女王であるディアナ・ソレルが、地球帰還作戦を実施するにあたって編成した軍隊。月にはギンガナム艦隊があったが、彼らが「侵略」でなければ参加しないと主張したため新たに編成された。

■ ミリシャ

月からの侵略者に備えて組織された、地球側の市民軍。所属する領域によって、イングレッサ・ミリシャやルジャーナ・ミリシャというように、地域の名を冠して個別に呼ばれることもある。

■ ギンガナム艦隊

月面都市ゲンガナムを守護する、ギム・ギンガナム私設軌道艦隊。いずれ訪れるであろう、地球人類との衝突のときを想定して、2500年ものあいだひたすら演習を繰り返してきた。

■ マウンテン・サイクル

かつての最終戦争の際、「月光蝶」によって形成された山岳地形。ビシニティのアーク山もこの一部で、月にも同様の地形が存在する。モビルスーツをはじめ、黒歴史時代の遺産が多数眠っている。

■ 黒歴史

かつて存在した宇宙文明時代に、地球圏で数千年ともいわれる間繰り返された宇宙戦争の歴史。

最終戦争で旧文明に終焉をもたらしたホワイトドール

System-V99(WD-M01)

Δガンダム

ミリシャ

アーク山の石像から出現したヒゲをもつ白いモビルスーツ。全高20・0m、重量28・6t。主な搭乗者はロラン・セアック。

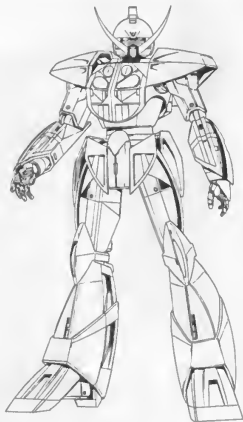
■石像から現れた

高性能モビルスーツ

環境適応反応テストのため、先行調査員として地球へ降下したムーンレイスのロラン・セアック。

地球の生活に馴染み先行調査員としての期間も終わりを迎えようというころ、ロランは鉾山町ビシニティ北部のアーク山で開かれる、成人の儀式に参加していた。

ところがその晩、月のディアナ・カウンターが地球のノックス郊外に降下を開始。本隊に先行し





石像の中に眠っていた▼ガンダムは、ウオドムの攻撃に反応して迎撃行動を開始した。

て降下した大型モビルスーツ「ウオドム」が、迎撃に現れたミリシャに対し対艦ビームを発射した。すると、アーク山に祭られていたホワイトドールの石像が崩れはじめ、中からヒゲのある白いモビルスーツ「▼ガンダム」が現れた。

石像の前にいたロランは、開いていたコクピットに搭乗するが、▼ガンダムは勝手に行動を開始。ノックスのウオドムに向けてビームライフルを発射し、これらを一時退却させた。

さて、地球の人々にとって、降下してきたモビルスーツや宇宙戦艦は想像を絶するものであり、ミリシャの装備ではとても太刀打ちできない。そこへ▼ガンダムが現れたのである。

イングレッサの領主グエン・ラインフォードは、この機体を現段階でディアナ・カウンターに対抗する唯一の戦力と認識。ロランは、グエンからパイロットを務めるよう命じられる。

ところで正体は隠しているものの、ロランはムーンスレイスである。当然モビルスーツを知っており、その分地球の人間より早く操縦に慣れることができ

た。一方ディアナ・カウンターは市民による軍隊で、実戦経験はほぼ皆無。つまり、ロランとディアナ・カウンターのパイロットの差は、モビルスーツの操縦訓練時間程度だった。

こうした事情も幸いし、ホワイトドール（Vガンダム）はロランをパイロットとして、地球側の戦力として活躍していくのである。

■はるか昔の最終戦争で旧文明に終焉をもたらす

Vガンダムは、地球の正暦よりはるか昔につくられたモビルスーツである。詳細は不明だが、もともとは外宇宙からの侵略者に対抗するため開発された機体だったようで、一説によれば、地球圏の外から流れてきた「ターンX」を回収し、解析したデータをもとに開発されたという。

実際、ギム・ギンガナムのターンXと戦った際には、共鳴現象を起こして月光蝶システムが発動しており、少なくとも何らかの関係があるのは確かだろうだ。

Vガンダムは、内部から発生するIフィールドを表面に張りめぐらせ、このビームを制御することで機体を動かすIフィールドビーム駆動（IFBD）によって稼働する。これにより、動力炉やジェネレータに多くの容積を必要としないため、従来の機体より機体内部の空間に余裕が生まれた。本機の胸部が多目的武器庫（マル

チパーバスサイロ」となっているのは、このIFBDの恩恵といえる。

装甲材は、多数のナノマシンで構成されるナノスキンを使用しており、高い自己修復能力を備えている。長期間かければ失われたパーツさえ再生するほどで、劇中では破損したヒゲの部分がナノマシンで再生されていた。

推進器は脚部裏面に集中しており、地球の重力下でも飛行が可能となっている。しかし、当初はスラスターパーンにナノスキンの残骸が詰まっていたため、飛行はできなかった。

固定武装は、両肩にビームサーベルを搭載しているほか、胸部武器庫の最下段がビームキャノンになっている。

右手にビームライフル、左腕にはシールドを装備するが、機体といっしょに埋まっていたことから、ビームライフルは標準装備なのだろう。

また、ビシニティの地下に武器庫のようなものがあり、そこからもち出したハンマーも使用している。駆動方式からわかるように、防御にフィールドバリアが使用可能だが、黒歴史時代のものとは異なる。



本機のフィールドバリアは、強化されたウオドムの対艦ビームすら防ぐことができた。

り、実弾兵器も防いでしまう非常に強力なものだった。ウォドムの対艦ビームやメガ粒子砲などは、このバリアで防ぐしかないが、通常のビームライフル程度のものなら、ビームサーベルを装備した手を高速回転することで防ぐこともできる。

さらに、万一の場合は脱出もできるようになっており、コクピット部分がコア・ファイターとして離脱可能になっている。

ギム・ギンガナムに奪われた際は、メリーベル・ガジェットに運用されており、不完全ながらも月光蝶システムが作動していた。

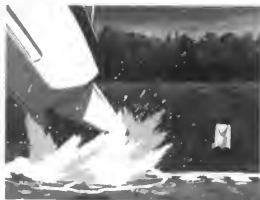
この月光蝶システムは、大量のナノマシンをイーフィールドビームに乗せて広範囲に撒き散らすというもの。

黒歴史の記録によれば、Vガンダムは過去に発生した最終戦争において月光蝶システムを発動させ、地球文明の大半を砂に変えて滅ぼしたのち自身も埋没したとあった。月光蝶は、いわば最終兵器といえる装備なのだろう。

■パイロットの意思で黒歴史の再来を防ぐ

Vガンダムは、黒歴史を知る月のアグリッパ・メンテナーやコレン・ナンダーからは恐れられる存在だった。

月の宮殿に保存されていたデータでは、宇宙世紀時代に起きた「一年戦争」をか



ヲガンダムの手が即席の洗濯機に。“機械”の原点である道具としての使い道だ。

わきりに、連綿と続いた数千年とも一万年ともいわれる戦いの歴史を「最終戦争」と位置づけている。

そして、この最終戦争において月光蝶システムを発動させ、旧時代の地球文明を滅ぼすことで終焉をもたらしたのが、ヲガンダムというわけなのだ。

よって、黒歴史を知ったアグリッパが、終焉をもたらす存在としてヲガンダムを恐れたり、ガンダムは破壊しなければならぬとして執着したコレンの立場もわからないではない。

しかし、世界を滅ぼすほどの力をもったモビルスーツといえども、所詮はただの兵器であり、あくまで人が生み出した道具にすぎない。

実際、ヲガンダムのパイロットである罗兰は、劇中で兵器であるヲガンダムを家畜の輸送や洗濯機の代用として使い、「道具は使う人次第でどうにもなる」という自説を証明した。

ヲガンダムは、パイロットが罗兰だったからこそ最後まで破壊神にならず、「ホワイトドール」でいられたのかもしれない。

宇宙にも進出した水陸両用の人気者

AMX-109

カプル



水中航行形態

ミリシヤ

イングレッサのマウンテン・サイクルで発掘された機体。全高13・0m。重量不明。主な搭乗者はソシエ・ハイム、メシエー・クン。

■イングレッサ・ミリシヤの主力機

ホワイトドールの石像から「Vガンダム」が出現したのち、山師のシド・ムンザはイングレッサ・ミリシヤの協力を得てマウンテン・サイクルを発掘。ボールのような形をしたモビルスーツを大量に発見した。

発見された機体はすぐに掘り起こされ、機体についていたプレートから「カプル」と名づけられる。ミリシヤは、カプルを主戦力に



カブルが本来の水陸両用モビルスーツとして活動する場面は、物語の後半まで見られなかった。

すべく戦闘機乗りをパイロットとして召集すると、カブルの操縦を最初にマスターしたメシエー・クンを中心に訓練を開始。この関係で、メシエーの親友だったソシエ・ハイムも、早い時期からカブルに搭乗することになる。

しかし、モビルスーツの存在すら知らなかった人々にとつては、カブルの操縦をするのが精一杯という状態で、大活躍というわけにはいかなかった。

もっとも、ディアナ・カウンターの主力機「ウォードム」の火器が強力だったことに加え、カブルの武器が依然として火薬を使ったものだったことも大きな戦果があげられなかった原因のひとつだろう。とはいえ、イングレッサ領で大量に見えられたモビルスーツであることから、マウンテン・サイクルの発掘作業や物資輸送のサポートなど、作業機械としても使用されていた。

ソシエとメシエーは、こののちもずっとカブルに乗り続けており、ミリシャが発掘した宇宙戦艦「ウイルゲム」が宇宙にあがった際にも同行。なんと手作業による改修だけで、宇宙空間でも活動している。数多いガンダム作品でも、水陸両用機が宇宙にま

で出たのは、このカプルだけではないだろうか。

■随所で愛嬌のある動きを見せる

ミリシャの飛行機パイロットたちは、多少の訓練をしただけでカプルを動かせるようになっていた。カプルがイングレッサ・ミリシャの主力機となりえたのは、操縦が簡単だったということも大きな要因のひとつだろう。

本来ならば、武装としてレーザービームやソニックブラストを搭載しているのだが、使用方法がわからなかったのか、劇中では一切使用されていない。

その代わり、腕にハンドガンを装着したり、胸部にロケット弾を搭載するなど独自の武装で戦っていた。

また、カプルは水陸両用機であるため、水中航行形態への変形機構ももっている。しかし、当初からカプルに乗っていたソシエでさえ、南のマニューピチュへ向かう際に敵の攻撃で偶然海に落ちるまで、水陸両用だとは気づかなかった。

よって、水中での運用を前提とした作戦行動などは行われておらず、変形機構についても「輸送時に小さくなるので便利」程度の認識だったと思われる。

しかし、劇中の地球の文明レベルでは、潜水艦のようなものは存在せず、水に入れる機械といえは水上艦艇程度。機械は「水に入れば壊れてしまう」というのが劇

中当時の常識であることを踏まえれば、機械人形が水に入れるなどと考えerわけもなく、気づかなかつたのはむしろ当然といえるだろう。

なお、劇中に登場したカブルの例外として、コレン独自のカブルがある。機体を赤く塗装してツノをつけていたほか、右手はほかの機体のものをロケットで飛ばせるようにしており、さらにミンチドリルを装備していた。

最後の決戦において、コレンはカブルで「Vガンダム」と「ターンX」が戦う戦場へと向かい、なんとメリーベル・ガジェットの「バンデット」を撃破していた。

もともと、こうした戦果をあげられたのは、機体性能というより、戦闘能力の高いコレンだったからこそなのかもしれない。

劇中を通じて登場したカブルだが、丸い形状からか敵に蹴られたり転んだりして、コロコロと転がる場面が多い。

戦闘場面でも、ハンマーを振り回して見せたり、バズーカで殴りかかったりと、どこか愛嬌のある動きが多くマスコットの存在だったといえる。



前に出たがるソシエのカブルは、たびたびVガンダムに制止される。コントのようで面白い。

黒歴史に記された「ザク」に酷似した万能機

MS-06

ボルジャーノン

ミリシャ

ルジャーナ・ミリシャのスエサイド部隊に配属されているモビルスーツ。全高17・5m。重量不明。主な搭乗者はジョン・エイムズ。

■実弾兵器を多数装備

イングレツサの首都ノックスは、コレン・ナンダー軍曹の「イーゲル」によって崩壊し、領主グエン・ラインフォードはノックスを放棄した。

これによりイングレツサ・ミリシャは、ルジャーナ領へと移動したが、そこで「ボルジャーノン」を駆るルジャーナのスエサイド部隊に出会った。

ボルジャーノンは、ルジャーナ





同じく旧式のキャノンイルフトや小型のウァッド
が相手の場合は十分対抗できていた。

領のマウンテン・サイクルから発掘されたモビルスーツである。

黒歴史時代の初頭に見られる「ザク」と酷似した外見だが、コクピットハッチの開閉方式や内部の様子はだいぶ異なっている。

これは、ナノマシンによって変化がもたらされたか、もしくは埋まっていたものが後世のレプリカであるためといわれる。

しかし、ルジャーナの主力機となるほど数が発見されていることを考えると、後者の説のほうが説得力はあるだろう。

武装は、ボルジャーノン・マシンガンやボルジャーノン・バズーカ、投擲したのち分裂して爆発するクラッカーなど、人が使う武器を大きくしたような実弾兵器を使用している。

その面では、銃器や大砲、爆弾にいたるまで、すべての武器に火薬を使用しているこの時代に、ふさわしい機体といえるだろう。

ただ、ミリシャの宇宙戦艦「ウイルゲム」で宇宙にも進出したが、月の軍隊と戦うには火力不足で大きな戦果はあげられなかった。

作戦の囃子として大往生した隊長機

MS-05

ギヤバン専用ボルジャーノン

ミリシャ

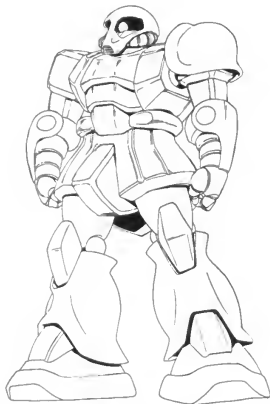
ルジャーナ・ミリシャのスエサイド部隊に配属されている隊長専用の機体。全高17・5m。重量不明。主な搭乗者はギヤバン・グーニー。

■1機だけ違う形から ギヤバン専用機となる

イングレツサからルジャーナに移ったイングレツサ・ミリシャは、ルジャーナの機械化部隊であるスエサイド部隊と出会う。

スエサイド部隊は、ルジャーナ領のマウンテン・サイクルで発見された「ボルジャーノン」を主力としていたが、1機だけ形状が異なる機体があった。

この機体こそが、隊長のギヤバン・グーニーが搭乗する「ギヤバ





〴ガンダムとの力比べは、ロランがオートにしていたこともあり、意外にいい勝負となった。

ン専用ボルジャーノン」である。ギャバンのボルジャーノンは、黒歴史時代の「旧ザク」に酷似しているが、動力パイプがむき出しになっているなど、異なる部分がいくつかあった。劇中ではボルジャーノン・マシガンしか使っていなかったが、マニピュレータ（機械の手）が同じである以上、ボルジャーノン・バズーカやクラッカ―も使用できるものと思われる。

ほかのボルジャーノンとは異なり、本機は右肩にシールドを装備しておらず、左肩のアーマーにもスパイクが付いていない。また、モノアイの正面に構造物があり、視界も悪そうであることから、一般のボルジャーノンのほうが性能は高いと思われる。

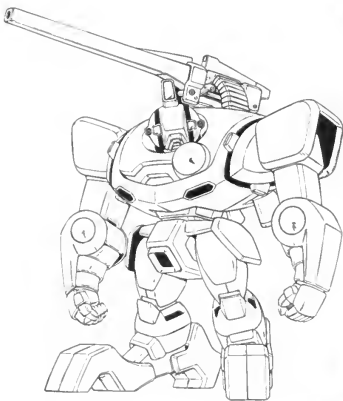
つまり、ギャバンが隊長機に選んだのは、1機だけ見た目が違うからというだけなのかもしれない。のちに、「〴ガンダム」に力比べを挑んで頭部が変形したため、ギャバンは通常のボルジャーノンに乗り換えた。そして、ディアナ・カウンターの旗艦「ソレイユ」襲撃の際に砲として使用され、敵の攻撃によって破壊された。

ミリシヤが独自に改修した初のモビルスーツ

NRS-P701R

ゴドウィン

ミリシヤ



回収した「ゴッゾー」を基に、ミリシヤが独自に改造した機体。全高15・0 m弱、重量5・9 t。主な搭乗者はブルーノ、ヤコップ。

■Vガンダムに ビームライフルを届ける

テテス・ハレにそそのかされた
ディアナ・カウンターのブルーノ
とヤコップは、「ゴッゾー」でディ
アナ・ソレルの暗殺をはかる。

しかし、ハリー・オードの「ス
モー」やロラン・セアツクの「V
ガンダム」に阻まれて失敗に終わ
る。

ヤコップとブルーノは、Vガン
ダムを奪取しようと考え、ミリシ
ヤの陸戦艇「ギャロップ」に潜り



張りばてガンダムをヒートホークで斬るコレン。“ガンダムを倒した”と悪夢から解放される。

こむが、今度はそのままミリシヤの一員となつてしまった。

こののちギャロップで搬入作業を行うヲガンダムのもとへブルーノがビームライフルを運んでくるが、このとき彼が乗っていた機体が「ゴドウィン」である。

ゴドウィンは、以前ふたりが破棄したゴッゾーをミリシヤが回収し、「ボルジャーノン」などほかの機体のパーツを流用して改造した機体。恐らく、コレン・ナンダーと地下回廊を訪れた際に破棄した機体だと思われる。

特徴だった背面のレールキャノンが機関砲に換装されたほか、腕部がボルジャーノンのものになった。火力は落ちているが、脚部に大きなクローが取り付けられているほか、ヒートホークも装備しており接近戦仕様になっている。

リサイクルで生まれたゴドウィンだが、ブルーノとヤコップがオペレーターになってしまった関係で、劇中での登場は極わずかだった。

コレン・ナンダーが張りばてガンダムの破壊に使用したのは、ミリシヤのほかの部隊で使っていたようだ。

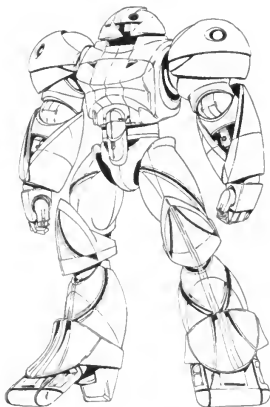
月の女王を守護する頼もしき親衛隊機

MRG-F20

スモーク

ディアナ・
カウンター

ディアナ・ソレルの親衛隊が使用するモビルスーツ。全高20・3m、重量34・2t。主な搭乗者はハリー・オード、ボウ・エイジ。



■Vガンダムに勝利した機体

ディアナ・カウンターの地球帰還作戦が開始され、第1次帰還船がイングレッサの首都ノックスの郊外に降下した。

しかし、先行して降下した大型モビルスーツ「ウォドム」に対し、ミリシャの航空機が攻撃をかけたため、早くもノックスの街に大きな被害が出てしまう。

不穏な空気が漂うなか、第2次帰還船も降下を開始。そして、の



ギングスレーの谷で遭遇したヲガンダムとの対戦は、ハリーのスモ―が圧勝した。

ちに降下するディアナ・カウンターの旗艦「ソレイユ」の先発隊として、新たなモビルスーツ「スモ―」が降り立った。

ソレイユが到着すると、月の女王ディアナ・ソレルはノックスのポストニア城に入城することになる。ところが、ここでミリシャはディアナを拉致しようと目論み、独断で作戦行動を開始する。このため地球に到着早々、スモ―は護衛の任務を果たすことになる。

スモ―は、ハリー・オード率いるディアナの親衛隊が使用する機体だ。よって、主な任務はディアナの身辺警護であり、「ウォドム」や「ウァッド」のように、部隊として前線に出ることはほとんどなかった。

しかし、ハリーは親衛隊の指揮系統が独立しているため、よく単独で出撃している。「ヲガンダム」の搜索に出た際には、ルジャーナ・ミリシャのセサイド部隊と遭遇し、「ボルジャーノン」初の交戦相手にもなった。

このときのヲガンダムとの対戦では、ロランが操

縦に慣れていたなかったこともあり、性能的に劣るスモーク（ゴールドタイプ）でヴァガンダムを圧倒。ヴァガンダムに勝利した数少ない機体のひとつとなっている。

こののちハリーのスモークは、ディアナやディアナと入れ替わった地球の民間人キエル・ハイムを守るために各地で奮戦。護衛の任務をよく果たしていた。

また、一般隊員のスモーク（シルバータイプ）はディアナ・カウンターでフィル・アツカマンが叛乱を起こすと、ポウ・エイジによって運用され、たびたびヴァガンダムとも戦った。しかし、軌道艦隊司令のギム・ギンガナムが地球へ降下したのは、ロランのヴァガンダムと共闘しており、頼れる味方となっている。

■ヴァガンダムとの共通点が多い高性能機

親衛隊が使用するスモークは、隊長用のゴールドタイプと一般隊員用のシルバータイプがあるが、性能的にあまり違いはない。

月で20番目に登録された戦闘モビルスーツで、ヴァガンダムと同じく内部から発生するIフィールドを表面に張りめぐらせ、このビームを制御することで機体を動かすIフィールドビーム駆動（IFBD）によって稼働する。

また、搭載している螺旋位相型超震動ゲージ場縮退炉（HPHGC）は、ほかのモビルスーツのIFBDに干渉して機能を停止させるIフィールド・リストラク

シヨン効果（IFR）を発生する。

スモーが腕に装着しているIFフィールド・ジェネレーターは、このIFRの機能を利用して目標の火器や誘導兵器を無力化できるほか、IFBDで動く機体ならば機体のコントロールを奪うこともできる。ただし、これらの効果は同時代に開発された機体にはのみ発揮されるようだ。

また、脚部には空間に斥力^{レプリーシブ}を発生させる装置を備えており、スラスターなどを使用しなくても高速移動が可能となっている。

武装は、攻守ともに使用できるIFフィールド・ジェネレーターに加え、ビームガンと白兵戦用のヒートファンを装備。

IFBDで駆動するためIFフィールドバリアも備えている。

なお、Vガンダムがギンガナム隊に鹵獲された際は、スモーのкокピットを取り付けて運用した。

IFBD駆動であることや、ほぼ同じサイズの機体であることを考えると、Vガンダムの技術から生まれた機体だったのかもしれない。



スカートと呼ばれる空中機動ユニットを取り付けることで、地球の重力下でも飛行が可能となる。

フラット

ディアナ・
カウンター

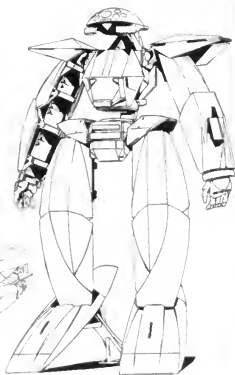
地球へ先行調査員を派遣する際に使用された機体。全高20・6m、重量22・3t。主な搭乗者はジョセフ・ヨット、ムロン・ムロン。

■物語の最初と最後を飾った機体

月面都市に居住しているムーンレイスは、地球帰還作戦の発動をまえに環境適応テストを実施。

月の下層市民であるロラン・セアックは、正暦二三四三年、キース・レジェ、フラン・ドールの2名とともに、モビルスーツ「フラット」で地球へ降下した。

黒歴史期に地球で使われていたものを改装した機体で、劇中で描かれる時代において、もっとも新



降下形態



ヒートエッジによる防御壁のまえに、ミリシャのボルジャーノンはなすすべがなかった。

しい種類の機体である。

フラット最大の特徴は、腕部と脚部の装甲に装備しているヒートエッジ。これは、高周波で超音速の振動をつくり出すというもので、武器として使用できるだけでなく、機体を守る障壁をつくり実弾兵器を弾いたり、地面を掘ることもできる。

先行調査員を派遣する機体となったのも、機体の隠蔽が容易だったためだろう。ロランたちが使用した機体は武装しておらず、キースがミリシャに売却した際、

爆発物を手で投げていた。のちに高射砲を手持ち用に改造して装備していたが、戦果はいまいちだったようである。

フラットはるか昔から帰化していたムーンレイスの末裔、レット隊も使用していたが、こちらは折り畳んで携帯できるボックスビームライフルや、ボックスミサイルランチャーを使用していた。

ちなみに、最終話でギム・ギンガナムとの決戦を終えたロランを迎えたのも、ソシエ・ハイムが操縦するフラットだった。本作は、フラットにはじまりフラットに終わったのである。

大火力により都市制圧で活躍した巨大な怪物

JMA-0530(MODEL U)

ウオドム

ディアナ・
カウンター

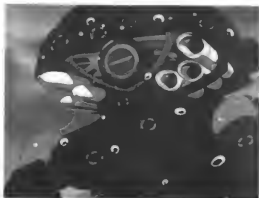
ディアナ・カウンターの主力を担う、対艦用大型機。全高40・0m。重量不明。主な搭乗者はボウ・エイジ、フィル・アッカマン。

■対艦用に開発された 大型モビルスーツ

ディアナ・カウンターの地球帰還作戦に先立ち、先行調査員として地球へ降下していたロラン・セアックは、鉱山を経営するハイム家の世話になり、成人の儀式に参加することになった。

しかし、成人の儀式がはじまろうとしたまさにそのとき、ディアナ・カウンターの帰還作戦が開始され、大型モビルスーツ「ウオドム」が降下してくる。





対艦用に開発されたウオドムの装甲には、ミリシャの攻撃はまったく通用しなかった。

降下したウオドムは、迎撃に出てきたミリシャの航空部隊を圧倒。ディアナ・カウンターの戦力を、地球側に見せつける。

しかし、ウオドムが発射した対艦用ビームによって、石像の中に眠っていた「Vガンダム」が目覚めてしまい、のちにこれと戦うこととなる。

月のマウンテン・サイクルで発掘されたウオドムは、宇宙空間における対艦用に開発された大型モビルスーツだ。しかし、40mという機体の大きさが見たものに与える心理効果も狙い、地球降下作戦に投入された。

武装には、頭部のウェポンエリア左右に3連装大型ミサイルを搭載しているほか、中央に対艦用ビームを装備している。

Vガンダムと同じく、装甲はナノスキンで覆われており、ミリシャの火器は通じなかった。

その一方で対艦用のウオドムはモビルスーツ戦に向いているとはいいがたく、Vガンダムには煮え湯を飲まされていた。

とはいえ、ウオドムの大火力は都市制圧に最適で、降下作戦にあたって大いに貢献したのだった。

イーゲル

ディアナ・
カウンター

月のマウンテン・サイクルで発掘され、地球へもちこまれた。全高21・0m。重量不明。主な搭乗者はコレン・ナンダー。

■月で発掘された カスタマイズ機

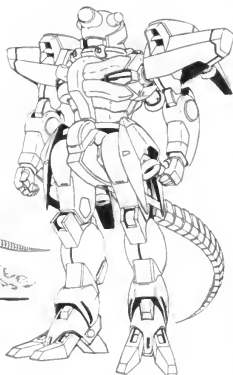
ディアナ・カウンターに続き、ムーンレイスの帰還民も次第に増えていった。そんななか、補給物資とともに恩赦で開放されたコレン・ナンダーが到着。

このときコレンが搭乗していたのが「イーゲル」である。

イーゲルは、月のマウンテン・サイクルで発掘された旧文明のモビルスーツで、コレンが独自にカスタマイズした機体である。



高速歩行形態





尾を目標に巻きつけて使うなど、動物のような動きをするモビルスーツだった。

頭部から尾まで続くスパイン（背骨）のようなものを持ち、伸縮できる首と尾を真っ直ぐに伸ばして肉食恐竜のような姿勢で、高速移動をする。

イーグルと同様のスパイン構造は、小型モビルスーツ「ウァッド」にも見られる。しかし、こちらは月面の作業機械「ペロナ」を参考に開発されたという。

イーグルが旧文明のものであることを考えると、ペロナのもとになった機体なのかもしれない。

イーグルの開発にあたっては、格闘戦を重視したのか頭部が打突武器になっている。頭部は首の伸縮によって目標を殴打するほか、速度を生かしての体当たりで攻撃することも可能だ。

なお、こうした事情からカメラアイなどのセンサー類は、首の付け根に搭載されている。

コレンは独自に削岩用重機のミンチドリルを装備していたが、イーグルの標準装備ではない。ノックスの街を襲ったときのビームガンも借り物だろう。

ヲガンダムとは、数度に渡って戦ったイーグルだが、最後は地下のマグマに落ちてしまった。

宇宙用に開発された長距離支援用モビルスーツ

MRS-P701

ゴッゾー

ミリシヤ

「イーゲル」とともに地球にやってきた長距離支援用モビルスーツ。全高15・0 m弱。重量34・2 t。主な搭乗者はブルーノ、ヤコップ。

■イーゲルとの連携で活躍

地球へ降下したディアナ・カウンターとミリシヤのあいだで休戦協定が結ばれ、イングレッサにつかの間の静けさが訪れた。

ところが、月からディアナ・カウンターへ送られた補給物資に交じって、軍の問題児コレン・ナンダーと搭乗機の「イーゲル」が到着。輸送船からは、コレンの部下であるブルーノとヤコップ操る「ゴッゾー」も降り立った。





バランスが悪いわりに機敏に動いた。ヤコップたちの操縦技術が優れていたのかもしれない。

ゴッゾーは、ディアナ・カウンターが保有モビルスーツのなかで、最古のものとなる。コレン・ナンダーが出撃する際、フィル・アッカマンが「ゴッゾー2機との行動になるがよいか？」と念を押していたほか、ディアナ・カウンターの動きを採っていたテレス・ハレからも「アナクロな機体」と評されていた。かなり古い機体ということ、評価は低かったようである。

ゴッゾーは長距離支援を目的とした機体で、武装は右背面に装着されたレールガンと、腕部に装備しているミサイルポッド。

劇中では、格闘機の「イーゲル」に随行することが多かったが、支援機であるゴッゾーにとって組み合わせは理想的といえた。

ただし、ゴッゾーは本来宇宙用に開発された機体であるため、上半身に比べて下半身が小さく、地球の重力下では安定に欠ける。このため、背面に装着したレールガンは主武装でありながら、正確な射撃をするには不向きとなってしまった。

のちに、ヤコップとブルーノがディアナ・ソレル暗殺を試みるが、失敗して以後は登場していない。

ウィル・ゲイムの夢とともに散った哀機

SPA-51

キャノン・イルフート

ディアナ・
カウンター

ウィル・ゲイムがキングスレーの谷から掘り出したモビルスーツ。全高15・0m弱。重量不明。主な搭乗者はウィル・ゲイム。

■民間人が発掘した 中距離支援用機

マウンテン・サイクルからキングスレーの谷へ逃れたロラン・セアックは、ひとりで宇宙船を発掘するウィル・ゲイムと出会う。

ウィルは、ディアナ・ソレルと恋仲になったという祖父の話の真実を知るため、月へ渡るべく宇宙船を掘り出していた。

あとから到着した山師シド・ムンザが調査したところ、宇宙船は使用可能であることが判明。しか





機関砲を乱射しつつ突進するキャノン・イルフート。
民間人のウィルでは、これが精一杯の戦法だった。

しウィルはテテス・ハレにそそのかされ、すでに掘り出していたモビルスーツ「キャノン・イルフート」を手土産に、ディアナ・カウンターへ投降してしまうのだった。キャノン・イルフートは、ウィルが宇宙船を掘り出す過程で発見したモビルスーツである。しかし、保存状態があまりよくなかったのか、肩やマニピュレータ（機械の手）部分は装甲ではなく繊維素材で覆われており、モニターの調子も悪かった。武装は、右肩に搭載された5連装砲身の大型ガトリンク式機関砲と、左腕部の小

型シールドのみ。接近戦用の武器を一切装備していないことから、完全な中距離支援機と思われる。

この後、ウィルはキャノン・イルフートでキングスレーの谷に戻るが、ルジャーナ・ミリシャの「ボルジャーノン」と戦うことになってしまう。

戦闘訓練すらしたことがないウィルに、機体の特性などわかるはずもない。無謀にも接近戦を挑んだ結果、機体の両腕と頭部を吹き飛ばされて、パイロットのウィルも戦死。

月へ行くという彼の夢とともに、キャノン・イルフートは散ってしまった。

一撃離脱戦法を得意とする高性能可変機

MRC-F31(J-2126)

ムットウー

ディアナ・
カウンター

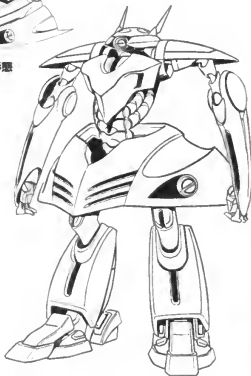
ディアナ・カウンターが地球のマウンテン・サイクルで発掘した可変機。全高30・0m弱。重量不明。主なパイロットはタイラント。

■ディアナ・カウンターが 地球で発掘

ミリシャのモビルスーツが、マウンテン・サイクルから掘り出されたものと知ったディアナ・カウンターは、新たに部隊を編成し、地層の調査を行わせていた。

そして、ミリシャが掘り出した宇宙戦艦「ウィルゲム」の離陸実験に成功したところ、ようやく過去の遺物が眠る新たな地層を発見。ここから発掘されたのが、可変モビルスーツ「ムットウー」だ。

モビルアーマー形態





ムットゥーは、ディアナ・カウンターが地球のマウンテン・サイクルから発掘した唯一の機体だった。

ムットゥーは、ハリー・オードが連れ出したキエル・ハイムや、ミリシャのウイ
ルゲムを追撃するポウ・エイジの「スモー」に随伴する。
しかし、「Vガンダム」のハンマーに絡めとられて投げ落とされたり、センサーを
飛行機の爆弾で潰されたりと、やられ役といった面が目立った。

ムットゥーは、もともと木星の大気圏上層における運用を目的としており、地球
の重力下でも飛行できる大推力をもっている。

本来ならば、手足を折りたたんだモビルアーマー
形態では、機体の外側にIフィールドを展開して開
放型ラムジェットを形成できる。しかし劇中では機
能が完全に回復しておらず、使用されていなかった。
高速を活かした一撃離脱戦法を得意とする機体で、
小回りはあまりきかない。機動性が必要となるモビ
ルスーツ戦より、対艦戦に向いた機体なのだろう。
武装には、ビームライフルを兼ねた専用のヒート
ナタがあり、両手に装備している。

飛行する可変機ながら機体性能を活かしきれず、
活躍する場面がほとんどなかったのは残念である。

ターニンX

ギンガナム
機体

月のマウンテン・サイクルで発掘されたターニン
タイプのモビルスーツ。全高20・5m。重量
50・6t。主な搭乗者はギム・ギンガナム。



■ディアナ・カウンターを
相手に猛威を振るう

月面都市ゲンガナムにそびえる
白の宮殿で、アグリッパ・メンテ
ナーとの謁見を果たしたグエン・
ラインフォードの一行。しかし、
ミリシヤの宇宙戦艦「ウィルゲム」
は、スエッソン隊の襲撃を受けて
船体を白の宮殿へつけた。

これを見たギム・ギンガナムは、
「▼ガンダム」を一気に押さえよう
と一計を案じ、月のマウンテン・
サイクルに待機させていた「ター



不甲斐ない部下たちに疼れを切らして出撃したギンガナムのターンXは、敵機を次々と倒す。

ンX」を起動させる。

ギンガナムは、自ら起動したターンXに乗りこむと、メリーベル・ガジェットが搭乗する「バンデット」とともに月面へ出撃。ギンガナムは、Vガンダムをバンデットと戦わせ、ターンXでVガンダムのデータを収集する。

しかし、月面の冬の宮殿にてアグリッパが倒され、ディアナが月の実権をとり戻したことから、ギンガナムとターンXは引きあげることにした。

ところが、ギンガナム隊を利用してディアナ・カウンターを一掃しようと考えたグエンが、ギンガナムと協定を結びウィルゲムで地球へ戻ろうとする。

ここで、ロランのVガンダムがウィルゲムを阻もうとするが、ギンガナムがターンXで出撃。本体の分離攻撃でVガンダムを窮地に追いこみ、ロランはコア・ファイターで脱出していった。

ギンガナムはウィルゲムと地球へ降下し、北アメリカ大陸の各地を制圧していくが、この間は艦隊指揮に専念しており、ターンXでは出撃していない。

しかし、ロランたちが、予備のアルマイヤー級戦

艦を整備して地球へ帰還。ディアナ・カウンターがギンガナム隊と敵対して劣勢となったことから、ギンガナムは再びターンXに搭乗する。そして、Vガンダムと最後の決着をつけるまで、数々のモビルスーツを撃破して猛威を振るった。

■多くの謎に包まれた機体

ターンXは、月のマウンテン・サイクルから発掘されたモビルスーツだ。ギンガナムはアグリッパとの会話のなかで、「ターンXのデータ解析は終わっていない」と述べており、掘り出したギンガナム艦隊でも機能のすべてを把握していたわけではなかった。

ターンXの起動には膨大な電力が必要で、首都のゲンガナム全域が停電となるほどの電力を得て、ようやく起動にこぎつけた。このことから、機体は以前から掘り出されてはいたものの、それまで起動させたことはなかったと考えられる。よってVガンダムと戦うことになるまで、誰も搭乗したことはなかったようだ。

ギンガナムはVガンダムとターンXを「ターンタイプ」と称しており、同系統の機体と考えられる。

しかし、ターンXは機体の各部を分離してオールレンジ攻撃ができるほか、Vガンダムに接触してデータをとりこむことも可能で、Vガンダムとはかなり性格の異

なる機体でもあった。

主武装は、右腕の溶断破砕マニピュレータ（機械の手）で、ビーム砲やビームサーベルとしても使用できる。また、ワイヤーのついたミニチュアクロウのほか、3連装ビーム投射システムを内蔵しており、多彩な攻撃が可能となっている。

このほか、背面にはウェポンプラットフォームであるキャラバスを装着しており、バズーカやビームライフルを搭載。さらに、機体を9つのパーツに分離してオールレンジ攻撃をしかけるため、各所にビーム砲を内蔵しているほか、足の裏にもメガ粒子砲を内蔵している。

また、ヲガンダムと同じくナノスキンの自己再生能力をもっているほか、ヲガンダムのデータを取りこんだことで、月光蝶システムも使用できるようになった。

黒歴史時代にはヲガンダムと戦ったというターンXは、不明な点が多い機体だ。最後の決戦でヲガンダムと相打ちとなった際も、糸状の物体に包まれて繭のようになっていた。多くの謎を抱えたまま、ターンXは再び封印されてしまった。



ヲガンダムと月光蝶を発動させながら戦うターンX。
再び黒歴史を招きそうになる。

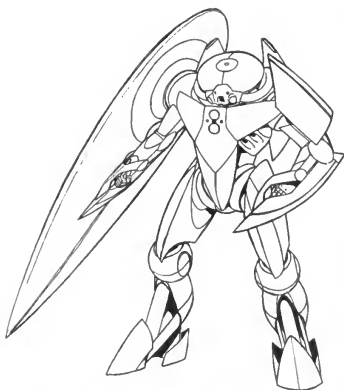
スモーを凌駕する遠距離戦闘用モビルスーツ

G338

マヒロー

ギンガナム
艦隊

月面都市ギンガナムを守備する、ギンガナム軌道艦隊の主力機。全高16・0m。重量7・0t。主な搭乗者はスエツソン・ステロ。

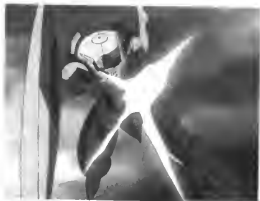


■ギム・ギンガナム軍の 正式主力機

ミーム・ミドガルドに拉致されていたディアナ・ソレルは、宇宙艦「ジャンタルム」を脱出。アステロイドコロニー「ミスルトウ」へと逃げこんだ。

このとき、ディアナを捕らえようとするギンガナム艦隊から追撃隊として派遣されたのが、スエツソン隊の「マヒロー」であった。

マヒローは、ギム・ギンガナム率いる軌道艦隊の主力モビルスー



地球の重力下でも飛行が可能なマヒローは、空中からの攻撃でミリシャの部隊を苦しめた。

ッで、円盤状の頭部と右肩に装着された大きなシールドが特徴。機動力に優れており、地球の重力下でも飛行可能なほどの大推力を備えている。また、単独での大気圏突入も可能となっており、かなり高性能な機体である。

コクピットは、ほかのモビルスーツと同様シート型のものだが、駆動システムに使用されている人工筋繊維は、搭乗者の筋電信号を捉えて動きを直接トレースできる。

このことから本来の操縦方法には、搭乗者の動きを直接機体に反映させる、モビルトレースシステムを使用していたのではないかという説もある。

武装は、右肩の大型シールドに内蔵されたメガ粒子砲のほか、左手に半固定式のカタラーを装備しており、つま先とかかとの部分はクローになっている。また、徹甲弾を発射するハンドガンも装備できる。

マヒローは「スモーク」を凌駕する機体だったが、パイロットの実戦経験不足から能力を出し切れなかった。兵器がいかにか活躍するかは、結局パイロットの腕次第であるというよい例だろう。

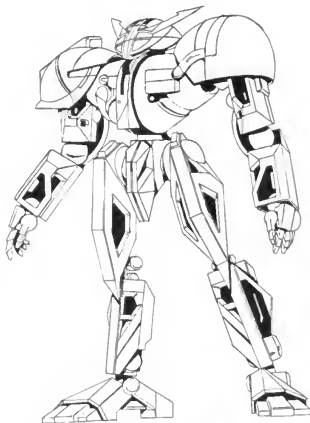
元は犯罪に対処するための公安警察用モビルスーツ

G-M1F(XM-0754)

バンデット

ギンガナム
機体

月のマウンテン・サイクルで発掘された機体。
全高18・0m。重量7・9t。主な搭乗者はメ
リーベル・ガジェット。



■搭乗者を

殺傷しないための装備

ミリシヤの宇宙戦艦「ウィルゲム」は、月面都市ゲンガナムへ到着する。

だが、「Vガンダム」を手に入れんとするギム・ギンガナムの策略により、ロラン・セアックは「タインX」と戦うことになってしまふ。

そして、月面へ出たVガンダムの前に、タインXと随伴する「バンデット」が現れた。



モビルスーツ戦を想定した機体だけに、Vガンダムでも簡単には撃退できなかった。

バンデットは月のマウンテン・サイクルで発掘されたモビルスーツで、もともとはモビルスーツを使用した犯罪に対処するための公安警察用の機体だった。

機体のフレームから染み出すナノマシンを硬化させて耐弾性能を得る分泌装甲（ウーズィ・アーマー）を搭載しており、かなり頑丈な機体となっている。

武装には、ビームサーベルを装備しているほか、機体の両肩後部にミサイルポッドを装備。さらに、背面中央には大型のパイロンが装着されており、スクイーズ兵器と呼ばれる数多くの武器を搭載できる。

スクイーズ兵器は、20発の小型ミサイルを内蔵した大型ミサイルをはじめ、先端にクローをもつ40mのワイヤー6本を備えた捕獲用クローや、ヒートホークのエッジがついた裁断武器などがそろっている。これらの装備は、いずれも搭乗者を殺傷することなくモビルスーツを破壊するためのもので、対モビルスーツ戦での効果は絶大といえる。

なお、VガンダムとターンXが共鳴現象を起こした際、バンデットにも反応があった。そのため、何らかの関連があると思われるが詳細は不明である。

格上のスモークを2機も撃破した実力機

G-M2F(AMX-1002)

ズサン

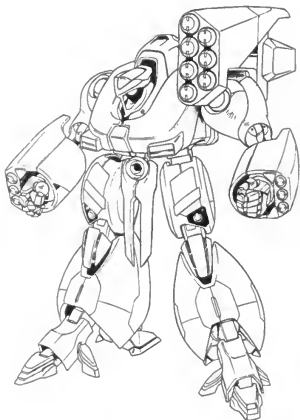
ギンガナム
艦隊

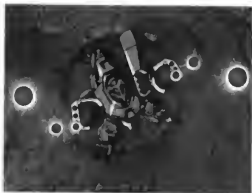
ギンガナム艦隊が、月のマウンテン・サイクルで発掘したモビルスーツ。全高15・0m。重量28・7t。主な搭乗者はカシム、ダイミヨウ。

■多数のミサイルで 敵を圧倒

黒歴史のデータをもち出したグエン・ラインフォードは、ギム・ギンガナムと手を組み、宇宙戦艦「ウイグルゲム」で地球へと向かう。

ロラン・セアックからその報告を受けたディアナ・ソレルは、ウイグルゲムの追撃を決意。親衛隊の予備艦で地球へ向かうことにし、宇宙港で予備艦の整備をはじめた。しかし、ギンガナムが残っていたギンガナム艦隊の残留部隊が、





ズサンは多数のミサイルを搭載しており、単純な火力だけでなくかなり強力な機体といえる。

親衛隊の予備艦を破壊するため「ズサン」で出撃。この動きを察知したハリー・オードは、ロラン・セアックらと迎撃に出る。一方、残留部隊のズサンは、3機ずつに分かれて宇宙港の入口に向かう。しかし、待ち受けていたハリー以下、親衛隊の「スモー」やロランのコア・ファイターとの戦闘で全機撃破されてしまった。

ズサンは、月のマウンテン・サイクルから発掘されたモビルスーツ。旧文明時代の「ズサ」（機動戦士ガンダムZ）で登場した機体）に似ており、左肩の大型ミサイルポッドをはじめ、前腕部や大腿部など機体の各所にミサイルを装備していた。

ビームサーベルはもっていないが、脚部外側にアンカーワイヤーを装備。手首に伸縮機構を備えており、手の甲のナックルカバーと併用して目標に打撃を加える。

白兵戦にも対応した装備だが、あくまでミサイルでの遠距離支援が本来の役割である。

スモーを2機撃破できたのは、あくまで親衛隊員の経験不足によるもの。コア・ファイターのミサイルでも戦えたのが、その証明といえる。

黒歴史の遺産が主力となった正暦の戦争

劇中の舞台となる「正暦」の時代では、地球の文明レベルは西暦時代の一九〇〇年代初頭辺りとなっている。燃料電池の水素ペレットとなる、再利用が可能なフロジストーンや、太陽の光で発電する太陽光発電芝といった、黒歴史時代の残存技術は普及しているものの、多くの人々はその技術の出自すら知らない有様であった。

ムーンレイスが北アメリカ大陸に降下をはじめたとき、地球側の軍隊としてミリシヤがあつたが、これは技術革新を進めたイングレッサの領主グエン・ラインフォードが、ムーンレイスの存在を知ってから編成したもので、それまで軍隊はなかったのである。

こうした事情から、当初ミリシヤにはモビルスーツなど存在せず、機械的な乗り物といえば装甲車や複葉機くらいであった。

しかし、ディアナ・カウンターが地球へ降下した際、「マガンダム」がホワイトドールの石像から出現したことを受けて、グエンはマウンテン・サイクルの発掘調査を進め、モビルスーツ「カプル」を発見。これを受けて、イングレッサ西のルジャーナ領でも調査が進められ、「ボルジャーノン」が発掘されている。

▼ガンダムの出現が契機とはいえ、ミリシャがモビルスーツを手にしたのは、グエンの力あってこそといえるだろう。

地球で科学技術の多くが失われた一方、月に住んでいたムーンレイスは高度な技術を維持していた。これは、月面という場所から生活環境の保持に科学技術は必須だったため、技術を封印するわけにはいかなかった事情もあるだろう。

よって軍事利用の技術開発は停滞しており、独自に開発したモビルスーツは「スモー」や「マヒロー」などわずか。地球への帰還作戦で新たに投入されたディアナ・カウンターの機体といえば、地球のマウンテン・サイクルから掘り出した「ムットウー」のみである。

もっとも確たる敵もない状況では、「ベロナ」のような作業機械のほうが必要なので、当然といえば当然といえる。

唯一の例外はギンガナム艦隊で、彼らは月のマウンテン・サイクルで発掘作業を行っていた。「ターンX」や「バンデット」、「ズサン」といったモビルスーツを早くから保持していたが、種類自体は少なかった。

それぞれの事情から、ムーンレイスと地球人類の戦いは黒歴史時代のモビルスーツが主力であった。地球側の機体は火力で大幅に劣っていたが、もし地球でスモーに匹敵する機体が大量に発見されていたら、全面戦争になっていたに違いない。

そう考えると、発見されたのがカブルとボルジャーノンでよかったのだ。

編集	株式会社レッカ社 齊藤秀夫 鈴木大樹
ライティング	サデスパー堀野 野村昌隆 桃原郷 土屋俊一郎 破勢天輝
本文デザイン	和知久仁子
DTP	Design-Office OURS
協力	株式会社サンライズ
プロデュース	越智秀樹 (PHP研究所)

【主な参考文献】

『GUNDAM FILM BOOK SERIES 4 新機動戦記ガンダムW コンプリートフィルムブック』（旭屋出版）／『機動戦士ガンダム MS大全集2009 MOBILE SUIT Illustrated 2009』（アスキー・メディアワークス）／『新機動戦記ガンダムW MSエンサイクロペディア』（一迅社）／『GAKKEN MOOK アニメVスペシャル 新機動戦記ガンダムW ENDLESSWALTZ』（学研）／『NEWTTYPE100% COLLECTION28 新機動戦記ガンダムW』（角川書店）／『コミックボンボンスペシャル100 新機動戦記ガンダムW パーフェクトアルバム』、『コミックボンボンスペシャル109 新機動戦記ガンダムW 公式MSカタログ』、『コミックボンボンスペシャル111 機動新世紀ガンダムX 公式MSカタログ』、『テレビマガジンデラックス62 決定版新機動戦記ガンダムW超百科』、『テレビマガジン特別編集 機動戦士ガンダム大全集PartII』、『マガジンノベルズスペシャル 新機動戦記ガンダムW外伝〜右手に鎧を左手に君を〜』新川ゆか（以上、講談社）／『機動戦士ガンダム画報』、『PERFECT ARCHIVE SERIES 10 新機動戦記ガンダムW』（以上、竹書房）／『新機動戦記ガンダムW設定記録集Part-1』（ムービック）／『DENGKI COMICS データコレクション1 新機動戦記ガンダムW』、『DENGKI COMICS データコレクション15 機動新世紀ガンダムX』、『DENGKI COMICS データコレクション16 機動武闘伝Gガンダム』、『DENGKI COMICS データコレクション20 ヴガンダム』、『DENGKI ENTERTAINMENT BIBLE 機動武闘伝Gガンダム大図鑑』（以上、メディアワークス）／『ラポートデラックス 新機動戦記ガンダムW大事典』（ラポート）

本書は、書き下ろし作品です。

編著者紹介

株式会社レッカ社（かぶしきがいしゃ れっかしや）

編集プロダクション、1985年設立。ゲーム攻略本を中心にサッカー関連、ファッション系まで幅広く編集制作する。代表作としてレトロバイブル『大百科シリーズ』（宝島社）や、シリーズ計600万部のメガヒット『ケータイ着メロ ドレミBOOK』（双葉社）などがある。『永遠のガンダム語録』『ガンダム顔 大事典』（カンゼン）をはじめ、『ガンダム人物列伝』『ガンダムMS列伝』（PHP文庫）など、ガンダム関連本も多数編集制作。現在『ジュニアサッカーを応援しよう!』を雑誌、ウェブ、ケータイ公式サイトで展開中。

PHP文庫 ガンダムMS列伝Ⅱ

2009年11月18日 第1版第1刷

編著者	株式会社 レッカ社
発行者	江口 克彦
発行所	PHP 研究所

東京本部 〒102-8331 千代田区一番町21

文庫出版部 ☎03-3239-6259(編集)

普及一部 ☎03-3239-6233(販売)

京都本部 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11

PHP INTERFACE <http://www.php.co.jp/>

印刷所	図書印刷株式会社
製本所	

©創通・サンライズ 2009 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合は弊社制作管理部(☎03-3239-6226)へご連絡下さい。

送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN978-4-569-67358-5

ガンダムMS列伝

モビルスーツ

株式会社レック社 編著

ガンダム、百式、キュベレイ、サザビー……。『機動戦士ガンダム』シリーズ4作品に登場するモビルスーツ90体を列伝形式で収録！

定価680円
(本体648円)
税5%

ガンダム「武器・防具」伝

株式会社レック社 編著

モビルスーツにとって不可欠な存在である武器と防具。ガンダムシリーズ6作品に登場する163アイテムをエピソードを中心に徹底解説。

定価680円
(本体648円)
税5%

ガンダムMS列伝

モビルスーツ

株式会社レッカ社 編著

II



PHP文庫

ガンダムMS列伝Ⅱ

株式会社レッカ社 編著



PHP文庫



ISBN978-4-569-67358-5

C0179 ¥648E



定価：本体648円(税別)

モビルスーツ
ガンダムMS列伝Ⅱ

株式会社レッカ社 編著

大好評『ガンダムMS列伝』の第2弾!! 本書では『機動武闘伝Gガンダム』『新機動戦記ガンダムW』『新機動戦記ガンダムW Endless Waltz』『機動新世紀ガンダムX』『Vガンダム』に登場するモビルスーツ104体の性能から劇中エピソードまでをあますことなく紹介している。宇宙を雄々しく駆けた機動兵器たちの輝かしい活躍が楽しめるガンダムファン垂涎の一冊。文庫書き下ろし。



PHP文庫

株式会社
レツカ社
編著

ガンダム
MS

モビル
スーツ

列伝

II



P
H
P
文庫

れ
2
17

株式会社
シッカ社
編著

ガン
ダム
MS
列
伝
II

モビル
スーツ



P
H
P
文
庫

648